
作業服ガール

冴木 昂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
作業服ガール

【Nコード】
N0181M

【作者名】
冴木 昂

【あらすじ】
愛子は電力会社に勤めるOLだ。青い作業服に身を包み、男性職場で働く彼女の苦悩と淡い恋心をコメディータッチで書きました。

作業着のOL

完全に遅刻だった。いや、遅刻という表現は間違っている。会社の始業時刻は八時四十分で、今はまだ七時三十分なのだから。でも、愛子の中では、今この時間に電車に揺られているという事が有り得ない事態だった。いつも七時三十分には自分の部署に居るというのに。

定期の期限が昨日で切れることは、昨日の朝の段階では気付いていた。でも帰りにはすっかり忘れてしまっていたのだ。今朝最寄り駅で自動改札にタッチした途端にブザーが鳴り、ゲートが閉まった。あれほどバツの悪い事はない。後ろに居た大勢の人が、そろそろと別の改札へ散らばってゆく。時折チツと舌打ちする者も居た。

仕方ないじゃない、わざとじゃないんだから！

心の中で叫びながらようやく定期を購入し、あわてて飛び乗った電車は、いつもよりもずっと遅い時間で、いつもよりずっと混んでいた。

電車が駅に到着した。先を争うように降りるサラリーマンやOLと共に、愛子は混雑するホームに吐き出された。むっとする熱気に、早くも背中が汗ばんだ。ラッシュで乱れた髪を撫で付けながら、駅の階段を小走りに降りる。降りながらバッグのポケットに手をつっ込んでむき出しの定期券を引っ張り出した。自動改札のパネルにタッチし、開いたゲートを通してホツとする。

早歩きで駅を出ると、人波を追い越しながら大通りをめざす。歩行者用の信号機が点滅し始めた横断歩道を一気に駆け抜けた時点で、ようやく愛子は歩みを弛めた。駅から会社まではバスで停留所三つ、急ぎ足で仲通りを行けば二十分弱の道のりだ。この分なら八時前には着くだろう。

国道を右手に見ながら、大きな公園の角を左折する。びっしり植わったつつじの生垣の一箇所に、人が通れる隙間が開いているのは、

この道を利用する人の大半が知っている。そこから公園内を一気に突っ切ると、かなりの時間短縮になるのだ。愛子は植え込み伝いに歩きながら例の通り道を探した。冬場はすぐに見つけられたが、季節は夏。つつじはいつの間にか花を散らし、濃い緑の葉を増やして秘密の抜け道を隠そうとしている。

愛子は強引に隙間を通り抜けた。シュツとふくらはぎに枝が擦れる感触がした。嫌な予感に立ち止まって、フレアスカートの裾をちょいと摘まむ。右のふくらはぎを見ると、見事にストッキングが伝線していた。急いでいるときに限って、こんな事があるのだから、本当に嫌になる。

公園を突っ切り、最近整えられた遊歩道をせかせかと歩くと、緑眩しい桜並木の向こうに会社の看板が見えてきた。

『帝都電力』

東証一部上場の一流企業と人は言う。電力を使わない生活なんて有り得ないから、関東一円に電力事業を展開している帝都電力は、公共性の高い優良企業だ。従業員総数四万人、下請け、協力会社を併せると、いったい何人の人間が働いているのか、入社二年目の愛子には見当もつかない。この就職難の時代に、そんな大企業に入社できた事自体が奇跡に近いと父も母も言うが、愛子は違った。

入社して一年三ヶ月、今の職場に配属されてもうすぐ一年、思うことはいつも一つだった。

いっそ不合格にしてくればよかったのに。

社員通用口のセキュリティロックに自分の社員証をスキャンすると、カチリと音がしてロックが解除された。するりと滑り込んで、右手の階段を一気に三階まで駆け上がる。女子更衣室の扉を開けると、すでに先客が居た。高さ五センチの黒いヒールがきちんと揃えられている。愛子は息を弾ませながら畳敷きの更衣室に上がりこんで、先輩社員に挨拶をした。

化粧を直しながら振り向いた女性は、驚いたような顔になった。

「上田さん、どうしたの？ 今日随分遅いね」

「はい、ちょっとトラブルで……」

愛子は言葉少なに言って制服に着替え始めた。いつも早めに出勤するのは、誰にも会いたくない、というのも理由の一つだった。幸い今更衣室に居るのは自分と桜井園子だけだ。桜井なら、二十名ほど居る女子社員の中では、気心が知れているほうなので、他の誰に会うよりまじだった。破れたストッキングを脱いで、紺色の作業ズボンに足をとおす。ちらりと横を見ると、桜井と目が合った。

彼女はふっと視線を逸らすと、紺色のタイトスカートの埃を払う仕草をした。長いストレートの髪がはらりと胸元に落ちる様子に思わず見とれてしまう。白い制服のブラウスに企業のマーク入りの赤いボンタイが目立つ。

ロッカーから事務員用のグレンチェックのベストを取り出して羽織ると、桜井は化粧ポーチの入った小さなブランド物のバックを手に、優雅な仕草で更衣室を出て行った。

愛子はため息をついていた。同じ事務職として採用されているのに、どうして桜井や他の女子社員と自分は違うのだろうか？

愛子は、ロッカーから自分に支給されている制服を取り出して顔をしかめた。黒いＴシャツの上に制服を身に付けて、誰も居ない更衣室の姿見に自身の姿を映してみる。作業ジャンパーに作業ズボン。先ほどの桜井と同じ会社のＯＬとは到底思えないスタイルだ。愛子は鏡に近付いて、長めの前髪を黒いヘアピンで留めた。

「早く伸びないかな、髪の毛」

この事業所に配属された当時はショートカットだった髪は、ようやく肩口まで伸びたが、まだまだこれでは納得がいかない。紺の作業ズボンは、ストッキングが破れた今日に限ってはありがたかったが、野暮ったくて裾も長くて、愛子は今の自分の姿が大嫌いだ。上に羽織った紺のジャンパーも、まったく愛子の体には大きすぎた。先ほどの先輩社員、総務課の桜井に頼んでサイズ変更をお願いしているが、一向に品物は届かなかった。

「私も、本社の方に催促したんだけどね、上田さんのサイズは小さ

すぎて規格外だから時間がかかるんですって。ごめんなさいね」

いたわるように言われてしまい、それ以来もう催促でなくなっていました。あれから何ヶ月経ったのか。きっと桜井は忘れてしまっているに違いない。

せめて中に着るものだけは可愛くしようと、ピンクのＴシャツを着ていたら、つい先日、相良副長に叱られた。

「いくら内勤だからって、お客様の目に触れる可能性があるのだから、中のシャツも白、あるいは黒か紺にきなさい。まったく今どきの若い子は、常識が無い……」

相良の言葉を思い出して、愛子は唇を噛んでいた。

相良みつ子はこの事業所でただ一人の女性の管理職だ。推定年齢は五十代前半、本来なら女子職員の代表になって職域拡大の先陣を切って男性職員と戦って欲しいと皆思っていたが、最近ではそんな事を言う人も居ないのだと、いつか桜井が言っていた。愛子がＴシャツのことで叱られたのを聞いたとき、普段は温厚な桜井が、まるで自分のことのように怒ってくれたのを思い出す。

「相良副長は女性とはいえ、中身は男性より男性らしいというか……。おしゃれとか、私たち女の気持ちとかが、あまりわかっていないじゃないのよ」

そう言って慰めてくれる桜井を、愛子は密かに冷めた目で見ていたのだったが。

再び鏡の中の自分を見つめる。なんだかんだ言ったって、桜井もほかの女子社員も、こんな制服は着ていない。

こんなダサイカッコしてるのは、相良のオバサンとあたしだけなんだから！

更衣室の外が賑やかになった。八時を回り、ようやく他の女子職員たちが出勤してきたのだ。

愛子は大きな手提げ袋に貴重品一式と弁当の包みを突っ込んで、運動靴を履いた。かかとをつぶしたままで、愛子は逃げるように女子更衣室を出た。

階段を一階まで下り、先ほど入ってきた社員通用口から外に出ると、料金課の飯田と鉢合わせした。

「よう、おチビ。あとで仕事頼みに行くから、工事長のご機嫌取ってくれよな」

頭の上から物を言う男性社員に、愛子はつつけんどんに言い返した。

「おチビなんて人、ここには居ないよ」

飯田は長い前髪をかき上げると、一瞬驚いたような顔になったが、「ははは」と楽しそうに笑った。

「んじゃ、愛ちゃんが良い？」

背の高い飯田は、わざと前かがみになって愛子の顔を覗き込んだ。くつきり二重の奥から、涼しげな瞳が見つめてくる。顔が接近してちよつときめくシチュエーションと言えなくもない。

が、しかし！ 身長百五十センチの愛子と百八十センチを超える飯田では、まるで大人が子供に話しかけるような仕草だった。いつの間にか飯田の顔に見とれていたことに気付き、愛子はうるたえつつ言い放った。

「同期だからって、馴れ馴れしくしないでください！」

同期と言っても、飯田は愛子より三つも年上だった。短大卒の愛子より三つ上。四大卒でもストレートならその差は二歳のはずなのだ。多分一浪しているのだろう。今どきは珍しい事じゃない。

「いいじゃん、別に馴れ馴れしくしても。同じ作業服仲間ということで……」

「好きで着てるんじゃないわよ！」

言うなり、愛子は飯田にくるりと背を向けて歩き出した。

「おチビイ、ズボンの裾、めくった方がいいぞ」

飯田の声を完全に黙殺し、愛子は建物の裏へ向かって憤然と歩いて行った。

女子更衣室のある本館の裏手に、広い駐車場がある。そこには帝

都電力のロゴ入りのトラックや高所作業車、電源車などが何十台も停まっている。作業車の周囲には、愛子と同じ紺色の作業着に身を包んだ男性社員たちが忙しそうに行き来していた。みな若いおにいちやんばかりだ。男性社員に混ざって、相良みつ子女史の小太りの背中が見えた。相良は愛子と同じ紺の上下の作業着姿だった。しかも、彼女は短い足に皮の半長靴を履いて、ご丁寧ヘルメットまで被っている。恐ろしく似合わない。みつともない事この上ないのに、相良はあのスタイルがお気に入りらしいのだ。まったく、彼女の神経にはついてゆけない。自分の作業着姿も嫌いだったが、相良の姿はもつと嫌いだった。

彼女は車輛点検の様子を監視しているようだった。車輛点検は、朝のミーティングも兼ねているので、本来なら愛子も参加すべきなのだが、今さらのこのこ出て行って、相良のお説教を喰らいたくはない。

愛子は見つかからないように駐車車輛の間を縫って歩いた。

駐車場の一画に、プレハブの事務所がある。そこが愛子の部署、工事課だった。雨の日は本館へ行くのに傘を差さなければならない。そんな離れ小島のような部署に、女性社員は愛子一人きりだった。同じ作業着の相良女史は、配電課というところに所属している。愛子たち工事課が現場第一線ならば、配電課は設計や設備管理を担当する管理部門だった。仕事的には密な関係だが、まったく別のグループなのだ。配電課のある場所も、本館の二階なので、このプレハブとは離れている。それなのに、相良はしょっちゅう愛子たち工事課の仕事に口を挟みに来た。若い男の子としゃべりたいから寄ってくるのだ、などという噂があったが、真相は定かでない。

相良は口うるさいので、彼女と同じ職場になるくらいなら、たとえ離れ小島でも一人のほうがましかもしれない。なんて、かなり虚しい気もするけれど……。

一年前、新入社員研修が終了してこの事業所に配属になった時は、期待で胸いっぱいだった。数ヶ月間の研修期間は、OLには欠かせ

ない電話応対や接客、電気料金のシステムの勉強やパソコンの訓練を受けた。帝都電力の所有する原子力発電所にも見学に行った。地下に埋設されている電力ケーブルを管理する、地下共同溝の管理施設にも研修に行った。もちろん、東京の一等地にある本社ビルにも足を踏み入れた。そこでは帝都電力の女子職員の制服　白いブラウスに赤いリボんタイ、グレンチェックのベストに紺のタイトスカートの姉さまたちが忙しく働いていた。

みな踵の高いヒールをカツカツ言わせながら、近代的なオフィスビルの中を颯爽と歩き回っていた。

「ああ、これがOLなのね」

愛子はタイトスカートの自分を想像してうつとりした。思えば、この時がすでにOL生活の頂点だったのだ。愛子はキュツと唇を噛んだ。頂点がすぎれば、後は遅かれ早かれ落ちてゆくのみ……。しかも急勾配だった。

研修が終われば、憧れのOLスタイルの自分がそこに居る！　そう信じて疑わなかった。そんな自分が可哀相すぎる。まさか、OLの自分が、作業ズボンに野暮ったいジャンパーを着込む事になるなんて。

総務課長から配属辞令を受けたときの事がありありと甦る。そのとき愛子は何を言われたのかわからずにぼかんと口を開けていた。

「上田愛子さん、配属は工事課」

「へ？」

元々事務職として採用された愛子だ。そういう女子社員の配属先は、たいてい接客を伴う営業課か、広報、もしくは電力料金を扱う料金課だと相場が決まっていたからだ。工事課と言えば、電柱に登って作業する現場作業員の居る部署だ。ここに配属されるのは「帝都学園」という、帝都電力の技術者を養成する工業高校の出身者が殆どだった。ちなみに帝都学園は全寮制の男子校だ。

なんで、普通の短大卒のあたしが……？

放心状態の愛子に、総務課の桜井が紺色の上下を手渡して言った。

「これが工事課の制服よ。明日からこれを着用してくださいね」
嫌だ嫌だと思いつつ、時は流れ去り……。

そして一年が経った。

惨めな思いを振り払うように、愛子はプレハブのドアを開けた。
酸っぱいような、独特の臭いが鼻をつく。

「ああ、やっぱり」

フロアの片隅にある応接セットのソファには、漫画雑誌と空になったスナック菓子の袋が放り出してあった。テーブルの上には店屋物のどんぶりがうず高く積み上げられ、ペットボトルのコーラが半分入ったままひっくり返っている。思わず眉根を寄せた愛子に、中年の男性が声を掛けてきた。

「愛ちゃん、おっはよ」

愛子の上司である堤主任が、赤ら顔に人の好さそうな笑みを浮かべて近付いてくる。愛子は机を回り込みながら、堤の進路から外れるように移動した。

「主任、この間お願いした事、宿直の人に言っといってくれていないんですか？」

応接セットを指さす愛子に、堤の顔から笑顔が消えた。代わって叱られた子供のような表情が浮かぶ。

「ごめんね、すっかり忘れてたよ。今度、今度は言うから。全体会議のとき。ね！ 自分たちの食べた後片付けも出来ないなんて、社会人たる者、ねえ。うん、言う言う」

愛子は大きく息を吐いた。もう何度も言っているのに、一向に改善されないのだから、今回も口だけだろう。彼女は黙って応接セットの周囲を片付け始めた。

工事課の人間は宿直がある。総勢三十五名の現場作業員が七班に分かれて休日祭日関係なく昼も夜もここに常駐している。本人たちの自覚の問題だといつも愛子は思うのだが、若い男の子たちは特に公私混同が甚だしい。夜間作業が無かった時など退屈するのはわか

るが、職場の一面をまるで自分たちの部屋のように思っているのだ。漫画本を散らかし、飲み食いしたのも片付けず、時には携帯ゲーム機が放りだしてあることもあったが、上司である堤は寛大なのか面倒臭いのか、まったく注意しなかった。堤より上の職責に当たる佐々木工事長に、個人名を挙げて報告するのは簡単だが、みな愛子より先に入社した先輩だし、第一、直属上司の堤が見て見ぬふりをしている以上、愛子にはもう何もする事は出来ない。放っておけば、きっと上司も堪りかねてどうにかするに違いないと思い、最初の頃は気付かぬふりをして散らかったものをそのままにしていた。しかし、慣れとは恐ろしいもので、鼻につくような酸っぱい残飯の臭いにも誰も何も言わないのだ。そしてこの職場の人間は、時間になると皆現場作業へ赴く為にこのプレハブの建物を出てゆく。がらんとした事務所に残るのは愛子と堤と工事長の三人だけだった。

どうしていつも私が！

最近では「もうこれは自分の仕事」と割り切って、早めに出勤して始業時間前に片付けるのが愛子の日課になっているのだった。

応接セツトの床にこぼれたラーメンの汁を拭き取っている愛子を、佐々木工事長が大きな声で呼んだ。佐々木は工事課で一番偉い。

「おい、上田さん、お茶くれ」

「はい、ただいまお持ちします」

愛子は立ち上がると、フロアの隅から新幹線の車内販売のようなワゴンを引っ張って来た。二段あるワゴンの天井には、工事課全員のマイカップ三十八個がずらりと並んでいる。愛子はその中から佐々木工事長専用の湯飲みを手にとった。寿司屋の粗品のような湯飲みは、佐々木の体型と同じでこつくて大きい。

愛子はその他のカップをいつものようにグループ分けした。お茶グループ、紅茶グループ、コーヒーマグループ。コーヒーマはさらに砂糖有りと無しに分けなければならない。恒例の、朝のお茶汲み。これが仕事かと問われれば、答えに詰まるのだが、恒例になっているし、頼まれると断れないから仕方がない。

いらいらしながら陶器を力チャ付かせていると、媚びるように堤主任が擦り寄ってきた。

「愛ちゃん、今日は遅かったね。お休みかと思ったよ」

彼は決して悪い上司ではない。しかし、年齢のわりには威厳が無いのだ。

「すみません。私だって遅れることぐらいあります。遅刻したわけではありませんから、問題ないですよ」

「もちろん！　ただ、無線がさ、僕一人じゃ困っちゃうからね。ポカ休だけは勘弁してよね」

愛子はぺこりと一礼すると、大急ぎでワゴンを押して給湯室へ行った。

愛子の仕事は無線指令だ。こう言うとかっこいいが、いつ入るかわからない無線を待つて、一日中無線台に座っているのは、退屈な上に苦痛だった。なんといっても困るのはトイレだ。その点堤主任は気さくでよかった。自分の父親とたいして年が変わらないせいもあるし、堤の「好いおじさん」的な笑顔が、そういう事を言い易いのだ。

このK事業所は、関東でも一番古い事業所で、設備も都内の各事業所とは比べ物にならないくらい古い。今どきは携帯やパソコンが普及しているから、仕事を無線で連絡し合っている事業所は数えるくらいしか無い。もうあと何年かすると、愛子の仕事は無くなるだろうと、陰で女子社員の先輩たちが言っているのを聞いたときには悲しくもあり、またどこか嬉しくもあった。無線指令の仕事がなくなれば、ひょっとして別の部署に異動できるかもしれないからだ。どこの係りがいいなんて、贅沢な事は言わない。ここでなければいい。あの女子社員本来の制服を着ることが出来る場所であれば、どこでもいい。

無線台に座ってばけっとしていると、早速一番のランプが点滅した。ランプの下ボタンを押してマイクで素早く応答する。

「帝都一、感あり、どうぞ」

『Aブロックに出向します、どうぞ』

ザーザーと雨のような雑音が入って聞き取りづらいが、もうすっかり慣れた。

「帝都一、気をつけて作業願います」

『帝都一、了解です』

「願います、帝都K、以上」

このやり取りを帝都七まで、六班ぶんを繰り返す。ひと班は必ず宿直に当たっているから、朝になると帰宅してしまう。なので、日中は常時六班が活動していることになる。この無線のやり取りは、毎朝の儀式のようなものだ。緊急事態など滅多に無いから、無線の受信具合を点検する程度の役にしか立たない。

「願います、帝都K、以上」

全ての応答が終了すると、駐車場には作業車が殆ど見えなくなつた。愛子はほつと一息ついて窓から室内へと視線を戻した。

「あの、すみません、佐々木工事はいらっしゃいますか？」

声を掛けられて振り向くと、出入り口にスーツ姿の若い男性が立っていた。

この飯場のようなプレハブに来る人間は、下請け会社の作業員か、本館から仕事を頼みに来る社員ぐらいしか居ない。いずれにしても、スーツを着ているような人間は滅多に足を踏み入れる事はないのだ。男性は工事課のフロアをぐるりと見渡した。切れ長の目が鋭い。彼はふと愛子の背後で点滅するランプに目を留めた。

「きみ、無線担当でしょう？ 発雷中のランプが点いたら、すぐに現場の作業員に知らせるべきだよ」

「あ……でも、このランプは毎日点灯しているから、別に……」
彼女はどきりとした。男の言い方は、何だか責めているようだし、妙に業務にも詳しい。若いけれど、ひょっとして、協力会社のお偉いさんだろうか？

愛子は自分の背後を振り返った。

【発雷中】の表示が点滅しているボードは、管轄内の雷雲の動きを察知して知らせる装置だが、ここ数日はいつも点滅している。「装置が古い上に、夏場は積乱雲が発達しやすいからなのだ」と、堤はたいして気にも留めない。愛子も最近は風景の一部のように見過ごしている。

彼は、今度は奥の壁に貼ってある本日の作業予定表を指さした。
「活線作業、入っている班があるじゃないか。落雷したら危険だ。早く無線、入れろよ！」

愛子のはじかれたように動き出すと、活線作業に出向中の三班を呼んだ。

「帝都三、感ありましたら、どうぞ」
しばらくして、反応があった。

「えー、県南部で発雷中につき、気をつけて作業願います。どうぞ」
こんな指示、出したことが無いので、何と言ってよいかわからない。受けた方も一瞬戸惑ったような反応を見せた。

「……帝都K、それだけ、ですか？」

声の主は、いつもソファを散らかす若手のうちの一人らしい。間抜けな反応だ。愛子は開き直って再び繰り返した。

「発雷中につき、気をつけて手持ち続行願います。帝都K、以上」
「……………」了解の言葉もなく、無線のむこうが沈黙したままだ。彼らも愛子同様、無線のやりとりは儀式のような感覚でしかない。込み入った事態が発生すると、いつも班の責任者である班長から、堤主任宛に携帯で連絡がくるのだ。それがここ、K事業所の工事課のやり方なのだ。

マイクに向かったまま固まっていると、背後でスーツの男性が冷たく言った。

「必要事項を伝えたら、さっさと切れ」

愛子は冷や汗をかきながらスイッチを切った。恐る恐る振り返ると、男性と目が合った。彼は鋭い目つきで何か言いたそうに愛子を見たが、ふっと視線を横に逸らした。

「あの……あなたは、いったい……？」

言いかけて、愛子の目は男性の右手に釘付けになった。

……小指が、無い？

固まっていると、堤主任がにこにこ顔で声をかけてきた。

「ああ、氷室くん。早いじゃないか」

堤はスーツの男性を応接セットに手招きした。

「あ、いけない！」

愛子は慌てて席を立ち、応接セットに走った。作業員たちが散らかした漫画雑誌がまだそのままになっている。来客をこんな汚いところに座らせる訳にはいかない。

あたふたする愛子に、堤は「まあまあ」と呑気に声をかけた。

「愛ちゃん、いいんだよ。今、取り繕ったって、いずれわかっちゃうんだから。それよりお茶を淹れてくれないかな」

「はい、主任」

愛子は数冊の雑誌を抱えて逃げるように給湯室へ走った。多分、今自分は物凄く動揺していると思う。

電気の消えている給湯室に飛び込んだ途端にどんと何かにぶつかった。

「あ！」

抱えていた漫画雑誌が愛子の手から落ちた。よろめいて一步下がったところに、作業着姿の飯田が振り向いた。彼は落ちた雑誌を拾いながら言った。

「いてえな、おチビ。下ばつか見てんじゃねえよ」

彼の背中にぶつかったのだとようやく気付いた時には、飯田が壁にあるスイッチを押していた。蛍光灯が点灯して狭い給湯室内が明るくなった。一瞬目が眩む。

「なんでここに飯田くんが居るのよ！」

「仕事頼みに行くって、さっき言っただろ。吸ってたタバコ捨てるんで、流しの水使ってただけだ」

惘然とした表情の飯田を、愛子はまじまじと見上げた。見慣れた

彼の顔にホツとする。

今しがた目にしたスーツ姿の男性が、愛子の頭の中を占領していた。スーツ姿なのに、明らかにセールスマンではない男性は、眼光鋭い猛禽類のようだった。

怖い！

いったい、彼は何者だろう？ あの見方、目つき、怖い！ 怖すぎる！

「おい、おチビ？　なんか、顔が変だぞ？」

目の前で大きな手をひらひらされて、愛子は我に返った。

「そうよ。お茶を淹れるのよ。急がないと」

そう言っただけ飯田の腹の辺りを押しやった。よろけた飯田が舌打ちする。愛子は彼に構わず、震える手で湯飲みをつかんで、取り落としそうになった。とにかく、落ち着かなくてはと、大きく深呼吸を試みる。

「おい、何かあったのか？」

飯田が何かを察したように問いかけた。愛子はちらと飯田を見て、小声で言った。

「なんか、怖い人が居て……」

「怖い人？」

愛子はもう一度大きく息を吐くと、飯田に向き直って小指を立てた。

「小指が……無いの。目つきも鋭いし、絶対堅気じゃないっていうか……」

飯田が首をかしげている。そりゃそうだ。こんな言い方では、きっと飯田でなくても誰一人として愛子の言いたい事は理解できないに違いない。

「と、とにかく嫌な感じなんだってば！」

飯田は給湯室から顔を出して廊下の先のフロアを見やった。

「堤主任、居ないのか？」

「居るよ。その怖い人と話してる。主任のお客みたいなのよ。だから」

「あたしがこうしてお茶を淹れに……」

「なーんだ、と笑って飯田は手に持っていた書類をひらひらさせた。

「あのさあ、仕事なんだけど……」

「今忙しいの！ そうだ、飯田くん悪いけど無線台に座っててくれないかな」

「ええ？　なんで俺が？」飯田は不満げに鼻を鳴らした。

「無線空けとくわけにいかないから。飯田くん、今すぐ、大至急行つて、座ってて」

ぶつぶつ文句を言いながら給湯室を出てゆく飯田の背中に向かって怒鳴る。

「無線受けたらスイッチ押して『こちら帝都K、感あり、どうぞ』って言うんだよ。Kはここ、K事業所のことだからね」

「わーったよ！」

不機嫌な怒鳴り声が返ってきた。気にする事もない。飯田とはいつもこんな調子なのだ。飯田とだけは、と言ったほうがいいかもしれない。少々人見知りのある愛子は、未だに職場の人たちと馴染んでいるとは言えなかった。もともと男性職場の工事課で、一般事務の女性職員が出来るような仕事は殆ど無い。男女雇用機会均等法の施行を受け、近年になってようやく女性を配置するようになったのだと、労働組合の委員長が言っていた。要するに、仕方無しに女性を入れました、という態度が見え見えの、封建的な職場なのだから、愛子が馴染めないのも無理ないのだ。特に年配の男性社員たちは、愛子の事を完全にお茶汲みだと思っているし、そういう発言も日常茶飯事だった。

「ねーちゃん、お茶くれ！」「ねーちゃん、もう帰っていいよ」「ねーちゃんには無理だな」

事あるごとに歯に衣着せぬ物言いをされる。セクハラとか、そういった次元の問題ではなく、工事課の仕事は本当に愛子には無理な、技術的なことなのだからどうしようもない。それでも、言われるたびに疎外感を感じて、悲しいし悔しかった。何度辞めてしまおうと

思ったことか。

嫌味で言っているのではないだけに、黙るしかない。元来この職場に嫌なヤツは居ないのだ。一年間一緒に仕事をしてきてようやくわかった。彼らだって、愛子のような何も知らない新入社員の女の子が配属されてきて、どう接してよいのか戸惑っているのだ。実際、何人かに言われたこともあるし、仕事以外のときはみなとても優しい。

それでも時々どうしても納得いかずに悶々としてしていると、決まって声を掛けてくれるのは飯田だった。彼は仕事の関係で、毎日朝と夕方に必ずこのプレハブにやってくる。最初は馴染めず、彼に声を掛けられただけでビクビクした。しかし飯田は馴れ馴れしくて、いつも愛子を「おチビ」と呼んではからかった。背が低いのは、昔からいつも悩みのタネであり、コンプレックスにもなっていたので、愛子の中で飯田はいつの間にか「いけ好かない奴」になっていた。そんな奴には気を使うこともないし、好かれようと思わない。そう思ったときから、彼に対してだけは高校時代の友人としゃべるように、素の自分を出せるようになった。

職場も別だし、同期という特別な気安さもあり、愛子にとって彼は会社の人間の中で唯一飾らずに会話できる人物だった。

お茶を淹れて職場に戻ると応接セットに工事長の佐々木、主任の堤、そして謎の男性の三人が座って話をしていた。

「……どうぞ」

テーブルに湯飲みを置く手がプルプル震えた。スーツの男性をちらちらと盗み見る。真っ黒に日焼けした顔は、良く見れば端正と言えなくもないが、そのつり上がり気味の目があまりにも鋭くて怖い。体格はがっちりしていて、近くで見るといっそう堅気のセールスマンには見えなかった。

やはり、関連会社の人なのだろうか。

男性はお茶を出した愛子に会釈すると、右手を湯飲み茶碗に伸ばした。愛子の目が釘付けになる。やっぱり見間違いではなかった。

黒っぽくなつた小指の先が消失している。

誰なの？ 何なの？ まさか……？

愛子は三人にお茶を配り終わると一礼して自分の持ち場の無線台に歩いて行つた。途中、空のゴミ箱を蹴飛ばしてしまい、閑散とした事務所に派手な音が響いた。

横長の室内を足早に歩いて、応接セットと真逆の窓際にある無線台に着いた途端に笑われた。

「なに動揺してんだよ。笑わせるなつて」

椅子に座つたままくりと振り向いた飯田は涙目だつた。そんなに笑う事もないだろうに。

「ゴ、ゴミ箱蹴つたぐらいで、女子高生みたく笑わないでよ！」

愛子は言い捨てて、無線台の前から飯田を押し退けた。キャスターの付いた椅子に座つたまま、くるくる回りながら床を一メートルほど滑つて、彼はようやく笑うのを止めた。そして、ずるずると椅子ごと舞い戻つてくるなり言つた。

「氷室京介」

「え……！」

「……んなわけないじゃん！ 氷室……なんだっけ？ さっき自己紹介していたんだけどな、あの人」

忘れちまつた、と頭を掻く飯田を、愛子は知らぬ間に物凄い目つきで睨んでいた。自分をからかっている彼の言葉に思わず反応してしまつた事が腹立たしい。しかも、謎の男性に関する情報を聞き逃すなんて！

まつたく、なんて役立たずなの！

そう思つたとき、飯田の口から思いもよらぬ言葉が出た。

「でもまあ、すぐにわかるでしょ。だって、あの人、もうすぐここにお世話になるって言つてたし……」

「うええ？」

奇妙な声が出てしまい、愛子は自分の口元を両手で覆つた。

「もうすぐつて……、まさか、社員なの？」

飯田は愛子の問いには答える気がないようだった。彼は仕事の書類を無線台に載せると「頼むよ」と言ってニヤリと笑った。彼の態度に、またからかわれたのだろうか？　と思っただが、訊き返そうとしたときには、彼は素早く事務所から出て行ってしまった。

謎の男性は数十分後に帰った。湯飲みを片付けながら、愛子は堤主任に声をかけた。

「あの、さっきの方は？」

堤は何故か寂しげに微笑むと言った。

「今日、辞令が出るから黙ってることないな」

「え？」

堤の言葉がよくわからず、首をかしげると彼は言った。

「僕、転勤するんだ。あさってからさっきの氷室くんが後任で来るから。愛ちゃん、本当に世話になったね」

愛子は放心したように立ち尽くした。堤は決して有能な上司ではなかったが、人間的にはとても良い人だった。セクハラまがいのスキンスリップには閉口したけれども、彼は愛子にとってお父さんのような存在だった。この無人島みたいな職場で、せっかく慣れ親しんだ数少ない人物なのに、その堤が居なくなる？　そして後任が、あの眼光鋭い若鷹のような男性だなんて。

どうしよう！

しかも、あの小指の辿った運命を考えるにつけ、余計に恐ろしさが増してくる。帝都電力の社員である以上、まさかヤのつくサイドビジネスに手を染めている事はないと思うけれど、世の中には本当にいろんな人が居るのだから。

「堤主任……私、あさってからどうすればいいのでしょうか？」

情けない顔になってしまっていたのだろう。笑いながら頭を撫でる堤の手のひらが、やけに優しく労るようだった。

その日の夕方、事業所の所長から堤に、正式に転勤の辞令が下さ

れた。終業時刻になると、工事課のプレハブではささやかな送別会が行われる事になった。フロアの片隅にある例の応接セットに、つまみとビールが用意され、工事課の面々がそれぞれ自席の椅子を持ち寄って堤を囲む。普段はほとんど飲み会に参加しない愛子も、今日ばかりは堤の隣に座ってグラスを傾けることになった。

「堤主任、おめでとうございます。本店の工務部ですってね。これはまさにご栄転だ」

工事課の班長たちがとつかえひつかえ堤にお祝いを言い、彼のグラスにビールを注いだ。堤は酒焼けの赤ら顔をさらに赤くして、注がれたビールを飲み干した。

「本店じゃ、宿直が無いから給料下がっちゃうよ。住宅ローン、見直しないといけねエな。ははは」

堤は冗談を飛ばして楽しそうに笑う。愛子は逆に悲しくなってきた。何だか父親が自分を置いて出て行ってしまつようで、鼻の奥がツンとした。

新しい上司がやってきた

堤は去って行き、氷室が着任した。失意に沈む愛子の気持ちなど全くお構い無しに、いつもと変わらぬ日常が流れ始めた。

氷室は工事課の皆に挨拶を済ませると、堤の席に座った。愛子の座る無線台のちょうど真横に当たる。机の向きは愛子を監視するような形に設置されている。愛子を、というより、無線台を見るためののだが。

何だか落ち着かなくて、愛子は手当たり次第に書類を引っ張り出しては仕事をするフリをしていた。氷室は愛子など視界に入っていない様子で、堤から引き継いだ書類に鋭い視線を注いでいた。

ただ、毎朝恒例の無線の送受信のときだけ、席を立てて彼女の背後で様子を見ていた。背後に氷室が居るというだけで、愛子は緊張して汗をかいてしまった。

無線のやり取りが終わると、氷室が声を掛けてきた。

「上田さん、僕は管轄内のことを早く知りたいので、今日一日、現場作業の見学とパトロールをしてきます。申し訳ありませんが、中のこと、お願いしますね」

「あ、はい。わかりました」

氷室はマップを手に出かけて行った。愛子はホッと胸を撫で下ろした。堤はいつも事務所に居たから、氷室もそうするかと思っていたのだ。堤とは話しやすかったので、一日一緒に居てもどうということとはなかったが、氷室と二人きりでは息が詰まる。出かけてくれて良かった。

氷室と入れ替わるようにして飯田がやってきた。

「おチビ、心配してたけど、ちゃんと仲良くやってるじゃん」

「仲良くとか、まだ全然だよ。それより、中のこと頼まれちゃったんだけど、飯田くんの持ってくる書類、どうすればいいの？」

飯田は驚いたような顔になった。無理もない。約一年工事課に居

て、今さら何を言うんだと言いたいのだろう。

愛子は飯田に向かって頭を下げた。

「あたし、堤主任が何やっていたかなんて、全く興味なかったし、主任もあたしに任せようとしなかったから……。飯田くんに聞くべき事じゃないとは思うけど、書類の流れだけでも教えてくれないかな」

飯田はちよつと考えるような顔つきをしたが、「わかった」と言う、彼女の隣に椅子を持ってきて座った。

飯田の仕事は電気料金の集金だ。通常、料金の支払いは口座引き落としなのだが、口座から落ちないと滞納扱いになる。電気料金は一ヶ月ごとに発生するから、それがある程度溜まり督促しても支払われない場合は、送電停止となる。要するに、払わなければ電気を切られるというわけだ。今の世の中、電気を止められたら不便で仕方がないだろうなと愛子は思った。

公共料金ぐらい払えないでどうする！　と思うのだが、実際支払わずに電気を止められてしまう顧客件数は、このK事業所だけで毎日五十件以上にも上る。それと工事課と何の関係があるのかわからない。尋ねると、飯田は丁寧に教えてくれた。

「オレたち料金課の人間が昼間停止作業をして、その後お客が料金支払ったら、電気使えるようにしなくちゃいけないじゃん。二十四時間営業のコンビニでも支払いが出来るから、夜中に支払いが確認できた場合は、当番で泊まってる工事課の作業員が電気つなぎに行くんだよ」

知らなかった……

「未払いの家はけっこう癖の有るお客も多いからね。凶暴な犬、放し飼いにしていたり、わけわかんねえイチャモンつけてきたり」

そういった、要注意の顧客の情報や、過去の交渉経過などを飯田から聞いて作業員に伝えるのが堤の仕事だったらしい。

飯田とはいっても雑談をしていたのだから、そんな仕事は自分に回してくれたらよかったのに、と愛子は思った。どうやら飯田も同じ

ように思っていたらしい。

飯田が引き揚げてゆき、一人になった愛子はため息をついていた。工事課の中で、愛子はまったく戦力になっていなかった。けれども、堤だけは愛子のことを評価してくれていると思っていたのに。居なくなつて初めてわかる。こんな簡単なことも任せてもらえないくらいに、自分は頼りない存在だったのだ。まったく、これでは本当にお茶汲みだ。いい人だと思つていた上司が恨めしくなった。

「あたしなんて、要らないじゃん……」

悔しくて、久しぶりに涙が出た。

氷室は翌日も現場視察と称して朝から出掛けてしまった。初めて会った日の印象とは違い、彼の話し方はとても丁寧だったが、やはり愛子は彼が出かけるとホッとするのだ。

無線台に座つて、当直の作業員がやつた仕事を確認していると、

飯田が現れた。

「あれ？ おチビ。珍しく仕事してるじゃん」

器用に片目をつぶつて見せる飯田に、何か言い返そうとしたが、やめておいた。仕事で教えてもらわなければならない事が山ほどあった。飯田が持つてくる仕事は、昨日から愛子がやるようになったのだ。

昨日、現場視察から戻った氷室に「堤主任がやつていた仕事だから」と手渡したところ、「僕もよくわからないから、上田さん、今日からそれ全部、あなたがやつてください」と、あっさり言われてしまい、愛子は複雑だった。

堤が任せなかったのに、いいのだろうか？ 氷室は愛子の事を全く知らないというのに。信頼？ いや、そういうことでもないだろうけど……。

午後になつても氷室は戻らなかった。

配電課の相良女史が太った体をゆすりながらやってきた。彼女は

閑散とした事務所内を見回している。

「ねえ、上田さん。氷室主任はまだ戻らないのかしら？ 先日堤さんに依頼した作業の件、ちゃんと引継ぎはしてあるの？」

愛子が小さくなって「わかりません」と言うと、相良はあからさまに舌打ちした。

「戻り次第連絡寄越すように言つてよ。それとも上田さんが書類、探して持ってきてくれてもいいけど。それくらいできるでしょう？」
「すみません。私には、何の書類なのか、どこにしまつてあるのかも、さっぱり……」

相良はやれやれというように頭を左右に振つただけでプレハブを出て行った。

愛子は俯いてただ頭を下げていた。堤が教えてくれなかったからなどと恨めしく思つたりしたが、考えてみれば自分から進んで仕事を覚えようとはしなかった。やる気のないお嬢ちゃんに教えてやるほどヒマじゃない。きっと堤は心の中でそう思っていたに違いない。堤だけでなく、他の工事課のメンバーも、そう思っていたのではないだろうか？

女子社員だから出来ない。事務職だから無理。そう思つて、自分の係の仕事に興味すら抱かなかつたのは、誰でもない自分だ。

その後も、下請け業者や他の係の社員などが次々とやってきては、「氷室主任はどこへ行ったのか」と愛子に尋ねた。愛子は皆に仕事のことを訊かれるたびに「申し訳ありません。わかりません」と頭を下げ続けた。この時点で、ようやく愛子は上司不在の大変さを実感し出した。

こんな事ではいけない、そう思った。いくら仕事が終わらないと言つたつて、自分はこのプレハブで一年過ごしている。昨日赴任してきた氷室に比べれば、物のありかぐらいわかつていなくてどうするのだ。

悶々としていると、作業を終えた一班が帰社した。五人の作業員たちは、夏の陽射しの中の作業で汗だくだった。

「もつと冷房きかせてくれないかな」

一番若い奥田作業員が、事務所に入ってくるなりＴシャツ姿になった。室内に、むっとする異臭が漂う。いつもなら、汗臭さに耐えられずフロアの片隅あたりに避難するのだが、今日の愛子はそれどころではなかった。

「あの、奥田くん。帰ってきて早々に、申し訳ないんだけど、ちよつと無線、代わってくれないかな。配電課まで行ってきたいの」
「え？ あ、ああ、……いいですよ」

奥田は何事かというように目を瞬いた。彼とは無線を介してしか、ほとんど口を利いたことがないので、直接声をかけられて驚いたようだった。愛子は大急ぎで本館の二階に向かった。

プレハブから出た途端に、くらりとした。午後二時過ぎ、外気温がこんな上昇しているとは知らなかった。いつも一日中クーラーの効いた室内に閉じこもっているからだろう。こんな中で防護服に身を包み、ヘルメットを被って作業していたら、汗もかくだろう。ほんのちよつぴりだけど、奥田たち作業員の気持ちがあったような気がした。

本館の二階はシーンと静まり返っていた。思えば配電課のフロアに來たのは初めてだった。そつと覗くと、みなパソコンの画面に向かって仕事をしている。愛子は首を伸ばすようにして男性社員の頭越しに相良みつ子女史を探した。

相良は窓際の大きな机に陣取って設計図面を広げていた。愛子は勇気を振り絞って声をかけた。

「すみません、相良副長に用事があるのですが」
フロア中の人間が、入口にいる愛子を一斉に見た。仕事の邪魔だったかもしれない、そう思つて小さくなっていると、相良は今まで見たことがないような優しい顔で愛子を手招きした。

愛子は身を縮めながらデスクの間をぬって、相良の居る窓際まで歩いて行つた。思いがけず機嫌の良さそうな相良の顔にホツとしていると彼女が言つた。

「さっきの書類を持ってきたんでしよう？　そのキャビネの上に置いてちょうだい」

「え……書類？」

「それ以外に用事なんて、ないでしょう？」

そう言って、相良は忙しそうに再び手元の図面をめくり始めた。
どうしよう……。

愛子は居心地悪い空気の中でじっと突っ立っていた。飯田にお願いしたように相良にも仕事を教えてもらおうなんて、虫が良すぎたのかもしれない。

心の中で後悔していると、ふいに相良が顔を上げた。

「なに？　まだ、何かあるの？」

怪訝そうな相良に、愛子はダメもとで昨日飯田にお願いしたように、業務の流れを教えて欲しいと頼んでみた。

相良は一瞬大きく目を見開き、愛子を上から下まで見ていたが、コホンと咳払いをして「わかりました」と言った。彼女は愛子に空いている椅子をすすめると淡々としゃべり出した。愛子は慌てて手に持っていたノートを開いた。

「あの書類は街路樹の伐採に関するものなの。だから、工事課で全体の作業日程を記入してもらったら、営業課の官公庁担当者に流すのよ」

「街路樹の、伐採……？」

メモをとりながら首をかしげる愛子に、相良も飯田と同じく丁寧に教えてくれた。

電線に樹木が触れると断線や短絡ショートの原因になる。そのため、配電課の人間が管轄区内を日々パトロールして、危険箇所をチェックしているのだそうだ。そして見つけた箇所を工事課の人間が処理するという流れらしい。

「一般家庭の樹木なら、家の人に承諾を得てすぐに作業するのだけれど、公園や街路樹は役所の管理下にあるから、緊急事態以外は決められた手続きをふまないといけないのよ。あなたに探してもらい

たいのは、その申請書類なの」

そういえば、時折「木を切っていて蜂に刺された」などと、奥田たち若手が喚いていた事があったかもしれない。

愛子は深々と一礼して配電課のフロアを出た。今までじつと無線台に座りっぱなしで、黙々と自分に与えられた事だけをこなしていたけれども、こうして他係を覗いてみると、何だかいろいろな事に興味が湧いてきた。

「仕事って、つながっているんだ……」

一年以上OLをやっているくせに、今さらかもしれないけれど、本当に目からウロコのような感覚だった。堤が転勤してしまい、日常が変わってしまうのが嫌だったけれど、もしかしたらこれは自分にとって良い機会なのかもしれない。

階段を降りていくと、踊り場のところで話し声がした。手すりから覗くと、壁に寄りかかるようにして、飯田と総務課の桜井園子が話をしている。なんだかやけに砕けた雰囲気で、特に桜井があんなに楽しそうにしゃべっているのは初めて見た。

このまま降りていって邪魔しちゃ悪いな、と思うような空気が漂っていて、愛子は再び階段を引き返そうとした。

「あれ、おチビ。本館に来るなんて、珍しいじゃん」

気配に気付いて飯田が下から声をかけてきた。彼は桜井に「んじや!」と片手を上げただけで、すぐに愛子の方に寄って来た。

「来るな。飯田くんに用事は無い」

「オレがプレハブに用事あるの。ほら、早く行こうぜ」

何だか桜井に申し訳ない気がして、わざとつつけんどんに言ったが、彼のペースで軽く流された。

気になって下を覗くと、桜井はあつという間に居なくなっていた。

飯田は桜井のことなどさっさと忘れてしまった様子で「ねえねえ、『シカ』って十回言ってみて」などとまったくだらないことを言い出した。こっちが気を使っているというのに、いったい何なのだ？

「早く言ってみてよ」

少年のようなニコニコ顔で問われると、ついこちらにも反応してしまう。

「う、うるさいなあ。シカシカシカシカシカシカシカシカシカ」
「クリスマスにサンタが乗ってくる乗り物は？」

「トナカイでしょ」

馬鹿らしいと思いつつ、答えてしまうのも、いつものことだ。なんか、自分が情けない。

「ブブ、サンタが乗ってるのはソリでした。やっぱりおチビは単純でいいよな。桜井なんかぜんぜん引つかからないモン」

もう頭にきた！

ムツとした顔で睨んで、足をふんづけてやると、飯田は涙目で謝って言った。

「冗談だつてば。おチビ、難しい顔してるから、リラックスさせてやろうと思つてさ」

愛子はハツとして自分の顔に手をやった。

「新しい主任、全然仕事しないのか？」

並んで一階の廊下を歩きながら、飯田が心配そうに尋ねた。こういう時、いつも飯田はともタイミングがいい。愛子はつい愚痴をこぼした。

「氷室さんじゃなくて、前任者の堤さんがさ、あたしに何も教えといてくれなかったからさ。……つてゆうかあたし、工事課の仕事、何にも知らなかったんだって。今さら焦ってる。氷室さん、ちょっと怖いから、中に居てほしくないんだけど、彼が居ないとあたしが周りから仕事のこと訊かれちゃうんだ。だから、もっとしつかりしなきゃって」

自分の不甲斐なさのため息まで漏れてしまう。それにしても、どいうわけか飯田にはこういう事を素直に言えるから不思議だった。彼の、良く言うフレンドリー、悪く言うと馴れ馴れしい雰囲気こそうさせるのだろうか。

「焦ることないって。おチビは容量小さいんだから、いっぺんに詰

め込むとぶっ壊れるぞ」

そう言って飯田は楽しそうに笑った。マイペースの飯田につられて愛子も笑ってしまった。

「ま、何かあったらすぐオレに相談しろよ」

「うん、ありがと」

飯田に話したせいだろうか。少しだけ気分がすっきりした。

工事課に用があると云ったくせに、飯田は本館を出るなりふいと居なくなってしまった。

プレハブに戻ると氷室が帰ってきていた。彼は切れ長の目でチラリと愛子を見ると席を立て歩いて来た。何か怒られるようなことをしたかな？　と思い、気がつけば愛子は下を向いていた。

俯く愛子の鼻先に、スーパーのビニールが差し出された。

「え？」

顔を上げると、氷室は日に焼けた顔をわずかに赤らめて言った。

「これ、アイス買ってきたから、みんなに配ってくれないかな」

「え……アイス？」

氷室とアイス。何だか、ちょっと似合わない感じがする。名前的には近いんだけど。白いビニールに目を落とし、もう一度見上げると、照れたような顔がなんだか子供っぽかった。ずっしりと重い袋を受け取ると、愛子はＴシャツ姿でくつろぐ作業員たちの間をまわって歩いた。

「あー、アイス嬉しいな。愛子さん、二個食ってもいいですか？」

入社四年目で愛子と同じ歳の河合が両手にアイスを握り締めて笑った。『愛子さん』などと呼ばれたのは初めてだったので、ちょっとドキリとした。

だいたい配り終えて、氷室本人に配っていなかった事を思い出した。

「氷室主任、ごちそうさまです。買ってきた当人が後回しになっちゃって、ごめんなさい」

そう言つてビールを差し出すと、氷室はドラえもんの形のチューアイスを手にとつてにこつと笑つた。切れ長の目尻が下がつて、思いがけず崩れた顔になった。

「これ、残つてて良かった。ソーダ味が美味いんだよな」

ぱくりとドラえもんアイスを口に咥えた姿を見て、愛子は思ひっきりふき出していた。

日に焼けた精悍な顔の彼が、まるで悪ガキのように見える。

咎めるような目で睨まれたが、何故だかもう最初のように怖いとは思わなかった。

愛子は無線台に戻ると、氷室と同じドラえもんアイスを口に咥えた。職場でみんなと食べるアイスは、子供の頃友達とプールで食べたアイスみたいにとびつきり美味しかった。

業務終了を告げるチャイムが鳴ると、宿直のメンバーを残して皆一斉に席を立つ。工事課は現場作業がメインだから、役職が上の人間以外はデスクワークが殆ど無いのだ。愛子も無線台の上を片付けて席を立つとした。

「はあ……」

横で氷室が小さくため息をつくのが聞こえた。振り返ると、彼と目が合ってしまった。氷室はうるたえたように咳払いをすると、背後のキャビネットを引っ掻き回し始めた。重なっていた書類を引っ張り出した途端に山が崩れてファイルが数冊床に散らばった。

「あの……手伝いますか？」

なんだか帰りづらくなつてしまった。勇気を振り絞つて声をかけると、彼はつり目を大きく見開いて言つた。

「時間外だけど、いいんですか？」

「あ……はい」

「あの……とても助かります」

氷室は丁寧に頭を下げた。愛子はちょっと困ってしまった。自分でできる事など、たかが知れているのに。

前任者の堤は、愛子に全く仕事を触らせなかった。彼は仕事用のキャビネットのキーを全て自分で管理していたので、主任席の後ろに何が収納されているのか、誰も知らなかった。もちろん、愛子も「書類のある場所が、よくわからないんです。それから、パソコン……」

そう言つて氷室は堤からもらった引継ぎ書をあても無くめくつた。

自分もわからないのだ、と言おうとしたとき、氷室が顔を上げて愛子をじつと見た。

「上田さんならきつとそういうこと良く知っているんじゃないかと思つて、手伝つてもらえて、とてもありがたいです」

ホッとしたような顔で言われてしまい、愛子は引きつった笑顔になつた。

やはり使えない自分は、帰るべきではないのか？　と思い、周囲を見ると、同僚たちがぞろぞろとフロアを出てゆくのが目に付いた。皆、二人を見て見ぬふりで帰つてゆく。さっきまで活気に満ちていた事務所内が、あつという間に静かになつた。

引継ぎ書を見ながら、パソコン画面を懸命に操作する氷室の後ろで、愛子は散らかった書類を戻していた。

事務所内の静けさが気になり、何かしゃべらなくてはいけないと思つてしまふ。声をかけようと振り返つて、愛子は口をつぐんでしまった。

斜め後ろ四十五度から見た氷室の横顔を目で辿る。整った鼻梁から意志の強そうな口元、すっきりとシャープなあごのライン。伸びはじめた髭はワイルドな印象こそあれ、決して不潔ではなくて……。愛子を怖がらせたつり上がり気味の瞳は、パソコンの青い画面を受けて外国人のようにグレーに光っている。愛子は暫く見つめていたが、我に返ると無言で作業に戻つた。

キャビネットの中に、昼間相良女史から依頼された書類を発見し

たのは収穫だったが、せっかく残ったけれど、あまり役には立たなかった。

一時間ほど二人でどこに何が入っているのか確認したあと、もう帰るように言われてしまった。

「あの……お役に立てず、すみません」

小声で言つて自席のバッグを取りに行くと、氷室が追いかけてきた。

「上田さん！」

立ち止まった愛子に、氷室は思いがけない事を言った。

「僕のこと、怖いですか？」

「え？」

何事かと振り返つて見上げると、彼は真面目な顔をしていた。

態度に出てしまっていたのだろうか。愛子はうろたえて彼の顔から目を逸らした。逸らした目線の遙か彼方、例の応接セットで、宿直の作業員たちがテレビを見ながら夕食を食べているのが見えた。

愛子は上目遣いで氷室の顔を見上げた。彼は口をへの字に引き結んで、頭を掻いている。最初は確かに怖かった。目つきが鋭くて、睨まれているような印象だったから。でも今はちよつと違う。そう、言いたかったが、急な事で言葉が出てこなかった。

「へんな事聞いて、ごめん……。明日は、申し訳ないけど、中の仕事するから」

黙っている愛子に、氷室はバツが悪そうな顔で小さく言うところと背を向けて自席に戻って行った。

プレハブを出て、本館の女子更衣室に駆け込んだ瞬間、氷室の言葉の意味を理解した。

明日は、申し訳ないけど、中の仕事するから

「申し訳ないけど」……氷室主任、今までわざと外に出ていたとか？

怖がっていると思って、なるべく席を外していたのだろうか？
そう考えると、こちらこそ申し訳ない気持ちになった。

明日からは、もっと積極的に声をかけてみよう、そう思って氷室の顔を思い浮かべた途端に、愛子の心臓がトクンと跳ねた。

なに……？

愛子は更衣室の姿見に、自分の顔を映した。作業着姿の女の子は、鏡の中で真っ赤になっていた。

社員通用口から外に出ると、辺りは真っ暗だった。昼間の暑さは影を潜め、心地良い夜風が愛子の髪を揺らした。

残業なんて、久しぶりだった。本館の建物を見上げて暫く佇んでいると、背の高い男性が通用口から出てきた。

男性は満面の笑みで愛子に声をかけてきた。

「よお、おチビ！　こんな時間に珍しいじゃないか。一緒に帰ろうぜ」

飯田は会社員とも思えないラフなスタイルだった。白いＴシャツにダメージ加工のジーンズで、上からふわりと黒っぽい綿シャツを羽織っている。どこかだらしない、そんなファッションでも、飯田がするとまるでグラビアモデルのように良く似合うから不思議だった。

並んで歩き出したとき、遊歩道の先で女性が立ち止まっているのが見えた。

「あ、桜井先輩？」

愛子が声をかけた瞬間、聞き間違いだろうか？　飯田が小さく舌打ちするのが聞こえた。

「桜井先輩、今帰りですか？　あたしも……」

言いかけて愛子は口をつぐんだ。飯田に腕をつかまれ、そのままぐいと引っぱられた。飯田は愛子を抱え込むようにして耳元で囁いた。

「お前は何も言っな。いいな」

「へ？」

意味がわからず固まっていると、桜井園子が近づいてきた。カツ

カツとヒールの音が夜の帳に吸い込まれる。

「二人で仲良くデート？」

桜井はにこやかに声をかけてきたが、微妙に上ずって聞こえた。ちらと飯田を見上げると、彼はへらりと笑って言った。

「うん、まあね。デートって言うか、同期会なんだ。入社一周年記念ってことで」

愛子は目を瞬かせた。同期会とは、いったい何の事やら全くわからない。

絶句していると、飯田はますます愛子の腕を引き寄せて、まるで肩を抱くような体勢をとった。どうでもいいけど、ちょっと接近しすぎた。愛子は逃れようと、懸命に体をよじった。

「そっ、同期だったよね、二人は」桜井の声は妙に低かった。

「駅まで一緒に帰る？」

飯田が言つと、桜井はかぶりを振った。サラサラの黒髪が街路灯の灯りで艶やかに光る。

愛子はドキリとした。今、確かに凄いい目つきで睨まれた気がする。飯田のかげで小さくなっていると、桜井はいつもどおりの丁寧な仕草で二人に向かって「おつかれさま」と頭を下げた。ふわりと香水が香る。

彼女は踵を返すと、ほの暗い遊歩道を小走りに去っていった。

桜井の姿が闇にまぎれて見えなくなると、飯田は「はー」と大きく息を吐いた。なんか、事情がわかってしまった気がした。

「飯田くん、桜井さんに何かしたの？」

問いかけたが、彼はぺろりと舌を出しただけで、何も言わなかった。飯田は気さくだしオシャレだから、女子社員の間では人気だが、反面、プレイボーイぶりは男子社員から非難されていることを、男性職場の愛子は良く知っていた。男女の事にとにかく言うほどお子様ではないから、愛子は今まで飯田の事を色眼鏡で見た事は一度も無い。けれども、さっきの態度は何だか許せない気がした。総務課の桜井園子は、事業所の女子の中では親しい方だった。年齢は飯田

と同じで三つ年上だが、とても落ち着いているし、物腰も柔らかなので、比較的しゃべり易かった。工事課の若手の中でも彼女に密かな思いを寄せている者は多い。

その彼女に対して、飯田は遊び半分で何かしたに違いないと思うと、嫌悪感が込み上げてきた。

まだつかまれたままの腕をもぎ離し、愛子は怒鳴った。

「飯田くん、いいかげんにしないと、許さないからね！」

いきなり怒り出した愛子に、飯田は驚いたような顔を向けていたが、何も言い返さずただ立っているだけだった。

愛子は彼の脇をすり抜けると、全速力で走った。飯田の呼ぶ声が聞こえたが、無視した。

公園を突っ切りつつじの植え込みを飛び越えて駅まで走り続けた。何だか、胸の中がいつまでももやもやしていた。

翌日、いつも現れる時間帯に飯田は来なかった。代わりに料金課の新入社員の男子が書類を置いていった。飯田はなんだかんだと理由をつけて仕事をさぼりながら三十分以上居る事が多かったので、今朝は妙に時間を持て余してしまう。一人ならまだしも、今日は氷室が在席しており、何かしてないと逆に息が詰まりそうだ。

息が、というより胸が……。

昨日から変だった。氷室を意識すると体温が二度ぐらい上昇するようない気がする。

「さあ、仕事仕事！」

気合を入れ直し、飯田に教わった仕事の流れに沿って書類をチェックしていると、氷室に呼ばれた。

「上田さん、所内メールで連絡事項が来てますので、見ておいってください」

せっかく気合を入れ直したのに、名前を呼ばただけで再び動悸がしてきた。

どうなっちゃったんだろう……あたし。

胸の辺りを押さえつつ、空き机に設置されたパソコンを覗き込んだ。

愛子に關係する連絡は殆ど無かった。強いて言えば乾燥室の扉が壊れて、一旦閉まると中から開かなくなりそうですので要注意、という文書ぐらいだろうか。愛子より、工事課の作業員たちのほうが困るだろうと思った。彼らは汗掻いたシャツを自分で洗濯しているからだ。特に独身者は会社にある洗濯機をしょっちゅう使用している。

愛子の場合は、乾燥室など夕方一回、布巾を干しに行く程度だからあまり関係ない。それにあそこはいい環境ではないし。乾燥室をサウナと勘違いして中で筋トレをやったりするバカが居るから、いつも匂いがこもって臭いのだ。

そういえば、氷室も昨日洗濯機でＴシャツを洗っていたっけ。顔に似合わぬ赤で、小さな花模様がひとつプリントされていた。自分で洗濯するという事は、彼はやっぱり独身なのだろうか。一番知りたい事を誰にも訊けないのは、どうにも歯がゆい。総務課の桜井なら知っているだろうけど、昨夜妙な事になってしまい、今日はまだ顔を合わせていなかった。

それにしても、飯田はいつたい桜井園子に何をしたのだろうか？ あらぬ想像が頭の中でぐるぐるする。自慢じゃないが、愛子は男性経験が皆無だった。二人姉妹の長女で、私立の女子高、短大を経て帝都電力に入社したのだ。配属先が、男性ばかりのこの飯場のような工事課だった為、プレハブに漂う男性の体臭や、上半身裸の姿を目にしたときは眩暈がした。二つ年下の妹にまで「お姉ちゃん、いつになったら彼氏連れてくるの？」とバカにされているほど、愛子はオクテだった。

ぼけっとしていたところを、無線が入って現実に取り戻された。

『こちら帝都四、感ありましたらどうぞ』

愛子は無線台に走った。雑音と共に、複数の人間の声が混じって聞こえる。音声をクリアにしようと、スケルチ・ダイヤルをひねった途端、再び怒鳴るような無線が入った。

『こちら帝都四、感ありますか！』

何だかいつもと違う感じがした。チラリと作業予定表に目を走らせると、四班は活線作業中だった。

活線作業とは、電気を流したままする工事のことだ。停電しなくて良いので、お客様にとってはありがたいが、作業員は感電死亡事故の危険にさらされる、リスクの高い作業方法だ。

「こちら帝都K、帝都四、どうしました？」

『えー、活線作業中防護管が落下、奥田作業員が負傷しました。現在手当て中ですが、作業員が不足です。応援要請です』

大変な事になってしまった。氷室に報告しようとする、彼はもう背後で無線を聞いていた。

「上田さん、一番近い五班を行かせてください。ばくもすぐ現場に向かいます」

「あ……主任、行っちゃうんですか？」

今日は佐々木工事長もお休みで、氷室が出てしまうと事務所内には愛子しか居なくなってしまう。何とか引きとめようと試みるのだが……。

「あの、五班の穴埋めは？」

「あとで連絡しますので、無線から離れないでください」

言うなり氷室はヘルメットを被って飛び出してしまった。ケガをしたという奥田の事が心配だったが、それ以上に一人になってしまふのが初めてで不安が募る。こういうときに限って、二つも三つも悪事が重なったりするのだが。そうならない事を祈りつつ、愛子は無線台のマイクを握り締めた。

待つ事数十分。ぼつりぼつりと連絡が入り、ようやく事態が明らかになってきた。高所作業車のバケットに乗って、電線に防護管を取り付けていたところ、強風に煽られて持っていた管が落下。下で指示を出していた奥田に当たったらしい。防護管というのは、絶縁素材で出来た長さ二・五メートルほどの筒だ。工事現場などでクレインのアームが電線に触れても感電しないように、保護するための

電線カバーである。

奥田は救急車で病院に運ばれたらしいが、命に別状はないのとこのだった。

「感電事故じゃなくて良かった」

愛子はホツと胸を撫で下ろした。ここがいかにも危険な職場かという事を、再認識させるような事故だった。

上に知らせが行ったらしく、事業所の所長が現れた。総務課長と配電課長まで従えている。所長がプレハブに姿を見せたのは愛子の知る限り初めての事だった。

所長はがらんとした事務所内を見やると愛子の方に歩いて来た。

「一人かね？」

呻るように問われて、愛子の背筋がピンと伸びた。

「こ、工事長は、休暇です。主任は事故の知らせを聞いて、現場に向かいました」

「うむ、氷室くんからは携帯で私が連絡を受けている」

禿げ頭の配電課長が頷いた。三人は何しに来たのだろう。誰も居ないのに。

「あの、ご覧のとおり、誰も居ないんです」

帰ってほしくてちよつと大きめの声で言ったが、三人は愛子を見無視するように手近の椅子に座ってしまった。

お茶ぐらい、出したほうがいいのかな？

無線台を離れるわけにもいかず、チラチラと彼らを盗み見していると、総務課長の言葉が耳に飛び込んで来た。

「やっぱり、安全祈願はするべきでしょう」

「うむ、しかし所内全体でなくてもいいんじゃないかな。予算も掛かるし、業務に支障をきたす」所長の低い声。

安全祈願って、何だろう？

「彼だけ行かせたらどうですか？ だって、彼が来た途端ですよ。無事故無災害記録がストップしてしまったのは」

配電課長が吐き捨てるように言うと、総務課長が苦笑いした。

「疫病神って居るんでしょうかね？ まあ、奥田くんは大したこと
がなかったみたいでしたけれど、S工務事務所、I支社と、彼が行
くたびに人身事故ですからね。ちょっと、偶然にしては嫌ですよ」
「彼」とは氷室の事だろう。それにしても、疫病神とはひどすぎる。
明らかに彼とは関係ないだろう。だって事故が起きた時、氷室はこ
の事務所に居たのだから。何だかむかついていた。咳払いを繰り返
していると、彼ら三人はようやく立ち上がって事務所を出て行った。
塩撒いてやるか！

「氷室さんは、疫病神なんかじゃないわよ！」
閉まったドアに向かって愛子は怒鳴った。何故だか、自分のこと
以上に腹が立った。怒鳴るだけじゃおさまらず、愛子は無線台を離
れて給湯室に走って行った。

本当に塩を撒いてやる！

流し台の下や戸棚の中を散々探して、ようやくあら塩の袋を引っ
張り出した。七百グラム入りの袋を手にはプレハブの外へ行き、建物
の周り中に塩を撒き散らした。相撲取りがするように、手のひらに
っぱい塩をつかみ出しては乾いたアスファルトの上に叩きつける。
そうやって一袋撒いてしまうと、ようやく気分がすっきりした。

ふと振り仰ぐと、夏の空は雲ひとつ無く、どこまでもただ青かつ
た。今しがたの自分が、何だか気違いじみていたな、と少し反省し
た。何であんなに嫌な気持ちになってしまったのか、良くわからな
かった。

汗ばんだ額を、ぬるい風が撫でてゆく。愛子は空になったビニー
ルを手には事務所に引っ込んだ。

昼を回って作業員たちが次々と帰社したが、氷室はなかなか戻っ
て来なかった。作業員たちの間にも事故のことが知らされていたの
で、愛子は訊かれるたびに「奥田は大丈夫だ」と説明した。

事故があった四班と共に奥田も氷室も帰って来た。奥田は首に大
きなドーナツ型のサポーターのようなものをはめていた。よくムチ

ウチの人がしているやつだ。

皆に混じって奥田を囲んで具合を尋ねていると、名前を呼ばれた。氷室が怖い顔で立っている。

何だろう……？

彼は愛子無線台の有る事務所の窓際に連れて行くと、低い声で言った。

「無線、離れてなかった？」

「え……」

「急な作業が入って、何度か連絡したんだけど、出なかったね」

冷ややかな声で言われ、ギクリとした。さっき塩を撒いていたときかもしれない。絶対に、そうだ。それ以外はちゃんと所内に居たのだから。

「あの、あたし……」

「こんな時だからこそ、居てくれなきゃ困るじゃないか。きちんと仕事、してください」

氷室はいらついたように言って、自席に戻って行った。愛子は何も言えずに唇を噛んだ。

なんで……？

誰の為に塩撒いたかわかりやしない。きちんと仕事をしろだなんて、一生懸命やっているのに、あんまりだと思った。

愛子は一礼すると「ちょっと席外します！」と言って布巾をつかみプレハブを出た。氷室の刺すような眼差しと、冷たい言い方を思い出して涙が出てきた。

駐車場で現場に出ようとしている飯田と会ってしまったが、彼は声をかけてこなかった。愛子は泣き顔を見られないように布巾で隠しながら本館の裏手の乾燥室に走って行った。

とにかく一人になりたかった。

冷たく言われてようやく自覚した。自分は氷室が好きなのだ。たぶん、初めて会った日から。こんなに誰かが気になった事はなかったと思う。怖いとか、冷たいとか言いながら、会った日から彼ばかり

り見ていたことに気付いた。上司を好きになるなんて、それだけで
気まずいのに、完全に使えない部下だと知れてしまった。

「もう、やだ……」

あとからあとから涙が出てきて、手にしていた布巾がぐしょぐし
よになってしまった。きつと顔も化粧が落ちてぼろぼろだから、更
衣室で直さなきゃいけない。でも、本館に入る前に、泣き止まなく
っちゃ。誰に見られないとも限らない。

乾燥室のドアに寄りかかって懸命に涙を拭っていると、カツカツ
と渴いたヒールの音が近付いてきた。愛子は慌てて乾燥室の中に入
った。

室内は八畳ほどのスペースで、工事課のメンバーが干したＴシャ
ツや作業着が洗濯ロープでたくさんぶら下がっている。愛子は隅の
方に駆け込んで、洗濯物の影に身を潜めた。

ドアを開けて入ってきたのは桜井園子だった。彼女は手に布巾を
持っている。愛子と同じように洗ったそれを干しに来たのだろう。

愛子はホツとして一步、二歩と踏み出した。

桜井は愛子に気付いたようだった。唇の端を上げて、ニツと笑った
ように見えたので、愛子は声をかけた。

「あの……」

桜井はブイと顔を背けると、靴音も高らかに乾燥室を出て行った。

「え？」

ボタンとドアが閉まり、白い日光が遮られた。室内は乾燥室特有
のオレンジ色の光で満たされた。密閉された空間で、生乾きの洗濯
物の臭いが急に鼻についた。

愛子はゆっくりとドアに近付いてノブを回した。ノブは何の抵抗
もなくただくると軽く回っただけだった。

まずい……！

今朝の所内メールが頭をよぎる。

【乾燥室の扉が壊れて、一旦閉まると中から開かなくなりますので
要注意】

愛子はノブをつかんで押してみた。ドアは気密性を保つ為に鉄扉になっているのでビクともしない。

「桜井さん、桜井さん！ 開けてください！」

ドンドンと叩き続ける。時折休んで外の様子を伺うが、まったく誰の気配もなかった。

「誰か、居ませんか？」

しばらくドアを叩いていたが、手が痛くなってきた。愛子は何か無いかと乾燥室内を見回したが、ロープにつられた衣類以外、とくにドアをこじ開けられるような工具も見当たらない。携帯電話も机の引き出しに入れっぱなしで外部と連絡をとる手段は無かった。

汗の浮いた額を拭って、愛子はずるずると座り込んだ。暑さにくらくらする。乾燥室は本館の裏手で、ここに用事のある者でない限り立ち寄らない場所だ。工事課の現場作業員は全員帰社しており、干されたばかりの洗濯物を見る限り、もう夕方まで誰も来ない可能性が強かった。下手をすれば、当直の人間が入浴してタオルでも干しに来ない限り誰もここには用がないかもしれない。

どうしよう！

ドアの横の壁に、膝を抱えて寄りかかった。オレンジ色の光が当たらない場所でも、暑さは変わらない。

「干からびちゃうよ……」

考えると余計に喉が渴いてきた。水分補給できないのに、汗がやたらと吹き出す。

どうして桜井はこんな事をしたのだろう。気付いていなかった筈がない。確かに目が合ったのだから。考えられる事はただ一つだ。昨日の彼女の目つきが全てを語っている気がした。

「もう、何なのよ！ 飯田のバカヤロウ！」

不安な気持ちを誤魔化すように、愛子はぶつぶつと飯田を罵りまわった。

いったいどれくらいの時間が経ったのか、見当もつかない。愛子

はぼんやりする視界でぶら下がった洗濯物を見つめていた。

洗濯物が真上に見えるって事は、あたし、寝っ転がっちゃってるんだ……。

のどがからからに渴き、体がやけに熱かった。まるで砂漠に居るような気分だった。とは言っても、砂漠に行ったことなどないんだけれど。起き上がろうとするのだが、何だか力が入らない。目だけで見回すと、斜め上に氷室の赤いＴシャツがあった。

何で誰も探してくれないのかな？

愛子はハンガーにぶら下がったＴシャツをじつと見つめた。オレンジの光の中、まるで夕日みたいにキレイな赤色。

氷室さん、あたしが消えた事なんか、ぜんぜん気付いてないんだな。そりゃそうか……。だってあたし、使えない部下だもんね。工事課のお荷物だし、きつと居ても居なくても同じだから、あたしが居なくても誰も困らないわけだ。ははは……。なんか、こういうの、昔あった気がする。かくれんぼで一生懸命隠れてたら誰も見つけないで、日が暮れちゃって、妹がお母さんと二人で探しに来たんだよね。夕焼けの公園で、誰もいなくなつて。それでも一人、今みたいに遊具のトンネルの中に寝そべつて。丸い穴から見える夕日がやけに赤くて……。ああ、あれはマジ、悲しかったかも。

それにしても、なんでこんなに力が入らないの？ 目蓋も自由にならないなんて、真っ暗じゃん……。

遠くで氷室さんの声がするけど、多分気のせいだね。だって、あたし、要らない部下だもん……。要らないから、辞めようかな、会社。退職金幾ら出るのかな？ 桜井さんなら知ってるかな？ あ、でも桜井さん、あたしのこと嫌いなんだっけ。なんか、寂しいな。……って、ちよつともいいかげんにしないと、目の前真っ暗だし。誰か、明るくしてください、お願い。電力会社なんだから、電気つけてください……。

額がひやつとして、愛子は目が覚めた。

「ああ、良かった。気がつかなかったら、救急車呼ぼうかと思ってたんだ」

「氷室……さん？」

間近に氷室の心配そうな顔があった。愛子はゆつくりと手を上げて、自分の額に触れた。濡れタオルが乗せてあった。起き上がろうとすると、止められた。

「横になっていたほうがいいよ。今何か飲み物を持ってくるから」
そう言つて、氷室が視界から消えた。愛子は横たわったまま辺りを見回した。工事課のソファに寝かされているようだった。壁の時計は午後七時を指している。事務所内には誰も居なかった。宿直者も居ないという事は、現場作業に出ているのだろう。愛子はゆつくりと起き上がった。頭が割れるように痛む。乾燥室で閉じ込められて意識不明で発見されたのだと理解した。何だか間抜けで情けなかった。

ふと気がつくと、Ｔシャツが変わっている。赤に花柄が一つ。ぶかぶかのサイズは男物だ。

ぼんやりしていた頭が、急にクリアになった。

赤いＴシャツの胸元を握り締めて固まっていると、スポーツドリンクを手にした氷室が戻って来た。

「起き上がって大丈夫なの？」

労るような彼の声など、愛子の耳には入らなかった。

「氷室さん……。これ、これは、あなたが？」

Ｔシャツを引っ張って喚く愛子に、氷室はちよつと驚いたような顔をしたが、大きく頷くと言った。

「それ、僕のだよ。酷い汗だったから取り替えたほうが……」

愛子は氷室の頬に思いつきり平手打ちしていた。肌を打つ乾いた音が、事務所内に有り得ないくらい大きな音で響き渡った。

「ばっかっ！」

ひと声叫ぶと、愛子は自席のカバンをつかんで事務所を飛び出し

た。

信じられない！ 見られたんだ！

みっともなく倒れているところだけでなく、裸まで！

「もう、サイテー！」

だぶだぶの赤いＴシャツと作業ズボンのままだというのに、貴重品の入ったカバンだけを持って、愛子は逃げるように家に帰った。

上司と部下

二日間会社を休んだ。

あの日作業着姿で帰りついた途端に、倒れたのだった。酷い発熱だったらしい。医者からは熱射病と診断された。家族は皆不思議がつていた事だろう。普通の事務員が熱射病なんて、有り得ない。作業着姿で帰宅した為、母親にどうしたのかと問い詰められたが、話す気にもならなかった。

自分は職場内のお荷物で、女性の先輩からイジメにあつていて、さらに大好きな上司からは、セクハラされました。なんて、悲しすぎて誰にも言えない。

行きたくないと思つても、気がつけばいつもの時間にいつもの公園の脇を歩いていた。こんな自分が嫌になる。本当に、辞めてしまおうか。でも、会社を辞めても何もする事がないし。

会社に着いてしまった。

重い足取りで女子更衣室に向かっていると、相良みつ子が追い抜いていった。

「お、おはようございます!」

愛子は慌てて挨拶をした。相良は歩調をゆるめて愛子に並んだ。

「体は、もういいの?」

干物みたいになつて、みつともなく倒れた事が、相良にまで知れ渡っていたのか。愛子は無言で頷いた。

「氷室くんが心配してたわよ。彼に連絡したの?」

愛子がかぶりを振った。会社への連絡は、母親に頼み込んでしてもらったのだ。母親からは「子供じゃないんだから」と叱られたが、たとえ電話でも、氷室の声を聞くのが苦痛だった。

「あの日残業してたら、あなたを抱えて右往左往してる彼を見つけちゃって、ほんと可哀想なくらい慌ててたわよ。救急車呼んでくれ

って、もう半泣き状態で」

迷惑かけていたことを改めて自覚して、愛子は小さくなった。相良は思い出し笑いのようにくっくつと喉の奥で笑って言った。

「奥田くんが事故に遭ったばかりだから、騒ぐのはやめなさいって一喝したら、仔犬みたいにシユンとなっちゃって、私があなたを着替えさせている間もフロアの端っこで頭抱えてたわ」

え……！ 今何て言ったの？

「あのつ、私を着替えさせたって……」

相良はニツコリ笑って頷いた。

「私よ。だってあなた、水浴びたみたいに汗かいてたから」

愛子は両手で口を覆った。

氷室じゃなかったのだ。自分を着替えさせたのは、彼じゃなかった。彼は愛子を探してくれて、心配してくれて、かいがいしく介抱してくれただけ。それなのに、あの仕打ちは！

「あたし、なんて酷いこと、しちゃったの？」

立ち止まったままの愛子を残して、相良の大きな背中が女子更衣室に消えた。

愛子の乾燥室事件は、相良と氷室の間で無かった事にされたようだった。そのほうが、愛子にとってもありがたかった。この事が表沙汰になれば、氷室の部下への監督責任が問われる。奥田の事故があったばかりだから、きつと氷室と佐々木工事長への風当たりが強くなってしまうだろう。愛子のことがあった時、工事課のほぼ全員が奥田の事故報告会議に出ている最中だったので、発見が遅れたのだが、幸い大事に至らなかったで、穏便に済ませられるものならば、そのほうが良いに決まっている。もっと心配なのは、下手に事を大きくして、愛子を閉じ込めた犯人探しが始まってしまうのではないかという事だった。桜井のした事は許せないけれど、彼女が非難の矢面に立たされるのは、何だか嫌だった。彼女はただ誤解しているだけなのだ。自分と飯田の事を、つきあっていると勘違いして

いるのだろう。これに関しては、全面的に飯田が悪いのだ。

色々と考えているうちに憂鬱になってきた。

プレハブに向かう足取りが重い。本館を出て裏手に回り駐車を
通り過ぎる。まだ時間が早いせいで、人影は無い。

氷室にどんな顔をして会えばいいのだろう。謝るにしても、ど
のように切り出せばいいか、まったく思いつかない。彼が出勤して
くるまでに、どうするか考えよう。

気持ちを切り替えてプレハブのドアを開けると、すでに氷室が着
席していた。

「あ……」

彼は愛子を認めると、何も無かったように軽く会釈をして、手元
の書類に目を落としてしまった。

完全にタイミングを逃した。さらりと、挨拶がてらに叩いた事を
謝ってしまえばよかったのに。

いつものように応接セットを片付けているうちに、一人、二人と
社員たちが出勤してきて、職場はあつという間に賑やかになった。

ケガをした奥田も、小さめのドーナツを首に巻いて、車輛整備の
為に外へ出て行った。すっかり元気そうであった。

室内に居ると、氷室の存在が気になるので、久々に車輛整備を手
伝おうと軍手をはめたとき、先輩社員の野口に呼ばれた。彼は工
学部卒で入社五年目だ。頭が良く、後輩からも慕われている。ゆ
くゆくは本店に行つて幹部になるのだろう。

「上田さん、ちょっとこれ使ってみてくれないかな」

野口に手渡されたのは、ヘッドフォンのようなものだった。耳の
辺りに大きなダイヤルとマイクが付いている。ちょうどラップシン
ガーが歌うときのマイクみたいだった。

「なんです？ これは」

愛子は軍手を外しながら尋ねた。

「マイクだよ、無線の。ヘッドセットマイクって言うんだ」

そう言つて、野口はもう一つ、小さな手のひらサイズのリモコン

を手渡した。愛子は手の中のリモコンをじっと見た。テレビのリモコンみたいに数字のボタンがついている。どうやらこの数字が作業班のナンバーになっているようだった。

「いつもと同じように一班なら一の数字を押しながらしゃべるんだよ。けっこう感度いいから、事業所内ならどこにいても応答できると思うよ」

愛子は目を見張った。こんな便利なものがあつたなんて。

「もっと早く買ってくれたらよかったのに」

そうすれば、氷室に叱られずに済んだだろうし、乾燥室で倒れる事もなかったのに。

「これ、主任に頼まれて僕が作つたんだよ。けっこう苦労したんだぜ。秋葉原で高い材料買つてさ。ま、金出したのは主任だけだね」

野口は得意気にあれこれと説明してから現場に出て行った。

愛子は作業員の行き交うフロアの彼方に、氷室を見やった。

「氷室さん、自腹で？ それって、あたしのため……？」

始業のチャイムが鳴り、いつもの無線が入る。愛子は事務所内を歩きながらリモコンを片手に応答してみた。

「帝都七、気をつけて作業願います」

『帝都七、了解です』

「願います、帝都K、以上」

プレハブ内は、どこに居てもばっちり受信できた。いつもの無線より感度が良いくらいだ。愛子は満足しながら無線台に向かおうとして足を止めた。無線台の横には氷室が居る。作業員たちも出払ってしまい、工事長も役職者会議に出席の為もうすぐ席を外してしまうだろう。そうになると、二人きりはどうにも気まずい。

愛子はヘッドセットマイクをつけたまま、自席で書類の整理を始めた。休んでいる間、仕事が溜まっているかと覚悟していたが、全部きちんと処理が終わっており、愛子は目を丸くした。氷室がやっておいでくれたのだろうか？

『お礼とお詫びは早いほうが良い』と、誰かに聞いた事がある。
やはり、叩いた事を謝って、介抱してくれた事や、仕事のお礼を
言うべきなのだ。

「上田さん、会議に行つてきますね」

大儀そうに立ち上がると、佐々木工事が事務所から出て行つた。
室内が静かになった。ちらりと目をやると、彼と目が合つてしまつ
た。愛子は大きく深呼吸をすると、氷室の席に歩いて行つた。

「あのつ、主任、先日は叩いてしまい、申し訳ありませんでした」
借りていたＴシャツを差し出して、ぺこりと頭を下げると、氷室
が立ち上がる気配がした。顔を上げると、目の前に彼がいた。氷室
はＴシャツを受け取つて愛子をじつと見下ろしているが、何も言わ
ない。

どうしよう……怒つてるんだ、きっと。

「あたし、その……勘違いしちゃつて……」

俯いてぼそぼそと言ひ訳していると、そつと肩に手を置かれた。
そのままぼんぼんと軽く叩くと、氷室は「パトロール行きます、中
のこと、お願いしますね」と、上着を羽織つて出て行つた。

軽くあしらわれた気がした。

氷室が出て行くと、すぐに飯田が現れた。彼が来るのは帰りに会
つたあの日以来だ。飯田は愛子の座っているデスクにいつもの書類
を放り出すと、行儀悪く隣の空き机の上に腰掛けた。

「なんとかは、風邪ひかないっていうけど？」

飯田は呑気だ。そんな彼の態度が余計に腹立たしい。心の中で彼
を罵りつつも無視していると、飯田はぴよんとデスクから降りて愛
子の脇にしゃがみ込んだ。

「……腹でも壊したか？」

「だれが！」

下から見上げるように顔を覗き込まれ、思わず反応してしまう。
徹底的に無視するつもりだったのに。飯田は「してやったり」とい

った表情を浮かべて、満足気に目を細めた。相手にしていられない、とばかりに、飯田が投げた書類をつまんでめくり始めると、彼がぼそりと言った。

「あのさ……氷室と、何かあったの？」

愛子はどきりとした。書類をめくる手が止まる。なんで、氷室の名前が出てくるのかわからないし、飯田の質問の意図もわからない。黙っていると、飯田は低い声で言った。

「見たんだ、オレ。夜、お前泣いて帰ってったじゃん」

ハッとした。作業着のまま飛び出したのを、見られていたのだ。

「あの後、ここを覗いたらあいつしか居なかった。昼間だって、お前、なんか泣いてたみたいだったし、もしかして、氷室に……？」

飯田は何か誤解してるのかもしれない。

でも……。

乾燥室で倒れたことなど言いたくもない。特にこの男には。またからかわれるに決まってる。それに、桜井のことがあるし。

答えようもないので再び書類をめくり始めると、飯田がすっと立ち上がった。

愛子はほっとした。桜井のことが心に引っかかっているせいか、以前のようにお気楽な会話が出来そうもなかったのだ。ところが、飯田は背後に突っ立ったままで出て行こうとはしない。どうしたのかと椅子ごと振り返ると、脇の下に手を入れられて、すくい上げるように椅子から立たされた。

「ちよつと！」

そのままぎゅっと抱きしめられて、愛子は頭の中が真っ白になってしまった。反射的に身をよじって抵抗すると、つま先が床を離れた。柑橘系のメンズフレグランスの薰りとタバコが混じった匂いを嗅いで、愛子は我に返ったように叫びだした。

「やだよ！ 飯田くん、離して！」

愛子は、首筋に顔をうずめる飯田の頭を思いっきりグウで殴りつけた。

「やだつてば！ 下ろしてよ、はやくっ！」

頭だけでなく、腕や背中まで何度も殴りつけるが、飯田は全然放してくれない。両腕で抱きかかえられ凄いい力で締め付けられて、愛子は急に怖くなった。なんで飯田はこんな事するんだろっ？ いつもの おふざけにしては、度がすぎる。

「飯田くん、ふ、ふざけないでよ！」

暴れながらの声が、引きつったように裏返って、目に涙がにじんできた。

「愛子……オレが……」

耳元で飯田がぐぐもった声を出したとき、ボタンとプレハブのドアが開いた。

途端に解放されて愛子はへなへなと床に座り込んだ。大きく息を吸い込んでドアを振り返ると、氷室が立っていた。

氷室はその場で固まっていたが、視線は飯田と愛子の上をせわしなくさまよっていた。

「あ……」愛子は息を飲んだ。

今の、見られた……！

飯田を見ると、彼は不敵な笑みを浮かべて言った。

「お早いお帰りで」

「用事が済んだら、自分の部署に帰りなさい」

いつもと変わらぬ調子だったが、氷室はあの、鷹の目で飯田を睨んでいた。飯田は前髪をかき上げると、ポケットに手をつ込んで大股にプレハブを出て行った。

彼が出て行った後、氷室は座り込む愛子に目を向けたが、すぐに自分のデスクから書類を二、三枚つかむと無言のまま出て行った。

ボタンと閉まったプレハブのドアを、愛子はいつまでもぼんやりと見つめていた。

昼近くになっても氷室は戻らなかった。もちろん仕事にきまっている。けれど……。もしかして自分と顔を合わせたくないのでは？

などと考えて、その度に愛子はどつと落ち込んだ。例によって氷室宛の電話や仕事の問い合わせに追われたおかげで、何とか気が紛れはしたが、時間はいつもより数倍のろのろと過ぎていった。

昼休みになったが、まだ帰社していない班があるため、愛子はいつものように無線台に弁当を持ってきて座った。

「二班、まだかな」

窓の外に目をやると、駐車場には夏の陽射しに焼かれた作業車がずらりと並んでいた。ふと、ヘッドセットマイクの存在を思い出して、表に出てみようかな、という気になった。

製作者の野口に確認すると「たぶん、遮るものが無ければ、事業所のアンテナから半径五百メートルくらい拾うはずなんだけど」との事だった。念のために席を外すことを彼に告げ、愛子は弁当を手にプレハブを出た。

通勤ルートの遊歩道を通り、いつも突っ切る公園に入ってゆく。

昼時の公園には、近くの役所の職員や、デパートの制服を着たOLの姿が目についた。みな、弁当やパンを手にはベンチでくつろいでいる。愛子も、木陰のベンチを選んで腰掛けた。桜の巨木の梢からセミの声が降ってくる。木漏れ日の下で弁当を広げた時、見慣れた作業着姿が目に入った。

「あら、珍しいわね」

相良女史はつつじの植え込みの向こう側から声をかけてきた。彼女は一旦姿を消したかと思うと、公園の入口からやってきた。手にコンビニの袋を提げた彼女は、愛子のとなりに腰を下ろしてしまった。

愛子は緊張気味に背筋を伸ばした。相良とランチなんて、ちょっとしたゴーモンだ。

どうしよう。話すことなんて、無いのに。

相良はコンビニのビニールからサンドイッチとコーヒーを取り出した。

「それは、音楽を聴くものなの？」

指さす相良に、愛子は野口からの受け売りで、無線送受信機の説明をした。

「これのおかげで、少しだけ行動半径が広がりました」

「そう、やっとだね。私、堤主任には散々言っただよ。あなたを無線台に張り付けておくのはもったいないって」相良は続けて「いつもあなたが気になっていたものだから」と、驚くようなことを言っただ。

しょっちゅう工事課に来ては口を挟んでいた相良が、実は自分のことで堤と揉めていたなんて。

「女子社員だからって、現場作業が出来ないわけじゃないし、今どき無線台に張り付けて、庶務やお茶汲みだけさせているなんて、ナンセンスだと思ったのよ」

愛子は相良のふくよかな顔を盗み見た。会社一筋(?)の女性管理職の横顔は、少し満足気に見えた。

「氷室くんがそれを渡したって事は、あなたを戦力だと思っているのだから、彼の期待に応えるように努力することね」

そう言っただ、相良はたまごサンドを一気に口に押し込んだ。コーヒーを飲み干して立ち上がりかけた相良に、愛子は思い切っただ言っただ。

「あのつ、時々配電課を訪ねてもいいですか？ 私、もっと仕事の流れとかを知りたいんです」

「氷室くんに教わつたらいいじゃない。あの人とても優秀よ。訳あって、こんな末端の事業所に居るけれど、本店に居てもおかしくないぐらいなんだから」

知らなかつた。氷室がそんなに出来る人だつただなんて。そういえば、堤よりずっと若いのに主任になっているのだから、評価されているのだろつ。

でも……。

「あの、私、相良副長に教わりたいんですけど。だめでしょうか？」相良はじつと愛子を見ていたが、「いいわよ。午後ならたいてい

中に居るから」と言って公園を出て行った。

一人になり、弁当を食べ終えた頃、無線が入った。感度良好だ。

「帝都二、感あり、どうぞ」

『手持ち終了です。直ちに帰社します、どうぞ』

「ごくろうさまです。作業発生ございません、帰社願います。帝都K、以上」

公園のベンチに座ってマイクで応答すると、ランチ中のサラリーマンやOLが一斉にこちらを見た。以前だったら、ちよつと恥ずかしい気もしたけれど、愛子は堂々と胸を張っていた。

これが私の仕事だもん。

野暮つたい紺色の作業着も、少しだけ好きになりかけている。会社は恋愛しにくところじゃない。仕事をするとこなんだと割り切らなくてはいけない。あんなことがあって落ち込んでいたけれども、そんな事に心を砕くより、もつとしなければならぬ事が、山ほどある。

ただ、好きなだけじゃだめ。氷室さんの期待に応えられなくちゃ。私は彼の部下なのだから。

「上司と部下。それ以外の何ものでもないんだから……」

ぼつりと声に出してみた。頭の上から降り注ぐセミの鳴き声がつとつしかった。

アフターファイブ

飯田との抱擁シーン　というより、じたばたする子どもを取り押さえる親の図、みたいな、と愛子は脳内で無理やり画像を変換している　を目撃されてから数日経ったが、氷室は何事も無かったように愛子に接した。

彼にとっては、あんなことぐらい、本当に取るに足らない出来事なのかもしれない。そう思うと、愛子の心は果てしなく沈んでゆくのだった。女性として意識されていない以上、自分に出来る最大限のアピールは、もう仕事以外に無い。

愛子は暇を見つけては相良みつ子の居る配電課を訪ねるのが日課のようになっていた。

「そうそう、ポールマップが読めるようになれば、現場作業の無線指令には役に立つわよ」

「そうですね。でも、全然関係ないけど、電力会社の電柱ポールに、こんなにたくさんのお社の機器が設置されているなんて、初めて知りました」

愛子は図面を眺め、本館の二階から見える電柱を見た。変圧器トランスの下辺りに、四角いボックスが設置されているのが見える。ボックスからは三本のアンテナが、下向きに出ていた。

「あれは、携帯電話ね。他にもケーブルテレビの線なんかも通っているから、工事をするときは、いちいち関連する箇所に連絡しないとイケないのよ」

愛子は相良に礼を言い、ノートを手配電課に出た。まだそれほど日は経っていないが、随分と勉強した気がする。最初は緊張していた相良との会話も、何だか楽しく感じられた。きつと相良の方もそう思っているに違いない。今日は、お茶とお菓子まで用意してくれていたのだから。メモをとったノートをめくりながら、本館の一階の廊下を通り過ぎたとき、自分の名前が耳に飛び込んできて、愛

子はふと足を止めた。給湯室のドアが少しばかり開いており、複数の女性の声がした。

「彼女、最近よくうろちょろしてるわよね。野暮ったい作業着で。あれって、やっぱ女子が着ると笑えるよね。日雇い労働者風っていかさ」

「だからじゃない？ 相良のオバサンと、仲がいいの」

「それにしても、飯田くんがちょっかい出すのが不思議だよね。あたしだったら、絶対桜井さんのほうがいいもん」

「あたしもそう思う。だってあの子まるで少年じゃん」

「だから、工事課なのよ。セクハラする気にもならないってゆうか……」

クスクス……

悪意を含んだ笑い声だった。

一步、二歩と後ずさり、愛子は廊下の真横で口を開けている、営業課のフロアに飛び込んだ。接客中の営業課の男性社員が驚いたように振り返る。愛子は彼に会釈すると、カウンターの間仕切りを押し開けて、お客様フロアに出た。そこで立ち止まって営業課のフロアに隅々まで目を走らせ、女性社員の一人一人を確認した。席を外しているのはたぶん三人。その三人が、まさに今、裏の給湯室で自分の事を……。ショックで頭がくらくらする。

その三人とは、何度か一緒にランチを食べに行ったことがあった。それほど親しくなかったけれど、まさか陰であんなことを言われているとは、思いもよらなかった。

お客様用の自動ドアは、社員は通常通ってはいけない決まりだが、そんなことを気にしているゆとりは無かった。

背中に営業課の社員たちの視線を感じつつ、愛子は大股に自動ドアを出て行った。

自席に座っても、何だか落ち着かなかった。さっき聞いた会話が頭の中で回っている。なんであんな事を言われなければいけないの

だろう？ 半分放心しながらパソコンを覗いていると、背後に気配を感じた。

「上田さん、ソーシキリンジ、一班に無線で送ってください」

「へ？ ソーシキリンジ？」

振り向くと、氷室が作業依頼の書類を手に立っていた。

「一班です。ソーシキリンジですよ、契約種別変更です。大丈夫？」
念を押され、ガクガクと頷きながら受け取って、首をかしげた。

ソーシキリンジ？ 臨時……臨時契約？

今まで一度もこんなヘンテコな名称の作業を依頼したことなどない。
「あの……これ……何？」

思わずタメ口で言って見上げた途端に、氷室がプツと吹き出した。
久しぶりに彼の笑った顔を見た気がした。

「ソーシキは、お葬式のことです」

そう言っつて、彼は丁寧の説明してくれた。

最近は斎場が主流なので、自宅で葬儀をする家は少ない。しかしここK事業所は、管轄内に昔ながらの漁村や古い集落があったりするので、自宅での葬儀もごく稀にあるらしい。その場合、普段以上に電力を使うことになるので、家庭用の小電流制限器アンペアブレーカーのリミッターを解除して、たくさん電力を使えるようにしてやるのだそうだ。

「お葬式の最中に、ブレーカーが飛んで、真っ暗になったりするといけないでしょう？」

なるほど、である。

「帝都一、こちら帝都K、感ありましたらどうぞ」

無線で一班に指示を出した後、書類を渡しに行くと、氷室は無表情でそれをつき返してきた。

「上田さん、これ、コピーとって、料金課の飯田くんに、渡してきて」

愛子はハッと息を詰めた。氷室の「飯田くん」と言う時の言い方は、妙に力が入っているような気がしたのだ。

やっぱり氷室も桜井のように、自分と飯田の事を誤解しているの

かもしれない。愛子は一礼してプレハブを出た。本館へ戻るのも嫌だったが、自分を見る氷室の視線も耐え難く感じた。せつかく、久しぶりに普通に氷室と話すきっかけをつかんだと思っていたのに。イライラしてきて、駐車場に並んだ車両の間をジグザグに歩く。

「飯田のばか、アホ！ あんたのせいで、あたしは……！」

口から出るのは、飯田の悪口ばかりになっていた。

愛子は何十台も並ぶ作業車の間をぐるぐる回った。炎天下での無意味な行動に飽きた頃、突然頭上から声が振ってきた。

「へえ。独り言でオレの名前呼んでくれたりするんだ？」

愛子は「ひゃっ」と叫んで飛び上がりそうになった。からかうような言い方は、見なくてもわかる。背中の汗がすうっと引いてゆくのを意識した。

恐る恐る見上げると、四階建ての本館屋上から飯田が身を乗り出していた。彼はわざと火の消えた吸殻を落として寄越した。バカみたいに、本人の真下で叫んでいたのだ。

「そんなとこに居るなんて、は、反則だよ……」

返す言葉が尻つぼみになってしまった。彼は「そこで待ってる！」と怒鳴ると、屋上から消えた。

飯田は、本館裏手の非常階段から、足音も高らかに降りてくるなり、愛子の耳を覆っているヘッドセットマイクを奪い取った。

「お、かつこいいの、つけてるじゃん」

飯田は愛子の届かない高さでそれをくるくると回すと、自分の頭に装着した。

「返せ！」

ぴよこぴよこと虚しくジャンプする愛子を見て、飯田はにまっと笑って言った。

「なんか、言いたいことあるでしょ。ちゃんと聞くから、今日駅ビルの居酒屋で待ってるよ」

「行かないよ、居酒屋なんて。ガキみたいな事してないで、返して

よ」

本人の顔を見て、よけいに腹が立ってきた。それに、まるでいじめっ子のような行動が、愛子の怒りを増幅させた。小学生の頃だっただろうか、いつも背の高い男の子が、愛子のポニーテールを吊るし上げては「ウサギ、捕まえた！」って、笑っていたのを思い出す。社会人になってまで、やるか、普通。

「もういい！」

クルリと背を向けると、飯田が低い声で言った。

「オレだって、言いたいことがある。……桜井さんの事とか」

愛子は思わず振り向いてしまった。飯田は近付いてくると、愛子の首にそっとヘッドセットマイクを戻して言った。

「氷室の事とか、それから……オレが何であんなこと、したのかとか……」

逃げ出したい、そう思った。特に、「あの時のこと」は、聞きたくないような気がする。飯田との心地良い関係が壊れてしまいそうで、何だか怖い。

沈黙していると、エンジン音を響かせて、工事課の高所作業車とトラックが駐車場に入ってきた。二台の車には、大勢の同僚が乗っているはずだ。愛子は飯田の手に素早く書類を押し付けると、「わかった、行くよ」と言ってプレハブに戻った。

事務所に戻ると、無線台の傍に所長と総務課長が来ており、氷室と工事長を相手になにやら深刻な話をしていた。

「明日は、氷室くんともう一名、安全祈願の座禅に行ってください。各課からも、管理者クラス一名と担当者一名を出席させます」

先日奥田の事故があった際、安全祈願がどうかと言っていたことを思い出した。だが、明日は協力会社や下請け業者を交えての合同会議が開かれる予定で、工事課にとっては大事な会合だった。その際には、工事長と主任はセットで出席するのが常なのだ。

「氷室くんの代わりに、別の作業員ではダメですか？」

さすがに大事な会議とあって、工事長は懸命に食い下がっているが、総務課長も所長の手前、妥協は出来ない様子だった。

愛子は、他の社員と共に遠巻きに見守りながら、先日のも所長たちの言葉を思い出していた。

疫病神って居るんじゃないかな？

あの言葉から察するに、安全祈願とやらの目的の一つは、氷室を出席させることに間違い無さそうであった。バカみたいな話だが、この職場に配属されて最初に目を奪われたのが、工事長の席の真上に据えられた、立派な神棚だった。毎月一日には、朝一番で神棚に向かつて手を合わせ、作業員一同が安全を祈願するのも恒例となっている。二週間に一度、神棚に供える榊の葉を取り替えるのは、若手作業員の忘れてはならない役目の一つだった。

命にかかわる危険な職場だからこそ、安全やそれに関わる神事が重要視されており、また、氷室のように行く先々で事故に遭うような人間は、たとえそれが本人の不可抗力であったとしても、忌み嫌われるのだった。

一歩も引かない工事長と総務課長の間で、所長が和解案を提示した。

「氷室くんの代わりに、私が工事課の合同会議に出席しようじゃないか。そして、安全祈願には、所長代理として総務課長に出てもらうから。それでいいでしょう？」

これが、王手だった。

工事長はうなだれたように一礼してから、ふいに愛子に目を向けた。

「上田さん、明日、申し訳ないけど氷室さんと安全祈願に行ってください。これ以上、作業員を出すわけにいかないんです」

「あ……でも、無線は……？」

いきなり氷室と出掛けるなんて困る。愛子はうろたえて周囲の同僚たちを見やった。皆あからさまに目を背けたようだった。そりゃそうだ、安全祈願の座禅など、誰も好んで出席したくはない。

「そのヘッドセットマイクを、一班の野口班長に預けておいてください。何とかなるでしょう。駄目なら、携帯を使っても補うようにしますから」

佐々木工事長の言い方は、キミの代わりはいくらでも居る、と言っているのに等しく聞こえ、愛子はただ「はい」と答えるよりなかった。

終業時刻を告げるチャイムと共に、本日の宿直者を残して工事課のメンバーが一斉にデスクを離れた。

一番若い奥田が、ドーナツサポーターのとれた首を回しながら、追い越しざまに愛子に言った。

「上田さん、申し訳ないね。本当は事故に遭った僕が指名されていたんだけど、明日病院だからさ。代わりに安全座禅、頑張ってね」

奥田は満面の笑みで愛子の背中をボンと勢いよく叩いた。何だか妙に嬉しそうだった。前回同じ行事に出席した事のある作業員たちからは、「座禅って大変だぞ」とか「背中叩かれても黙ってお辞儀をしないとまた叩かれるぞ」なんて、嘘か真かわからないような脅しを聞いている。愛子は覚悟を決めたような顔を作って、「頑張ります」などと、笑っていたが、内心は座禅よりも先ほどの工事長の態度や、氷室と出かけなければならぬことで頭が一杯だった。

飯田との待ち合わせも、愛子の気分を暗くしていた。

大きくため息をついて、貴重品の入ったバッグを手にデスクを離れると、氷室に声を掛けられた。

「上田さん、明日は九時にここを出ますから。いつもの作業着でよいそうです。よろしく願いますね」

「主任と二人で、ですか？」

念のため尋ねてみると、氷室はあっさり頷いた。

「他係のメンバーは、それぞれ現地集合ですが、僕が合同会議の準備をしてからじゃないと出られないので、あなたも行動を共にしてもらいます。時間になったらすぐに出発できるよう、準備しておい

てください」

表情の無い顔で言つて、氷室は自席に戻つて行つた。

本来なら、氷室と二人で出掛けられるなんてドキドキのはずなのに、この空気の重さはいつたい何なのだろう。

上司と部下、ただそれだけ。

愛子は大きいため息をついて職場を出た。

アーケードのある商店街を抜けて、人々でごつたがえす駅ビルの中に入つた。冷房のよく効いた一階の飲食街を歩いてゆくと、居酒屋の前ですでに飯田が待つていた。店に入ると奥まつた隅の二人席に案内された。入口から死角になつていたので、こんなところにも席があることを、愛子は初めて知つた。

「今日はオレのおごりだから、好きな頼んでいいよ」

飯田はいつもと変わらない態度で、へらりと笑つた。彼に言いたい事は山ほどあつたが、こう面と向かつてニコニコされてしまうと、何だか言葉が出てこない。飯田は要領よく適当につまみを頼み、愛子に生ビールを手渡すと、勝手にグラスを合わせた。

「んじゃ、かんぱーい」

楽しげに顔を覗き込まれ、愛子はすっかり黙り込んでしまった。

彼のおごりで飲み食いしているだけなのだから、これじゃあまるでただのデートだ。

「愛ちゃん、そのワンピース、可愛いじゃん」

さりげなく褒められて、悪い気はしないのだが、どうにも気分が乗らなくて、愛子はいきなり話題を変えた。

「あのさあ、こんな、デートみたいなことしててさ、桜井さんに悪いとか、思わないの？」

ふう、と飯田はあからさまに嫌そうな顔で大きく息を吐いた。

「あのさ、桜井さんとオレは、べつに何でもないの。この間の事は、お前をダシに使つたみたいになつちゃつて、悪かつたと思つてるよ。だからこうしてお詫びのしるしで……」

「お詫びのしるしって……！」

愛子は絶句した。もしこれが本当にお詫びなら、あとビール五十杯は注文してやらなければわりに合わない。なんたって、こっちはあやうく干物になりかけたのだ。

「だけど、桜井さんの顔は……あれは、ただ事じゃなかったよ。飯田くん、本当に何でもないって、言えるの？」

飯田はバツが悪そうに視線を泳がせると、落ち着かない仕草でタバコを取り出した。やっぱり何かあるのは、見え見えだった。飯田は観念したように言った。

「この前、うちの係の若い奴らと、総務課・営業課の女子社員とで合コンみたいなことしたんだよ。その時にさ、桜井が酔ってオレが送っていく事になって……」

愛子はうんざりして耳を塞いだ。飯田のこのテの話題は、何となく結末が予想できてしまふ。すると飯田は大真面目な顔で、愛子の手を耳から外した。

「ちゃんと聞けって！」

「いいよ、もう。飯田くん、いつもそんなじゃん。女の子つまみ食いして、そんなに楽しいの？」

乾燥室に閉じ込められたけれど、今は桜井に心底同情していた。

飯田は怖い顔でかぶりを振った。

「違っつて。さすがにオレも、桜井園子嬢は遊び半分じゃいけないキャラだって、わかってたよ」

「じゃあ、どうして？」

「いっぺんだけって言うから、軽くしてやったんだ」

愛子は瞳を大きく見開いたまま固まった。ぶわっと血液が顔に集まる。

「軽くしてやった」って、いったい女性をなんだと思っているのだから？」

「そ、そんな、軽くとか……そんなの、区別があるわけ？」

愛子は手元のビールを一気飲みすると、ジョッキをテーブルに叩

き付けた。

「いっぺんだけ、キスしてくれって言うから、してやっただけだ」

「え……？ キス」

飯田は頷くと、愛子の反応に満足したのかにまっと笑った。本当なのかと念押ししたが、飯田は大きく頷いて言った。

「軽いキスしたからってさ、恋人にされたらこっちだって困るって。それも酒の席だし、あっちがしてくれってうるさかったからしただけで、桜井だってそれでもいいって……」

でも、何だか釈然としなかった。もし自分が氷室にそんなことされたら、きつと桜井みたいに勘違いしてしまうと思った。たとえ酒の席であっても、そういうのは良くないと思う。やっぱり飯田が悪いのだと愛子は思った。

「付き合う気が無いならさ、あたしなんかダシに使わないで、きちんと言葉で言ってあげた方が親切だよ。飯田くん、そういうところ、全然わかってないよ」

語気を強めて言うと、飯田は黙り込んでしまった。こちらは全く悪くないのに、責めているような形になってしまったのが気に入らない。もう、帰りたいなと思い、腰を浮かしかけると、手をつかまれた。

「氷室だ。女連れ」

飯田が愛子の背後に目線を走らせて小声で言った。

瞳を見開いたまま、そろりと振り返ると、こちらに背を向けてカウンター席に座った氷室と女性が見えた。チラリとのぞく女性の横顔は、とても綺麗だった。

「すげえ美人連れてるじゃん。あれって彼女だよな、絶対」

飯田の声が愛子の胸にぐさりと刺さった。

「い、一緒にいるからって、彼女とか決めるの、おかしくない？

飯田くんとあたしだって、ただの友達じゃん」

自然と声が小さくなった。飯田は手元の箱からタバコを一本抜き出すと火を点けた。氷室と連れの女性を目で追いながら、フウと大

きく煙を吐いた。

「そりゃ、愛ちゃんとオレはトモダチだけだね。でも、あれ、どう見たって親しいんじゃない？」

見たくない、と思いつつも好奇心に負けて再び振り向いた愛子の目に飛び込んで来たのは、女性の肩にそつと手をかける彼の姿だった。女性は氷室に向かって何かしきりにしゃべった後、しばらくして手元のお絞りで目元を拭いだした。振り返ったまま、カウンターの二人に釘付けの愛子を見て、飯田がフツと笑ったようだった。

「そんなにかぶりつきで見てたら、おかしいって」

呆れたように言われ、愛子は動揺を隠すために、運ばれて来たばかりのビールを一気飲みした。あの女性は飯田が言うように、氷室の恋人だろうか。年のころは二十代後半くらいに見えた。男の前で涙を流すなんて、よほどのワケアリだと思った。氷室も氷室で、女性の背中を優しく叩いている。どう見ても、飯田の見立ては正しいと思えてきて、愛子は無意識に三杯目のビールを飲み干した。

その後もカウンターの二人が気になって仕方がない愛子に、飯田がとうとう言った。

「なんかさあ、氷室ばっか、気にしてるんだね。こんなにいい男が目の前に居るってのに」

「え……あ、ゴメン……」

愛子は再びビールを一気に飲もうとして、飯田に止められた。

「もう止めとけて。これ以上一気飲みしたら、マジで倒れるって」
言われて初めて愛子は自分の視界が歪んでいることに気がついた。それでも尚、カウンターが気になり、椅子にほぼ横座りになると、トロンとした目を飯田から二人へと泳がせた。

「なあ、氷室を呼んできてやろうか？」

飯田が完全に怒ったような声で言ったとき、カウンターの二人が立ち上がって店を出て行く素振りを見せた。

「飯田くん、余計なこと、しないで」

愛子は飯田の腕を引っ張って、座席に座らせた。氷室は女性の背

中を抱くようにして店を出て行った。

二人の姿が見えなくなった途端に、張りつめていたものが切れたようだった。

ゆらりと立ち上がった愛子を見て、飯田がハッと息を飲むのが聞こえた。

「愛……何それ、おまえ、笑えないよ……」
「へ？」

愛子は、飯田の方に向けている自分の顔に両手で触れた。頬が両方とも濡れていた。

「らって、飯田くんが意地悪いこと、言うから……」

ろれつが回っていないことに気付いたが、何だか言葉が止まらなかった。

「あの人、氷室さんの彼女だね。きっとそうだよ。あたしなんて、彼の眼中に無いんだから」

涙も止まらない。飯田はただバカみたいに口を開けてこちらを見ている。そうだよ、アンタが悪いんだ。

「飯田くん何であんなことしたの？　よりによって氷室さんの前で……」

飯田は悪くない。見られたのは偶然なんだから。でも、頭ではわかっていてのに、言葉が勝手に出てしまう。

「だってお前……」

飯田は困ったような顔を向けた。

「大きなお世話なのよ！　氷室さん、どうせあたしなんかに興味ないし。あのことからって、何事も無かったみたいに無視して。あたしなんて何とも思われてないんらモン。部下としても、女性としても……。あたひなんて……ひつく」

急に足元がふらついた。飯田の前で涙を流している自分も、十分ワケアリだな、などと、頭の中のどこか冷静な部分で思ったりするが、一步、二歩と踏み出した時点で、愛子は居酒屋の床にぺたりと座り込んでいた。

「大丈夫かよ」

呆れたように抱えられて、椅子に座らせられると、愛子は飯田が止めるのも聞かずに、残っていたビールを一気飲みし、さらに飯田の前にあったウーロンハイにも手を出していた。

「お前、あいつのこと怖がってたのに、もしかして……本当は好きだったとか？」

ぐるぐるまわる頭に、そんな飯田の声が聞こえて、ただガクガクと頷いていた気がするけれど、もう何だか意識が飛び始めていた。

安全祈願はヤバすぎる

翌朝未明、愛子はベッドの中で頭を抱えてのた打ち回っていた。
こんな頭痛は初めてだった。

結局あのあと、ヤケ酒モードで二軒はしごして帰宅した。飯田がタクシーで送ってくれたのは覚えているが、それ以外はあまり記憶がなかった。タクシーを降りた後、彼が何度も頬を叩いて何か大事な事を言っていたようだったが、頭が割れそうで、今は全く思い出せそうになかった。

とろとろと浅い眠りを繰り返し、喉がやけに渴いて、乾燥室の夢にうなされていると、目覚ましが鳴った。

「もう、一步も動けない……」

自分が異常に酒臭かった。なんで、あんなに飲んでしまったのか、訳がわからない。最後はめっちゃめっちゃハイテンションだった気がする。頭を揺らさないようにそろりと起きだすと、ワンピースのまま寝ていた。きつとこんな状態じゃ仕事にならないだろう。

「休もうかな。どうせあたしの代わりは野口さんだし……」

そう呟いた途端に、思考がゆっくりと動き出した。野口に何かを渡すように言われなかったか？ 何でそもそも野口が自分の仕事を？

「あ……」

一気に記憶が巻き戻る。タクシーを降りたときの飯田の口の動きが甦って来た。

『ざ・ぜ・ん・い・け・る・の・か』

「ああ、どうしよう」

割れそうな頭を抱えて、化粧もそこそこに、同じワンピースのままで、愛子は家を飛び出した。

一駅乗っては下車をする、を繰り返し、ようやく会社にたどり着いたときには、八時を回っていた。遅刻ではないけれど、いつもやるべき事を片付けるには到底時間が足りない。それに、電車で揺ら

れたことで、吐き気が酷かった。会社のトイレで便座とお友達になりながら、買ってきた液薬と口臭予防の錠剤を一気に飲み込んだ。

職場に行くと、氷室は合同会議の準備に追われて飛び回っており、会議の出席者である協力会社や下請けのお偉いさん方もすでに顔を見せていた。愛子は応接セツトの片付けとお茶出しを命じられて、吐き気と戦いながらフロアを行ったり来たりした。そして、九時になると、さらわれるようにして業務車に乗せられ、安全祈願の会場へと移動させられた。

車中では頭痛と吐き気の為に、愛子は終始無言状態だった。氷室も仕事のことが気に掛かるのか、後部シートでぐったりしている愛子の様子には全く気がつかないようだった。

愛子にとって、心ときめくはずのドライブは、最悪の形で終わった。

金龍禅院は、一般の人が禅に触れるためにその門を開いている禅寺である。そして、この寺に縁のある龍は、雷の化身ということで、何年も前から帝都電力の作業員が座禅を組んで安全を祈願しているのだそうだ。なんとも曖昧な稲妻^{スパーク}つながりである。

本堂に集められた帝都電力の社員十数名は、和尚のありがたい話を聞いた後で、さっそく安全祈願の座禅を組まされることになった。

「女性は正座、男性は胡坐を掻き、目は半眼で。半眼、すなわち薄目を開けて、前方下手を見るのは、釈迦如来の目線と同じ。無心の境地に達する為に、倣うことが大切です」

和尚は大きなしゃくを持って、皆の周りを歩きながら、念仏のようにならべた。

この時点ですでに愛子は意識が朦朧としていた。

開け放たれた本堂からは、白い玉砂利を敷き詰めた美しい庭が一望できたが、そんな美観も愛子の虚ろな目には何も見えていないに等しかった。

気持ち悪っ……。

緑豊かな庭園には、セミの声がうるさいくらいに響き渡り、愛子

の二日酔いの頭をさらに痛めつけた。

頭が割れそうだわ、どうしよう……。

ぎゅっと目を瞑った途端に、背中を思いっきり叩かれて、愛子は板の間に突っ伏した。

まるで蛙がつぶれたときのように、べしゃっと顔から板の間に倒れてしまい、愛子は呻き声を上げた。

隣で氷室が息を飲むのが聞こえると同時に、叩かれた音がした。突っ伏した姿勢から元に戻ると、氷室がちょうどお辞儀をしたところだった。叩かれたら、合掌してお辞儀をしなければならないと、最初に説明されていたことを思い出した。多分彼は倒れた自分を助け起こそうとして動いた為に叩かれたのだろう。

惨めだった。知らぬ間に、涙が出てきてしまい、鼻をすするたびに叩かれた。そんな愛子の様子を見て、思わず吹き出した料金課の女性も叩かれた。

ああ、キモチワルイ……。

叩かれて、頭を下げるたびに眩暈がして、胃の中のモノが上がってくる感じがする。先ほどから、本堂のある中庭は無風状態になり、愛子の額には汗が噴き出していた。もっともその汗は、苦痛の為に脂汗かもしれないが。

自分では意識していないのに、また体が前のめりになっていたようだった。

バシツと叩かれた途端に、堪えていたものがあふれ出てきた。

もう限界です。神様、仏様、和尚様、私をお許しください。

「げっ」という音と共に、立ち上がった愛子は、本堂の濡れ縁から庭に向かって嘔吐していた。

これにはさすがに和尚もたまげてしまい、座禅は即刻中止された。ああ、やっちゃった、どうしよう！

白い玉砂利の庭園に、胃の中のモノを全部吐きまくった後、愛子は濡れ縁に座り込んだ。今までの静寂が一転し、背後の人間たちが慌ただしく動き出していた。

ぐったりした愛子は、氷室に支えられて、本堂の外に運ばれた。壁に寄りかかるようにして廊下に座らされた愛子は、あまりに自分が情けなく、また恥ずかしくて、意識の無いフリをしていたが、実際は全部聞こえていた。

総務課長が和尚に散々怒られているのも聞こえていたし、何故具合の悪い人間を参加させたのかと氷室が全員から責められているのも聞こえていた。

「申し訳ありません、僕が気付かなかったばかりに……」

ひたすら謝る彼の声が聞こえたとき、つぶっていた目から涙が溢れてきた。

もう、おしまいだ。よりによって氷室の前で、こんな醜態を曝してしまうなんて。それでなくても、元々工事課の戦力外なのに、雑事もこなせず迷惑ばかり掛けている事が、申し訳ない。会社員どころか、社会人として失格だ。

本当にあたしって、役立たずだ。

氷室が戻ってきて、声をかけられた。

「上田さん、帰りましょう」

羞恥のあまり目を開けることが出来ずにいると、よいしょとばかりに抱え上げられてしまった。

そのまま浮遊感と共に、外へ連れ出されたようだった。ざくざくと砂利を踏む音がして、喧騒から離れた。薄く目を開けると、きゅっと唇を引き結んだ氷室の顔がすぐそばにあった。彼は険しい眼差しで前方を見据えたまま、愛子を抱きかかえて駐車場に向かっていた。

もう、気を失ったフリをするのも限界だった。

「ご、ごめんなさい……」

愛子は氷室の腕の中、消え入るような声で謝罪していた。意識があるのだから、すぐに下ろされてしまっただろうと思った。

氷室は一瞬立ち止まったが、下ろすような事はせず、車まできちんと運んでくれた。

助手席のシートを倒して愛子を寝かせると、すぐにエンジンを掛けて冷房を入れた。

「車出すけど、気分が悪いようだったら、すぐに止まるからね」

愛子はシートにひっくり返ったままで、力なく頷いた。自身が出す酒臭くてたまらないくらいだから、二日酔いによる嘔吐だという事は十分承知しているはずなのに、氷室は労るように声を掛けてくるだけだった。まともに彼の顔を見ることが出来ず、こちらから声を掛けるのも憚られた。汗と涙にまみれた顔を、両手で覆っている、そつとタオルを渡された。

「ごめんなさい。ごめんなさい。」

タオルを受け取って顔を覆うと、愛子は心の中で何回も謝った。

会社の駐車場に着いた時、氷室からすぐに着替えて早退するようにと言われた。

惨めな思いで工事課のプレハブに戻った愛子は、若手メンバーから異例の称賛を浴びせられた。先に戻っていた座禅出席者から、早くも嘔吐事件が会社中に広まってしまったのだと理解した。だから氷室は「すぐに帰れ」と言ったのかもしれない。

このたびの彼女の武勇伝は、悪ふざけが大好きな若手のツボに、大いにヒットしたようだった。こんなふうにかかわれるくらいなら、しょうもない奴だと無視されるほうがましなように思えてくる。さすがに、班長クラスになると、もう何も言えないといった雰囲気だった。とりあえず今日のところは叱られるような事は無かった。

氷室は帰社してすぐにどこかへ居なくなってしまった。合同会議の後始末か、あるいは愛子の事件の後始末か、どちらにしても責任者としての仕事に追われている事は間違いない。これ以上どんな迷惑があるのか思いつかないが、また何をしでかすやら、自分に自信が無かった。今日はもう言われたとおりに帰ることにしよう。

愛子は職場の皆に挨拶すると、本館の女子更衣室へ向かった。

途中、遠目に飯田の姿を見かけたが、声はかけずにおいた。彼も心

なしが具合が悪そうだった。あんなに飲んだのだから、自分だけが撃沈しているのでは面白くない。飯田もきつと頭痛に悩まされているのだと思うと、妙に笑えた。

重たい体を引きずって、女子更衣室への階段を上がっていると、上から桜井園子が降りてきた。事業所中に醜態をさらした以上、もう飯田の件なんて、ノー眼中だ。桜井だけでなく、女子社員全員が自分のことを不快に思っているに違いないのだから。

案の定、愛子の姿を認めても、桜井はずっと視線を下に向けて声もかけてはこない。

愛子は大きく息を吸い込んだ。二日酔いの抜けかけた頭では、何かを考えるのも面倒臭い。座禅のことも、乾燥室のことも、飯田のことも、勝手に誤解して、勝手に想像して、勝手に陰口でも何でも叩くがいい。そんな気分だった。

「お先です！」

大きな声で言っていると、桜井は驚いたような顔で会釈を返してきただけだった。

社会人ってなに？

翌土曜日は休日だったが、愛子は早起きをした。朝食の席で昨日の早退の理由を母と祖母から尋ねられて、仕方なく本当の事を話したところ、母親には「呆れ返って物が言えないわ！ 嫁入り前の娘がみつともない！」と酷く叱られた。しかし、祖母は違った。

祖母は愛子を自分の部屋に呼んだ。祖母の和室に入るのは久しぶりだ。冷房が苦手な祖母の部屋は、この家の中で一番風通しが良い。開け放った窓から涼しい風が入ってきて、カーテン代わりのすだれを揺らした。

祖母は愛子の大好きな茶まんじゅうと麦茶を用意してくれた。

「愛ちゃん、お仕事してお金をもらうのはとても大変ね。嫌なこと多いっぱいあるでしょう？」

祖母の言葉に愛子は黙って頷いた。幼い頃、母や父に叱られると、いつも祖母の和室に逃げ込んでいたことを思い出した。大人になるにしたがって忙しくなり、働き出してからと同じ屋根の下に住んでいながら生活サイクルのずれで祖母と顔を合わせる回数が減り減っていた。愛子はまんじゅうを口に入れて、ぼそりと言った。

「おばあちゃん、あたし、会社で氷室主任に迷惑ばかりかけてて、全然仕事も出来なくて、あたし……」

氷室の名前を口に出した途端に涙腺が弛んでしまった。

祖母は可愛くて堪らないという表情で愛子を見ながら言った。

「愛ちゃん、迷惑かけた方たちには、きちんと謝ることが社会人なのよ。仕事はその次でいいじゃない。きちんと挨拶が出来て、失敗したら素直に謝れることが、一番大事なんじゃないかしら」

「本当に、そんなんでいいのかな？」

手の甲で目元を拭って、上目遣いで見上げると、祖母は笑って言った。

「学校じゃないから誰も教えてくれないし、褒めてもくれないけれ

どね。でも、愛ちゃんが自分に出来ることを一所懸命やってれば、きっと伝わってるから。その分おばあちゃんが褒めてあげる」

祖母は愛子の髪を撫でながら「毎朝早起きして偉いね」「男の子に混じって、女の子一人でも頑張ってるよね」と言った。面と向かって言われると、何だか照れくさい。

それでも祖母の部屋を出た時には不思議と気持ちがスッキリしていた。

きちんと謝ること。自分に出来ることをやる。

愛子は父親の車を借りると、真夏の街に出た。

車の運転は好きだ。十八になってすぐに免許を取って、よく友達とドライブした。エアコンを切って窓を開けると、気持ちのよい風が髪を弄る。青葉の街路樹を眺めながら、電柱や電線を目で追っていることに気付いて苦笑した。

国道に出て三十分ほどで見た事のある風景が広がった。昨日、氷室の運転で通った金龍禅院へ向かう道だ。左折で国道を離れると、急に緑が増えた。この辺りは道が細くなっている。俗に言う寺町通りだから、瓦屋根の古い家並みがあちこちに残っていて、とても風情がある。

一方通行の標識を気にしながら進み、ようやく寺に着いた。

祖母に言われたことを、愛子なりに考えての行動だった。会社の行事として開催された安全座禅の席での醜態は、愛子個人の問題ではない。『帝都電力社員』の醜態なのだ。

「とにかく迷惑かけた事を、住職さんに謝ってこよう」

愛子は水羊羹の包みを手に、住職を訪ねた。住職は驚いたような顔はしたが、怒ってなどいなかった。

「あの、昨日汚してしまったお庭をお掃除したいんですけど」

そう申し出ると、住職は大きな声で笑った。

「ははは、気にしなさんな。もう片付いているから」

「でも……」

それでも気が済まないことを告げると、「じゃあ裏庭の草むしり、

手伝ってくださらんか？ 家内が一人でやってますから」そう言つて軍手とタオルと麦藁帽子を渡された。

「草むしり……」

予想外だったが、掃除をするつもりだったからまあ似たようなものである。

愛子は本堂を回りこむと、日差しが照りつける庭園を過ぎて日陰の裏庭に入つて行つた。裏は寺の墓地になっている。墓地と庭の境目辺りで女性がせつせと草を取っていた。そばに行つて事情を話すと、住職の奥さんは笑つて言つた。

「まあまあわざわざすみませんね。さすがは一流企業にお勤めだこと。帝都電力さんは社員さんの教育をきちんとなさっているのね」

ああ、やっぱり社会人として組織で働くというのは、こういうことなんだと改めて理解した。会社の知名度があればあるほどに、個人の行いが組織の評価として跳ね返ってくるのだ。相良女史がしょっちゅう衣服の乱れを指摘したりするのは、あのブルーの作業着が会社の看板だからなのだと気付いた。所内で働く女子職員の制服よりも、現場作業員の青い作業着こそ一般市民に浸透している『帝都電力』のメジャーなユニフォームなのだ。

そう考えると、なんだかあの青い作業着が特別に思えてきた。

あたしって、単純。

愛子は雑草をむしりながら楽しい気分になっていた。

汗をかき、一心不乱に作業するうちに腰が痛くなってきた。立ち上がつて腰を伸ばすと、自分の影が短い。太陽はちょうど真上を通過中だった。

「あの、もうそろそろ……」

振り返つて声をかけたが、いつの間にか一人になっていた。

愛子はやぶ蚊に刺された首筋を掻きながら、ふらふらと本堂の正面に出た。白い玉砂利を踏みながら住職の奥さんを探してきよろきよろしていると、ふと視線を感じた。

首をめぐらせると、本堂の濡れ縁から住職ともう一人、男性がこちらを見ている。

「しゅ……主任！」

氷室が眩しげに目を細めている。

どうして彼が居るのだろうか？ 愛子は頭の中が真っ白になってしまった。

「草取り、ごくろうさま」

氷室に声を掛けられ、愛子は慌てて自分の姿を見やった。Ｔシャツとジーンズは汗とほこりにまみれている。ぶかぶかな軍手と大きな麦藁帽子を被った自分の影は、まるで畑の中に立つ案山子みたいに見えた。

「あ……あの、あたし……」

愛子はしどろもどろで俯いた。昨日に引き続き、どうしても彼の前でこんな姿を晒してしまうのかと、頭を抱えなくなってくる。住職が愛子に向かって手招きした。

「家内が握り飯を用意したから、食べていきなさい。ご苦労様でした」

昨日座禅を組んだ本堂に上がりこみ、奥さんお手製のおにぎりにつけものをご馳走になった。ほかほかのおにぎりはきつと美味しいのだろけれど、氷室がそばに居るので味なんかまったくわからない。愛子が食事する間、彼は黙って眩しい玉砂利の庭園を眺めていた。昼時のぬるい風が彼の前髪を揺らす。いつもは整髪料でサイドに流している髪が、今日はすつとんとんだった。愛子は勤務シフトを思い出した。氷室は昨夜当直だったと記憶している。髪型のせいだろうか。ネクタイを外し、Ｙシャツ姿でくつろぐ彼は、職場に居るときよりずっと若く見える。

でも、氷室さんはあたしの上司……。

氷室は会社の代表として、昨日のことのお詫びに来たらしかった。「出来の悪い部下でごめんなさい……」

愛子がぼつりと謝ると、氷室は振り向いてふっと柔らかく微笑ん

だ。

「もういいよ。昨日ちゃんと謝ってくれたでしょう？」

「あ……」

愛子は顔から火が出そうだった。彼の腕の中で、半ベソ状態で謝罪した事を思い出した。真っ赤になって俯いている愛子に、氷室が言った。

「僕のほうこそキミに謝らなくっちゃいけない。昨日のことも、乾燥室のことも。部下の体調にも気付かないなんて、上司としては失格だ。特に現場作業員を束ねる身としては尚更さ。不甲斐ない自分が嫌になるよ」

愛子はなんと行って良いのかわからなかった。黙っていると氷室は目線を庭園へとさまよわせた。

「転勤早々奥田くんが事故に遭って、わざわざ安全祈願したのは、たぶん僕のせいだ。どうしてだか行く先々で事故があるんだよ。呪われてるのかな」

そう言って氷室は自分の右の小指を左手で包み込んだ。愛子はじつと彼の手元を見つめた。あの小指は、事故と関係があるのかも知れない、ふとそんな気がした。

住職にお礼を言って本堂を出ると、愛子は勇気を振り絞って言うてみた。

「あの、あたし車で来ているんです。良かったらご自宅までお送りしますけど」

「え、運転できるの？」

氷室が心底驚いたような顔をした。自分が運転免許を持っているということが、そんなに意外だったのだろうか。

「あたし、運転は大好きです」

氷室は笑って「じゃお言葉に甘えて」と言って助手席に座った。

愛子はドキドキしてきた。彼の自宅がどこにあるのか、独身なのかそうでないのか、そういったことがきつと全部わかるのだ。何よ

り、父親以外の男性を助手席に乗せて走るなんて、教習所の教官以来だ。

「なんか緊張する……」

ボソリと呟くと、となりで氷室がシートベルトをぎゅっと握り締めるのが目に入った。

「やっぱり、最寄りの駅までにしてもらったほうがいいかな？」

緊張気味に言う彼の言葉を無視して、愛子は車を発進させた。

「お住まいはどこですか？」

「Y市の川沿いにある会社の独身寮です」

彼の答えに、愛子は心の中でガツポーズをした。なんという幸運！ 独身寮ということは間違いなく結婚していないということだ。どうしよう、どうしよう！

急に心拍数が上がってきて、赤信号を見落としそうになってしまった。急ブレーキを踏んだ途端に凄い剣幕で叱られた。

「危ないじゃないか！」

「す、すみません。いつもはもっと上手なんですけど……」

言い訳する愛子に一瞥をくれると、氷室はまるで教官のように愛子の運転をチェックしだした。

「制限速度、きちんと守って」「進路変更時のウィンカーが遅い気がするんだけど？」「信号のない交差点では速度を落として」

何だか本当に講習を受けているようだった。

「主任、うちのお父さんよりうるさいよ」

うんざりして思わずタメ口で言つと、コツンと頭を叩かれた。

「こんなんじゃない、会社の車、任せられないな」

彼の言葉に愛子はチラリと助手席を見た。

会社の車って、どういう事だろうか。

不思議そうな愛子の顔つきに気付いたようで、氷室は真面目な表情で言った。

「もし、上田さんにやる気があるのなら、大型車の免許、取ってもらおうかって、今、ふと考えていたところなんだよ」

「え？ 大型免許？ あたしが、ですか？」

「うん、相良副長から女性の職域拡大について、もつと積極的な取り組みをするべきだって、前々から意見をもらっていたようなんだ」
前々からということは、前任者の堤の頃からという意味だろう。

男女雇用機会均等法が施行されてからもう大分経つが、会社の中で一番女性が進出しにくい部署が工事課なのだと氷室は言った。

「事務職として採用している女性社員に、いきなり電柱登らせるわけにはいかないでしょう？」

まずは出来そうな所から実績を作ってゆくしかないのだそうだ。

「でもね、現場に出るということは、少なからずも内勤より事故に見舞われる確率が上がるという事なんだ。だから、本人の意向を無視して、やりたくもない仕事をさせるわけにはいかないんだよ。特に、事務職として採用されている上田さんは、やりたくなければ拒否する事だって出来るんだ」

自分に出来ることを一所懸命やる。

彼の期待に応えるように。

愛子の頭の中を祖母や相良の言葉がぐるぐる回った。青い作業着姿の自分が、会社のロゴ入りのトラックを運転している姿を想像すると、何だかちよっぴりワクワクする。桜井園子や、給湯室で陰口を言い合っている女子社員と自分は違うのだ。今までも彼女たちと自分は違うのだと思っていたが、今回は今までの「違う」ではない。外に出て、工事課の一員として汗を流す。

『労働者風のOL』じゃなくって、本物の作業員なら、きつとカッコイんじゃないかな。

信号が赤になり、ブレーキを踏んで止まると、愛子はハッキリと言った。

「主任、あたしやってみようかな。いえ、是非やらせてください」
横に座る彼を見ると、切れ長の瞳が優しげに微笑んでいた。初めて会ったとき、どうしてこの人が怖かったのかと不思議なくらい、それは包み込むような温かな眼差しだった。

ミナライ作業員

氷室について朝の車輛整備に参加していると、工事課の若手集団の声が聞こえてきた。

声のほうを見ると、奥田や河合を含めた四、五人が飯田を囲んでいる。

「なっさけねーな！。お前、うちの愛子さんにつぶされてんじゃねえよ」

「女子とサシで飲んでて、男のお前があんだけゲロゲロになってたんじゃない。まったくしょうもない」

飯田はバツの悪そうな顔をして「ははは」と力なく笑っている。チラリと背後の氷室に目をやると、彼はふっと顔を背けた。愛子は気が遠くなりそうだった。

「いったい朝っぱらからなんてことだ！　なんで奥田や河合が、飯田と二人で飲みに行ったことを知ってるんだろう？」

愛子は聞こえないフリで、力任せに車輛のガラスを磨いた。あれだけのことをしでかしたのだ。色々と中傷されることは覚悟していたが、まさか飯田本人がバラしたのだろうか。

「いったい何の為に？」

今はまだ日も当たっておらず、駐車場は涼しいのに、愛子はすでに汗びっしょりだった。冷や汗かもしれない。氷室は無言で黙々と作業をしている。

「うちのアネゴは強いからな。手エ出したら、マジやばいよ、飯田くん！」

奥田の大きな声が聞こえてくる。愛子はいたたまれなくなって、車輛整備をさっさと切り上げると工事課の事務所に戻った。

「恥ずかしい！」

彼らにしてみれば、親しみをこめたつもりでも、愛子にとっては傷口に塩を塗られているようで、聞くに堪えない醜聞だ。

嫁入り前の娘が、みつともない！

母親の言葉が身に沁みる。

誰も居ないプレハブで、無線台に突っ伏して泣きたいのを必死で堪えていると、ドアの開閉する音がした。

顔を上げると桜井園子が居た。彼女はヒールを鳴らして近付いてくるなり言った。

「飯田くんと付き合ってるなら、隠さなくたっていいじゃない。私に遠慮してるの？ それとも同情？」

愛子は機械的に立ち上がった。桜井は見たこともないような冷たい眼差しを向けている。

「あ、あたし……付き合っていません」

朝からなんでこんなこと言われなくっちゃいけないの？

じわりと目頭が熱くなってきた。桜井はもう一歩近づくと、低い声で言った。

「飯田くんが言ったんだから。自分はもう好きな子とだけしか遊びに行かないし、飲みにも行かないって」

桜井はピンクのルージューを引いた唇をきゅっと噛んだ。握り締めた拳が震えている。愛子は彼女の言葉をゆっくりと心の中で反芻した。桜井が飯田に振られたのだということはかろうじて理解したけれども。

「あなた、ム力つくのよね」

「さ、さくらい……さん？」

桜井は何故こんなにもきつい目で見えるのだろうか？

「優越感に浸っているんでしょう？ 飯田くんに好かれているってわかって。だから私にあの時あんな態度をとったんでしょう？ 心の中で笑いながら！」

吐き捨てるように言って、桜井は頬を紅潮させた。

「……あの時って？ なんだか話が……」

「しらはつくれないですよ！ 座禅の日、階段ですれ違った。あの時、自信たつぷりの顔で『お先！』って……！ あなた、あの時私が振

られたばかりだって、知ってたんでしょ」

愛子は思い出した。確かに『お先!』とは言った。でも、あの時桜井が飯田に振られていたなんて、知るはずもない。

「あたし、そんなこと知らな……」

言いかける愛子を遮って、桜井は興奮状態で捲くし立てる。

「乾燥室に閉じ込めたこと、謝らないわよ、私。あなただって、あの時騒げばよかったじゃない。桜井園子に閉じ込められましたって、騒げば良かったじゃない。大人しいふりして、いつも黙って「私頑張ってます」みたいにしてて。ムカツクのよ! 今回だって、あんな醜態さらしたのに、飯田くんだけじゃなくて、工事課のメンバーからも庇ってもらうなんて! 営業所中の笑いものになればよかったのよ!」

愛子はただ呆然と口を開けて桜井を見つめているのが精一杯だった。彼女は感極まったように嗚咽を漏らすと言った。

「なんでもいつも上田さんなの? どうして私じゃだめなの? 私のほうがいつだって飯田くんを見てたのに!」

桜井は言うだけ言うと、両手で顔を覆ってプレハブを出て行った。閉まったドアを見つめながら、愛子は脱力して再び無線台の椅子に座った。毒気を抜かれたとは、まさにこの事だ。桜井のあんまりな八つ当たりに、涙も出てこない。彼女があんなに激しい性格だとは思ってもみなかった。妹が癇癢を起こしたときにソックリだ。

「支離滅裂じゃん……」

とはいえ、あれだけ自分の感情をストレートに出せるなんて、ちょっと羨ましい気がする。たとえそれをぶつける相手が意中の彼ではなくても、だ。自分はとてもじゃないが、あんな風に氷室に対する思いを口にする事はできない。

上司と部下。

大人な氷室と半人前の自分。結果はわかりきっている。

愛子は窓の外を見やった。上がり始めた外気温で、駐車場に散水された水分がゆらゆらと蒸発している。奇妙に歪んだ景色の中を、

同僚たちが忙しく行き来しているのを眺め、愛子はため息をついた。朝からこんな状態ではやっぱりへこむ。

「とにかく、仕事、しなくちゃ」

そろそろかな、と壁の時計に目をやったとき、いつもの無線が入った。一のランプが点滅する。

「帝都一、感あり、どうぞ」

『こちら帝都一、上田さん、至急駐車場まで来てください、どうぞ』
え？ なに？

今の声は氷室だ。一班の班長は野口のはずだが、何かあったのだろうか？

ヘッドセットマイクをつけて屋外に出ると、駐車場の中央で高所作業車が待機している。車輛の前で氷室と野口が手を振っていた。

「こつちこつち」

愛子は首をかしげながら歩いて行った。

いったい何の用だろう？

怪訝な顔で見上げると、野口が言った。

「上田さん、今日は一班の現場作業に同行してください。作業内容は樹木の伐採と変圧器トランスの交換です。班長の僕に代わって氷室主任が同行しますから」

野口はキョトンとしている愛子の頭から、無線のマイクを取り上げた。

「というわけで、行こうか。上田作業員」

氷室がニコツと笑った。愛子の鼓動が一気に高鳴った。さっきまでへこんでいたのが嘘みたいだ。先日話を、氷室は早速実行してくれたのだ。大型の作業車に同乗して、その扱いを実際に見せてくれるのだろう。

「じゃ、ねーちゃん、早く乗りな」

氷室より年配のベテラン作業員、彼は『北さん』と呼ばれている。が愛子の腕をつかんで座席に引っ張り上げてくれた。

視点の高さに驚く。

乗用車とは見える風景も違うし、何よりハンドルが大きい気がする。車内をしげしげと眺めていると、声を掛けられた。

「悪いけど、これ三人乗りだから」

そう言っ、何とすぐ隣に氷室が乗り込んできた。北さんとは普通に隙間が開いているが、氷室とは密着するような体勢になつてしまい、かなり戸惑う。そんな愛子の様子にも無頓着で、氷室は昨日のように教官モードで指導を始めた。

「上田さん、同乗者の役目はただボケツと座っているだけではありませんよ」

左右の安全確認や走行ルートの指示などは、同乗者も運転者と同じような気持ちで行うようにするのだという。

「曲る時に『右よし』とかそういうのって、あたしも言っんですか？」

当然だと言うように、二人が同時に頷いた。

やだ、どうしよう！

何だか恥ずかしくてもじもじしていると、北さんが「発進よし！」とだみ声で叫んでハンドルを回した。

窓の外で野口や奥田たちが手を振っている。彼らの後方で飯田が驚いたような顔でこちらを見ているのがやけに気になった。

「ねーちゃん、ボケボケするなよ。駐車場出るときや、一時停止だからな」

「は、はい！」

愛子は背筋を伸ばして、北さんと一緒に叫んだ。

「右よし、左よし！」

チラリと運転席を見ると、北さんが日に焼けた櫛の幹みみたいな顔を満足気にはころばせて笑っている。この一年、彼とはほとんど話をしていなかったたので、笑った顔も初めて見た気がした。

外に出るって気持ちいい。

愛子はふと桜井園子が気の毒に思えた。朝からあんなことになつて、彼女は今日一日をデスクの前で悶々と過ごすのだろ。そう考

えると、爆発したような彼女の態度も、ああするより仕方がなかったんだと、妙に納得してしまった。

「主任、現場に出るって、楽しいですね」

思わずそう言つと、氷室は何故だか不敵な笑みを浮かべただけだった。

「楽しいなんて、前言撤回です！」

高さ十メートルの上空で、愛子は半泣き状態になっていた。

現場に到着するとすぐにヘルメットと、腰に巻く安全帯ロープを手渡された。

「な、なんですか？ これ……」

同じ歳の河合が自分の腰を無言で指さして、さらに高所作業車のバケットを見やった。

訳もわからぬままに作業前のミーティング。

伐採対象の樹木は、巨大なケヤキだった。現場は小さな神社で、ケヤキはご神木らしい。幹の部分は大人三人でようやく抱えられるほどに太い。神社の敷地をはみ出して伸びている枝が、大きく電柱に覆いかぶさっていた。

「ご神木なのに、切つてもいいんですかね？」

小声でぼそりと尋ねると、氷室は嫌そうな顔で言った。

「僕が来ること自体が、やばかったんじゃないかと思うんだけどね。ま、罰が当たるなら、この際僕が一手に引き受けるよ」

どういう意味かと考えて、思わずブツと吹き出してしまった。所長たちの「疫病神」発言を思い出したのだ。けれど、彼にとっては笑い事ではないらしい。氷室は幾分硬い表情で遥かな高みを見上げていた。

幹にしめ縄を巻かれたご神木の根元に塩を撒き、作業員全員で手を合わせると、北さんが言った。

「じゃ、安全祈願に行ってきたお二人さんに、まずは一枝切つていただくか」

「え、ええ？」

嫌そうな顔の氷室とハトマメ状態の愛子を載せて、するするとバケットのアームが伸びてゆく。

そして高さ十メートルの悲劇という訳だった。

「しゅ、主任、お、降ろしてください」

一旦真下を見てしまったのがいけなかった。河合作業員が小人のように見える。一畳分有るか無しかのスペースで、愛子は氷室の腰の辺りにしがみついていた。

「おいおい、ねーちゃん。とりあえず、儀式みてえなもんだからよお、近くの葉っぱ一枚だけでもさっさと切れや」

高所作業車の運転席から顔を出して、北さんが楽しそうにやじる。「そういうわけですから、上田さん、頑張つて。体は安全帯ロープでバケットにつながっているし、僕も押さえてあげますから」

愛子は恐る恐る顔を上げた。真夏の青空をバックに、日焼けした氷室の顔が間近にある。彼は「大丈夫だよ」というように、大きく頷いた。

彼に励まされて、愛子はゆっくりと立ち上がった。伐採用の大きなはさみを受け取って、そろりと外側に体を向ける。動かたばに揺れるのが怖い。両手持ちのはさみが意外に重くて、伸ばした腕がプルプルした。なんだか取り落としてしまいそうで、枝まで伸ばせない。

「いやだ、怖いよう。」

すると、はさみを持つ手に氷室の右手が重なった。背中からがしつと抱きすくめられて身を硬くすると、低い声が囁いた。

「押さえてるから、今のうちに手前の一枝、切つて」

言われるままにはさみを動かすと、小さな枝がくるくる回りながら遙かな下界へと落ちていった。

その後氷室も一枝だけ切つて、二人は地上に戻ってきた。

半ば放心状態の愛子を見て、河合たちが声を上げて笑ったが、そ

れどころではなかった。

氷室さんに、抱きしめられちゃった！

そのことだけで心拍数が跳ね上がり、のぼせたようになってしまった。

愛子は作業車の陰に座り込んで、手際よく大きな枝を切り落としてゆく同僚たちを見上げた。彼女の手の中には、自分が切り落とした小さなケヤキの新芽がある。

愛子はさっきのことを思い出して、甘ったるい感情とは別に、不安なものが込み上げてきた。

背中には、まだ彼の感触が残っている。こんな浮ついた気持ちで、きちんとやってゆけるのだろうか。事あるごとに氷室を意識している自分を自覚する。そんなことで、果たして工事課の作業員としての仕事が出来るのだろうか。

現場からの帰りは、伐採した枝を積んだ軽トラックのほうに乗るように指示された。

運転席の河合は、鼻歌混じりで助手席の愛子に問いかけた。

「愛子さん、さっきの、どうだった？」

「ダメ。あたし高い所はちよつと……」

作業の感想かと思ってそう答えると、河合は首を振った。

「そうじゃなくって、氷室さんにギュッてされたじゃん。あれってセクハラ？」

愛子の顔が真っ赤になった。自分と氷室の様子は、河合たちの目にどう映ったのだろうか。そう考えると、激しい動悸がしてくる。

「か、河合さんの発言のほうか、よっぽどセクハラです」

かろうじてそう言くと、河合は楽しげにゲラゲラ笑っただけだった。

翌日も、作業員たちと同行しての研修のような形だった。午後からの現場は、電源車の助手席に座らせられた。

電源車の運転席に座った氷室が仕事内容を簡単に説明する。

「今日は協力会社のK電気さんと一緒に作業です。夜間工事のため、この電源車は照明用の電源確保で現場に置いてゆきます」

「じゃあ帰りはどうするんですか？」

「帰りは……」

氷室はちよつと思案するような顔をしたが、無表情に戻ると言った。

「軽トラックが一台余分に行ってますから、帰りは上田さんの運転で帰ってきましようか」

愛子は思わず氷室の顔を睨みつけていた。

氷室さん、死にたいんですか？

軽トラックなど、運転したことがない。というより、自分の家の1500ccの車以外、触ったことがないのだ。軽トラックは確かクラッチ付きの古いタイプだと思う。クラッチのある車なんて、教習所でしか運転したことがなかった。

「主任、あ、あの車はちよつと……」

ももごも言っているうちに、現場に到着してしまった。現場は今建設中のアミューズメントパークの中だった。水族館を中心に、遊園地が造られており、外観はほぼ完成状態だ。現在敷地内の一部がショッピングモールとしてすでに営業中だった。

ショッピングモールの営業時間に配慮して、本日の作業は夜間工事が予定されているのだ。

氷室はK電工の責任者に愛子を紹介した。

「ほう、帝都さんが女性の作業員を入れたとなると、うちもやらなきゃいかな」

なにやら意味深な会話だった。

一通り打ち合わせなどを済ませると、例の軽トラックで引き揚げることとなった。

本当なら、オープン前の遊園地なんて興味津々なのだが、このあとの運転訓練の事で頭がいっぱいで、それどころではない。

愛子は神妙な面持ちで軽トラックの運転席に座った。シートベルトをして、ブレーキにあわせて椅子を固定する。

「あれ？」

ギアがない？

左の脇あたりに手をさまよわせていると笑われた。彼に左手を取られてハンドルの横に導かれる。

「これ、コラムシフトだから」

「あ……」

すっかり緊張して、まったくわからなかった。

「コラムシフトのギアは通常と違う」

氷室に言われて、愛子はハンドルの脇を覗き込むようにしてギアの配置を確認した。初めての経験に、動揺したままローギアに入れ、アクセルを踏んだ途端にエンストした。

「す、すみません！」

オートマしか乗っていないから、エンストなんてちょっとびっくりしてしまう。

氷室は無表情でもう一度やるように指示した。何度もやり直してクラッチをつなぐ練習をした。ようやくスムーズな発進ができるようになった頃には、大分時間が経っていた。広いアミューズメントパーク内を何度も走らされたが、公道に出る自信は全く無かった。

「じゃあ、今日はここまでね」

「え、会社まで運転しなくていいんですか？」

キョトンとする愛子に、氷室は小さく咳払いして言った。

「さすがに僕も命は惜しいからね」

あんまりな言い草に、愛子はがっくりと肩を落とした。

「あたしの運転がどうのって事より、この車の方がやばくないですか？」

ふくれっ面で言うと、氷室は「ははは」と楽しそうに笑った。

「まあね。この軽トラックはいつ壊れてもおかしくないけどね。上田さんのエンスト攻撃でコイツの寿命も縮まったみたいだし」

くつくつと笑いながらの言葉に、愛子は顔をしかめた。

「あたし、一生懸命だったんですよ」

恨めしげに言っと、氷室が急に真面目な声で言った。

「上田さんが現場に出るって言うてくれて、とても嬉しいです。昨日も今日も、嫌がらずに頑張ってくれてありがとう。明日からも、お願いしますね」

愛子は助手席の氷室を見つめた。彼は照れたように微笑むと、前方に目を向けた。つられて愛子も視線を移す。工事中のジェットコースターの向こうに、ショッピングモールのイルミネーションがとてもきれいだ。

何だか急にドキドキしてきた。

自分が頑張ると、氷室が喜ぶ。それだけのことで、俄然ヤル気になつてくる。なにより、彼が自分を信頼してあれこれと指導してくれることが嬉しくて堪らない。氷室もひよっとすると、自分に特別に好感を持っていてくれるのかもしれない、などと都合のいい妄想が頭の中をぐるぐるした。

思い切って、今ここで自分の気持ちを言うてみようか。桜井園子みたいに……。

「あの……」

言いかけた言葉は彼に遮られた。

「女子の作業員を育成することが、今後の管理職たちの課題のひとつに正式に取り上げられたんです。だから、年内に大型免許を取得出来るように、僕がキミを指導するようにと、業務命令が出たものですから。上田さんには期待していますよ」

「業務命令……ですか？」

「ええ、女性の職域拡大の取り組みが、会社全体の重点課題になりそうなので、その先駆けで上田さんに頑張ってもらわないとね」

そう言って笑顔を向けられ、愛子は瞳を大きく見開いた。

日に焼けた肌。すっきりとシャープな輪郭。つり上がり気味の目が、笑うと驚くほど優しくなる。

氷室さんが好き……。

飲み込んだ言葉は苦い。ロマンチックなシチュエーションだけに、何だか余計に切なくなってくる。結局氷室は上からの命令で愛子について毎日指導をしていたのだ。彼自身の考えだと思い込んでいた自分がバカみたいに思えた。勘違いも甚だしいというヤツだ。

二人きりで夕暮れの景色を眺めているというのに、仕事でしかながりの持てない彼と自分の関係を、改めて突きつけられたようにで惨めだった。それでも尚、頑張ろうなんて思ってしまう自分は、もう病気かもしれない。

恋の病。しかも、治る見込みの無い末期状態だ。

「主任、私、きっと工事課の戦力になってみせますから」

主任。あえてそう呼んで、愛子は精一杯の明るい声を出していた。

彼の運転で事業所に戻った時には終業時刻が迫っていた。ちょうど車から降りたところに、営業課の男性社員が走ってきた。

「氷室さん、営業窓口にお客さんが来てますよ」

彼は軽トラックのキーを愛子に渡すと、男性社員と共に本館へ行ってしまった。

愛子は軽トラックをロックし、荷台に載せた工具の箱を下ろすために後ろに回った。

「あちゃ、届かないよ」

自分の小ささが嫌になる。すぐ手前に放り込んである荷物に手が届かない。荷台の枠に手を掛けて、懸垂の要領でよじ登った所に長い手が伸びてきて、工具の箱をあつさりさらっていった。

「あー！」

飛び降りて振り返ると飯田が居た。彼は工具の箱を両手で差し出した。

「人使い、荒いんだな、アイツ」

「あ、ありがとう」

愛子は上目遣いで彼を見上げた。飯田と言葉を交わすのは二人で飲んだとき以来だ。顔を合わせる機会は幾度もあったが、なんとなく話をする状態ではなかったからだ。

愛子は先日の飲み代をすべて彼に支払ってもらったのだという事を思い出した。

お礼を言つと、飯田は「気にするな」という風にゆるゆると首を振った。

「あの時は、悪かったよ。チョーシに乗っちゃって、飲ませすぎた」「いいよ。あたしがいけなかったんだから」

久しぶりの会話はなんとなくこちない。桜井園子の発言のせいだろうか。

飯田くんにかかれてるって、わかってて。

ふっと目を背けると、飯田が言った。

「よかったじゃん。毎日、アイツとべったりで」

愛子は再び飯田の顔を見上げた。オレンジの夕日を浴びて眩しげな彼の顔は、何故か歪んでいるように見える。言い方もなんだか彼らしくない、嫌味を含んだような響きだ。

「主任とべったりなんて、ヘンな言い方しないでよ。仕事なんだから」

仕事。そう言った途端に胸が苦しくなる。愛子は俯いて、飯田の手から工具の箱をひったくるようにして受け取った。そのままプレハブに向かって歩き出すと、背中に彼の声が言った。

「おチビのクセに、背伸びして……。つぶれんなよ」

さつきと違って労るような言い方に、思わず足が止まる。良くも悪くも……どうしていつも、彼はこうタイミングがいいんだろう？

飯田のバカ。おチビ、おチビって、うるさいよ！

頬に水分が伝って、俯く口元に垂れてきた。

あたし最近、涙腺ゆるすぎだ。

飯田に背を向けたまま心の中でそう呟くと、愛子は自分の長い影を踏みながらプレハブに向かって走り出した。

愛子、暴走！

八月に入り、夏も本番。毎日の現場作業には辛い季節だ。

愛子は誰も居ない女子更衣室で、姿見に映る自分をじつと見つめていた。日焼けした少女は、以前と違って作業着姿がさまになっている。こんな風に自分を眺める日が来るなんて、ちよつと前までは思いもしなかった。

例の軽トラックの運転も大分慣れた。何故クラッチ付きの運転を練習するのか疑問だったが、業務車を単独で運転する為には、社内認定試験を受けなければならず、その試験の審査内容の中に、何故かクラッチ操作の項目があるため、練習をさせられていたのだそうだ。

早くそう言ってくればいいのに

え、俺言わなかったっけ？

二人だけのとき、氷室は「僕」から「俺」と言うようになった事に、つい最近愛子は気がついた。けれども、それ以外特にな変わったことも無く、相変わらず上司と部下の、悲しくも平和な関係は続いていた。

愛子は鏡の中の自分に背を向けると、更衣室を出ようとした。

ちょうどドアが開き、桜井園子が入ってきた。桜井は小さく「あ」と言って一歩後ずさった。彼女と二人きりで顔を合わせたのは、あの時以来だ。桜井はずつと愛子を見殺し続けていた。仕事も全く関係ないし、職場も本館と別館だから、普段顔を合わせる事は殆どないが、なんの前触れも無く顔を合わせてしまったので、彼女の方が気まずいようだった。

「おはようございます」

愛子は努めていつもと変わらない調子で言っただけだった。一礼して運動靴をつっかけると、彼女の足を足早に通る過ぎる。

刹那、桜井がごく小さな声で言った。

「上田さん、毎日楽しそうね。あなたのおかげで私もとても忙しいわ」

「え……？」

桜井はフツと笑ったようだったが、愛子は下を向いたまま、彼女と目を合わせることを避けた。

何だか息苦しかった。「あなたのおかげ」なんて。どうして一生懸命仕事をしているだけなのに、そんな風に嫌味のこもった言葉を投げつけられなければいけないのだろうか。

その答えは職場について社内メールを見たときにわかった。

『女性作業員の為のシャワールームの設置について』

提案者は氷室と配電課の相良みつ子女史だった。そして、設置に伴い女性職員の意見の取りまとめや設置場所などについての担当者は、総務課の桜井園子となっていた。

「シャワールーム、ですか？」

氷室が背後に來たので、パソコン画面から彼の方を見ると、氷室は頷いた。

「今は男性社員と同じ浴室を使うしかないけど、上田さん使ってないでしょう？」

愛子は頷いた。いくら汗をかいても、会社のただっ広い浴室を占領して一人で入る勇氣は無いし、万が一覗かれてもしたらと思うと、絶対に入浴などしたくない。

それでも、最近は外から帰ると汗びっしょりで、自分が汗臭くてとても気になる事は確かだった。制汗スプレーをふりまいてごまかしているけれど、もしシャワーが別な所にあるのなら、とてもありがたいと思う。

「でも実際女性作業員って、あたしだけですし……」

「今はね。でもそのうち女性の宿直だつてきつと始まるし、その先駆けで設備をつくるのは会社側の義務だつて。相良さんも賛同してくれたしね」

ああ、相良女史に言われたのか。また勘違いしてしまうところだ

った。愛子は自嘲気味に微笑んだ。桜井が言うように、愛子のために氷室が気をつかつてくれたのだと勝手に思い込んで、少し嬉しかったのだが。

「余計な提案だったかな？」

少し恥ずかしそうな氷室に笑顔向け、愛子は言った。

「主任と相良さんのお気づかい、とても感謝しています」

氷室はホッとしたように微笑んだ。工事課の愛子に対する扱いについて、事業所全体が注目しているのだと氷室は言った。だからきつと、いろいろと対応している所を見せなくてはいけないのだろう。「とにかくあたしは、大型免許への第一歩として、会社のロゴ入りの車を運転する資格があるかどうかという段階ですから、今日も頑張りますよ」

愛子の言葉に氷室は大きく頷くと、満足しきった猫のように目を細めて言った。

「頼もしいね。じゃあ、今日は四班に同行するから、運転お願いしますよ」

氷室は、奥田たち作業員にいつもするのと同じように、ポンと愛子の肩を軽く叩いて白い歯を見せた。

彼が背を向けて自席に戻って行くと、愛子は自分の肩に手をやった。氷室の大きな手の感触が、愛子の中に優しさと同時に切なさを刻む。毎日一緒に居たからといって、桜井がうらやむような関係でもないし、飯田が心配するような事態になるはずもない。氷室にとって自分は本当に、ただの部下にすぎないのだから。

四班の作業に同行した後、助手席に氷室を乗せて帰社する途中だった。

「明日の認定試験、この分なら大丈夫そうだね」

彼の言葉に、愛子は複雑な表情で微笑んだ。赤信号からの坂道発進もスムーズに出来て、初日のエンスト地獄が嘘のようだった。明日の試験にパスすれば、単独で公道を運転することが許される。そ

していよいよ大型免許取得に向けて、本格的に教習所に通うことになるのだ。

合格したいけど、でも……。

明日、合格してしまえば、もう氷室に指導を受けることもなくなる。二人きりで現場に出る理由もなくなってしまう。

「明日受かったら、皆で盛大にお祝いしてやるからな」

そう言っ、て、氷室は上機嫌で愛子の頭をポンポンと叩いた。

皆でじゃなくて、あたしは氷室さんにお祝いしてもらいたいんだよ。

喉元まで出掛かった言葉を飲み込んで、愛子は帝都電力の看板の手前で駐車場入口を左折した。

「あれ？」

駐車場に、見た事のある女性が立っている。氷室も気付いたらしい。駐車場の真ん中で車を止めると、女性がこちらに走ってきた。

その人は目に涙を溜めていて、車から降り立った氷室にいきなり抱きついた。愛子は放心状態で二人の様子を見詰めていた。女性は居酒屋で見た、氷室の彼女だった。

一班と四班の作業車が次々と駐車場に戻ってきて、氷室は女性をようやく押し戻した。

作業員たちは、見て見ぬふりで所定の駐車位置にトラックや作業車を戻すと、積荷を降ろし始めた。時が止まったように氷室と女性を見ていた愛子は、運転席側の窓を叩かれて我に返った。

北さんが厳しい顔で立っている。ウィンドウを下げると、彼はさつさと所定の位置に駐車するように身振りで示した。

愛子は一回エンストしてから、慌てて軽トラックを三番の車庫に戻した。車を戻し終えて駐車場を見渡すと、氷室も女性も居なくなっていた。

愛子の脳裏に、二人の抱擁シーンが鮮明に甦る。毎日が忙しくてすっかり忘れ果てていた女性の存在。いや、忘れたことにしていただけなのだ。

氷室には彼女がいる。あの居酒屋で二人を見たときから、ちゃんと承知していたことなのに。愛子は胸のあたりがきりきりしてきてグツと歯を食いしばった。

会社にまで訪ねてくるなんて、いったい何事なのだろう。考えても仕方がないと思いつつ、心は氷室へと彷徨いだす。一班と四班の若手たちが工具の片付けに奔走する中、愛子は呆けたように本館へと足を向けた。ふらふらと非常階段を二階に上がり、料金課へと続く鉄扉を引き開けた。

冷房で冷えた空気と一緒に、人声や電話の音があふれ出した。鉄扉のそばの座席で仕事をしていたパートの女性職員二名が、いきなり振り返ったので愛子はドキリとした。無意識に背の高い飯田を探していることに気付き、いったい自分は何をしているのかと焦った。両手の拳を握り締めて、元来た鉄扉から引き返そうと呼び止められた。

「おい、俺に用事じゃねえの？」

パソコンの陰で仕事をしていた飯田が首を伸ばして手招きした。

愛子は吸い寄せられるように、飯田の居るフロアの隅に歩いて行った。

夕方の料金課は賑やかで、電話がバンバン入っては社員たちが応対に追われている。

「待てませんよ。明日払ってくれないと、電気止めなければなりませんね」

「だって、お宅さまは先日と同じことおっしゃってましたよね？」

皆口調は丁寧だが、言ってる事は借金取りのような内容ばかりで、愛子は少々驚いた。ふらりと入ってきてしまったのに、まるで別会社のような空気に、完全に飲み込まれてしまい、言葉を失う。

飯田は、フロアを見渡して毒気を抜かれたようになっていた愛子に尋ねた。

「どしたの？ おチビ」

愛子はハッとして飯田を見た。氷室の彼女のことなど、飯田に話

すべきことではないのだ。どこまで自分は甘えているのだと、自身が嫌になった。

「ゴメン、以前に葬式リンジってあったじゃん？ あれのこと教えてもらいたくて」

愛子は咄嗟に嘘をついた。飯田は脇机から手引書を取り出して、丁寧に教えてくれたが、愛子はどこか上の空だった。

「……ってことで、電力の使用量が増えた原因を調べなきゃならないから、俺たち料金課は作業リストの写しをもらってるわけだよ」
「OK、ありがとう」

愛子は笑顔を張り付けて、飯田にお礼を言うつと非常階段から駐車場へと降りて行った。ふと表通りに目をやると、氷室とあの女性が道路わきに並んで立っている。氷室は私服に着替えていた。愛子はポケットの携帯を取り出して、デジタル表示を確認した。いつの間にか終業時刻はとうに過ぎている。

氷室と女性はどうやらタクシーを待っているようだった。いったいどこへいくのだろうか。自分には関係ないと思いつつ、愛子は彼らに気付かれないように軽トラックを車庫から出していた。認定を受けていない愛子は、単独で会社の車輛を運転することは出来ない規則になっている。

ドキドキしてきた。自分は規則をやぶって何をしようとしているのだろうか？ これじゃあ、まるで覗きだ。もやもやした気持ちが高き上がってきたとき、ようやくタクシーを捕まえた二人は、海岸方面へと走り出した。

理性より好奇心が勝るときもある。今の愛子はまさにその状態だった。彼女は半クラッチから二速に入れると、タクシーを追って単独で帝都電力を出て行った。

タクシーは茜色の海岸線をしばらく走り、高速道路の緑の看板にしたがって左折した。

「どうしよう。高速なんて、この車で走ったこと無いよ」

引き返そうと思った時には、もう高速への分岐に入っていた。ここまで来たら、もう引き返せない。愛子は車輦に搭載されているETCの機械にバイザーの裏側から抜き取ったカードを挿入した。タクシーは有人のゲートを通過した。見失っては大変だ。愛子はETCのゲートをくぐって高速に乗った。

いったいどこまでいくのだろうか。二つ目のインターを過ぎた頃から、周囲が混雑し始めた。クラウンのタクシーと軽トラックではパワー不足もあって、このままでは見失いかねない。そう思ったとき、タクシーは左にウィンカーを出して、高速を降りる体勢に入った。愛子もウィンカーを出して高速を降りた。

いったいここはどこだろうか？ あまり来た事のないところだった。軽トラとの間に一台車を挟み、タクシーは赤信号で止まった。

愛子は信号に書かれた町名を見た。完全にK事業所の管轄外に来ていることに気付いて、にわかに不安になる。

「ここまで来ちゃったんだから、行くしかないじゃない」

愛子は自分にそう言い聞かせると、青信号にしたがって車を発進させた。タクシーは駅前の大通りを進み、官庁街に来た。警察署、消防署と並んで、帝都電力Y支社の巨大な鉄塔が見えた。電力会社の屋上には、どの建物にも必ず巨大な鉄塔があるからとてもわかり易い。

Y支社を通り越して左折すると、タクシーは大きな建物の駐車場に乗り入れた。愛子はスピードを落とし、車間距離を開けながらついて行った。

二人は白い建物の正面玄関でタクシーを降りると中に消えた。

愛子は駐車場の片隅に軽トラックを駐車させると、正面玄関に立った。

『S大学附属病院』

白い大きな建物が三棟、渡り廊下でコの字型につながっている。正面の病棟を見上げ、彼女は首をかしげた。誰かのお見舞いだろうか。少なくともデートでない事は確かだ。そう考えて、ホッとした

反面、規則を破ってまで自分はいたい何をしているのだろう、という自己嫌悪に陥ってきた。氷室がプライベートで誰とどこに行こうと、自分には全く関係がないのに、会社の車を使ってストーカーまがいのことをしている自分が、堪らなく嫌になる。

「あたし、本当にどうかしてる……」

ぼつりと呟くと、愛子は軽トラックに戻って運転席に飛び乗った。冷静になってみると、自分のしでかした事が急に怖くなった。管轄外まで単独運転で来るなんて。上司に提出する運転日誌には、走行距離と行き先とを書かなくてはいけない。距離だけなら誤魔化せるが、高速を使ったためにETCにしっかりとインターの記載がされてしまっている。

どうしよう……。

とにかく、早くK事業所に戻らなくてはならない。愛子はすっかり暗くなった街を見渡して途方に暮れた。

「あたし、どっちから来たっけ」

ようやく事業所に戻った頃には、夜の七時を回っていた。愛子は三番の車庫に軽トラックを止めると、大きくため息をついた。結局、行きと同じルートで帰って来たから、二度高速に乗ったことになる。助手席に置いた運転日誌を手にとって、エンジンを切った車の中でぼんやりしていると、ふいに助手席のガラスを叩かれた。

「ひっ！」

心臓が止まる思いで振り向くと、暗がりの中に飯田の顔があつた。愛子は震える指先で、ドアのロックを解除した。飯田は無言で助手席に滑り込んできた。

運転日誌を抱えて小さくなっている愛子に、彼は無表情で尋ねた。「こんな時間まで、どこに行ってたんだ？」しかも単独で、と彼は付け加えた。

何も言うことができず、黙ったままの愛子に、飯田はきつい顔になってもう一度同じ事を訊いた。

「あたし……」

愛子は口ごもった。なんと言えいいのだろう。沈黙が自分自身を袋小路へと追い込んでゆくような気がして、じわりと涙がにじんだとき、飯田が尋ねた。

「夕方、何かあったんじゃないの？」

愛子は思わず助手席に顔を向けた。飯田の切なげな眼差しと出会う。彼は愛子の目を見つめたまま、ズバリと言い当てた。

「氷室にあの女の人が会いに来てたから、お前ヘンだったんじゃない？」

愛子は観念して口を開いた。

「気がついたら、車出して……。二人の乗ったタクシーについていったの」

彼女の言葉に、飯田の目が大きく見開かれた。

「高速道路使って……行き先はS大病院だった」

愛子は運転日誌を胸に抱えて俯いた。

「それで？」飯田の声がささやくように問いかける。「それで、氷室と何か話したの？」

愛子は大きくかぶりを振った。

「ただ後をつけて行っただけなのか？」

確認するように尋ねる飯田に、愛子はコクンと頷いた。何だかみっともなくって、泣けてきた。

「バカみたいでしょう？ あたし、何やってんだろう」

ハンドルに突っ伏すと、温かな手のひらがそつと愛子の頭に寄せられた。そのまま優しく髪を撫でられて、胸が苦しくなってきた。また都合よく飯田に甘えている自分を自覚して、ますます泣けてくる。

ひとしきり愛子の頭を撫でていた飯田が言った。

「運転日誌、よこせよ」

「え？」愛子は顔を上げた。

「今日の夕方、この軽トラックを運転したのは、俺だからな。いい

な？」

飯田の言葉がよくわからず、愛子は鼻をすすりながら尋ねた。

「でも、飯田くん。これって工事課の車だよ。料金課の飯田くんにはいつも乗ってるロゴ入りの軽自動車があるじゃない。他係の車、許可無く勝手に使ったら始末書じゃないの？」

飯田は愛子から車のキーと運転日誌を取り上げると小声で言った。
「お前、こんなもん、氷室に提出できるのか？」

愛子は大きく息を飲んだ。氷室の行き先と同じ経路を書くわけにはいかない。でも、飯田だって同じではないのか？

「じゃあ、飯田くんはどうするつもりなの？」

「俺の事はいい。お前、規則違反バレたら、明日の試験受けられなくなっちまうだろ」

何のために毎日頑張ったんだ？ そう言っ、飯田は助手席のドアを開けて車外に出た。そのままくると背を向けて、本館へと歩き出した飯田を、愛子は慌てて呼び止めた。

「飯田くん、待ってよ。それじゃあ駄目だよ。規則破って単独運転したのは、あたしなんだから。ねえ、飯田くん！」

飯田は背を向けたままで、ひらひら手を振って言った。

「おチビは気にすんなって。とにかく、明日頑張れよ」

本館のドアに背の高い後姿が消えるまで、愛子はじっと駐車場に佇んでいた。

翌朝の車輛一斉点検で、愛子は氷室に呼ばれた。

「上田さん、軽トラックのキーが無いんですが、知りませんか？」

愛子はギクリとして顔を伏せた。黙っていると、ちょうど野口が彼を呼んだので、氷室は愛子に背を向けてうやむやのままに事務所内に戻って行った。駐車場の端っこに佇んだまま、愛子は背中に大量の冷や汗をかいていた。

昨夜、運転日誌と共に飯田にキーを預けたままだ。彼がまだ持っているのだろう。飯田は「何とかする」と言ってくれたが、氷室に

黙っているのが苦痛に感じた。やはり正直に言って、謝った方がいいような気がする。

愛子は駐車場を見渡した。大勢の社員たちが行き交う中、背の高い飯田を探したが、彼の姿は無かった。

「朝のうちに、やっぱり氷室さんに言おう」

誰にも聞こえない声で呟いて、プレハブに戻った愛子は、ドアを開けた所で固まった。

応接セットに工事長と氷室が座っており、その向かいのソファに料金課長と飯田が居る。何やら険悪な雰囲気だった。

「すみません、うちの飯田が勝手にあたくの車輛使ってしまったて」

料金課長はぺこりと頭を下げたが、飯田はでかい態度でふんぞり返っている。工事長が眉根を寄せて言った。

「でも、どうしてわざわざうちのトラックで？」

すると飯田はへらへらした態度で言った。

「だーからー、何度も言っているように、たまたま急いで、上田さんが車庫入れしようとしてたから、オレが強引にそのまま借りちゃったんです。すみませんでした」

飯田以外の三人は、彼の言葉に対して納得できない様子で「ごちゃ言っていたが、しばらくして立ち上がると解散した。」

料金課長と飯田がこちらに向かって歩いて来た。愛子はようやく我に返るとギクシャクした動きで彼らの為に通路を開けた。

「あ……飯田くん……」

小さく声を掛けたが、飯田は「何も言っな」というように頷いただけで、静かにプレハブを出て行った。

閉まったドアを見詰めてぼんやりしていると、背後から工事長に呼ばれた。

「上田さん、今日認定試験ですよ。しっかりやってくださいよ。落ち着いてね」

「は、はい！」

愛子は振り向きざまに返事をした。不自然なほどに、声が大きく

なってしまった。動揺を隠すために無線台と自席の間を行ったり来たりしていると、今度は氷室がそばにやって来た。

愛子は立ち止まって彼の顔を見上げた。

正直に話すなら、今しかない。今日の試験は中止になるかもしれないけれど、それは仕方がないんじゃないか？　嘘をつくよりましかろう。そんな思いが湧き上がってくる。

「あの……主任……」

声に出したとき、氷室がニツコリとこの上もなく優しい顔で微笑んだ。愛子の心臓が大きく跳ねる。

「上田さん、たくさん練習したんですから、自信を持ってください。いつもどおりでいいんです。遅れるといけないから、早く着替えて教習所に行ってください」

「主任、あたし……」

愛子は言おうとしていた言葉を飲み込んで、代わりに精一杯の笑みを浮かべた。

「……頑張ります」

氷室に一礼し、後ろめたい気持ちのまま、愛子は真夏の陽射しの中に出て行った。

教習所での試験は、意外なほどにあっさりと合格した。おんぼろの軽トラックで練習していたせいか、教習車のクラウンは物凄く運転し易かったのだ。

教習所の受付で、『認定試験合格通知』というA4版の紙切れを手にし、愛子は眉根を寄せた。こんな紙切れ一枚があるか無しかで、昨日の単独運転が違反かそうでないかに分かれるなんて何だか釈然としない。それでも、この紙切れを獲得する為に、氷室と共に練習をした事を思い返すと、紙切れのある無しに関わらず、もっと大切なものが見えてくるような気がする。運転技術に問題は無い。けれど、自分は規則をやぶったのだ。それはやっぱりいけないことではないのか？

工事課では、安全を守る為にルールが何より重んじられている。些細なことでも、作業手順や決まり事を無視すれば、大事故につながるかねない危険と隣り合わせの職場なのだ。その工事課の戦力になるべく訓練を受けているのに、全くの私情であつさりと決まりを破るなんて。そんな自分が、会社のロゴ入りの大型車を運転する資格があるのだろうか。

合格したにも拘らず、愛子は重い足取りで教習所を後にした。

苦い告白

青々と葉を茂らせた銀杏並木を歩き、地下鉄駅への階段を降りようとしたとき、後方でクラクションが鳴った。振り返ると、路肩に帝都電力の軽自動車が止まっており、運転席の窓から氷室が手を振っていた。

「あ……」

小走りで近寄っていくと、氷室は助手席に乗るように手で合図した。

「この先の現場に用事があったから」

そう言って車を発進させた氷室を、愛子はチラリと盗み見た。色黒の彼の頬が、ほんの少しだけ赤くなっている。愛子は思わず心からの笑顔になった。今日この辺りで作業している班は無い。無線指令の関係で、各班の作業予定区域は、いつでも愛子の頭の中にしっかりと入っている。きっと氷室はわざわざ迎えに来てくれたのだろう。その心遣いを嬉しく思うと同時に、さっきの後ろめたさがぶり返してきた。

「試験はどうだった？」

尋ねられて、愛子はバッグの中から合格通知を取り出した。氷室はチラリと横目で見て、満足そうにフロントガラスへと視線を戻した。

「これで、名実共に工事課の作業員の仲間入りですね。上田さん、おめでとう」

微笑む彼の横顔を見ているうちに、愛子はもうこれ以上昨日のことを黙っていられなくなってしまった。せっかく飯田が庇ってくれたのに、と心が痛んだが気付いた時には淡々と昨日のことをしゃべっていた。

氷室と女性の乗ったタクシーを追いかけて、軽トラックで管轄外まで単独運転したこと。それを飯田のせいにしてしまったこと。

赤信号で車が止まった。氷室は大きく息を吐くと、車の天井を仰いだ。愛子は逆に俯いて自分の膝の辺りを見つめた。

「黙っていて、すみませんでした。馬鹿なこと、したと思ってます。でも、どうしても、二人がどこに行くのか知りたかったんです」

そして、愛子は最後まで正直に言った。

「……氷室さんが、好きだから。とても気になるから……」
言ってしまった。

チラリと横を見ると、氷室は天井を凝視したまま固まっている。後続車からクラクションを鳴らされて、氷室ははじかれたように動き出した。とつくに青信号になっていた。

彼はハザードを出すと、車を路肩に寄せた。そのまま歩道の銀杏を見ながらしばらく沈黙したあと、彼は困ったような顔で言った。

「なんか、俺、今すぐく動揺してるんだけど」

愛子にはわかに不安になった。自分のしたことを改めて思い返すと、とても正気の沙汰とは思えない。完全に行き過ぎのストーカー行為だし、それを飯田の責任にして黙っていたなんて、よくよく考えると、信じられない性悪女だ。氷室は完全に引いてしまったのだろつ。

嫌われた。絶対に嫌われたと思う。

羞恥と自分自身への嫌悪感で胸がむかつく。俯いて息苦しさに耐えていると、ため息が聞こえた。彼の顔が見れない。きつと呆れて言葉も出ないのだ。そう思うと、今にも涙が出てきそうだった。私服の白いスカートの膝を、ぎゅっと両手で握り締め、愛子はひたすら謝罪した。

「ごめんなさい……」

彼は何も言わずに車を発進させた。

もう、お終いだ。

気まずい沈黙のまま、二人の乗った軽自動車は会社に帰還した。

車から降りて本館の更衣室に行こうとする愛子に、氷室が声をか

けた。

「上田さん、規則違反のことですが」

愛子は身構えるようにして振り返った。氷室の顔が曇っている。
「規則違反は始末書です。でも、始末書は別な形で飯田くんが書いてしまいました。ですから、もうコレに関して上田さんを処分することはできません」

「はい。わかってます……」

彼の顔を正視できなくて俯くと、氷室は低い声で言った。

「……本当に、反省しているの？」

返す言葉もなく、愛子はただじつと下を向くしかない。今、改めて彼と自分の立場を思った。

あたしは、上司を困らせる、とんでもない部下だ。

「ごめんなさ……」

「ムチャしゃがって」

謝罪を遮った氷室の声に、顔を上げた愛子は息を飲んだ。彼の顔は苦しげに歪んでいる。愛子の目を見つめると氷室は怒ったように言った。

「あんな、廃車寸前のおんぼろトラックで高速に乗るなんて、事故でも起こしたらどうするんだ？」

「あ……」

「もう、周りの人間が事故に遭うのはたくさんなんだよ」

そう言った氷室の顔は、苦いものを呑み込んだようで、愛子は胃の辺りがきゅうつとした。どうしたらいいのかわからず頭を下げた愛子に、彼はぽつりと言った。

「それから、さっきの事だけど……」

彼は言いにくそうに口ごもったが、少し間を置いてはつきりと言った。

「あれは、聞かなかったことにしておくから」

氷室の声は、業務連絡をするときのそれと同じに聞こえた。彼はくるりと踵を返すと、先に立って歩き出した。

愛子は何も言えぬままに唇を噛んだ。自分の気持ちを告げた事は、彼にとってやっぱり迷惑だったのだ。それでも、毎日顔を合わせて仕事をするのだから、早いうちにケジメだけはつけておかないといけない。それが大人というものだろう。

立ち去ってゆく氷室の背中に向かって、愛子は震える声で言った。「あのつ、ご迷惑な事はわかってます。でも、でもどうしても言いたかったんです。……それだけです。もう二度とストーカー行為もしません。氷室さんのプライベートに好奇心を持ったりもしません」

言っているうちに、涙が滲んでくる。氷室が立ち止まってゆつくりと振り返る。

「規則違反も絶対にしません。だから……」

愛子は泣きたいのを堪えて懸命に笑顔を作った。

「明日からも今までどおり、一作業員として、皆と同じに扱ってください。お願いします！」

なんとかそれだけ言い終えて、愛子は氷室の脇をすり抜けると本館に走った。氷室の呼ぶ声がしたが、振り向かなかった。

限界だ。これが、精一杯。

誰も居ない女子更衣室に駆け込むと、わんわん声を出して泣いた。ポケットティッシュ一個分を使用して鼻をかみ、三十分ほどぐずぐずした後、丁寧に顔を洗った。化粧をして、濡れた前髪をヘアピンで留める。白いワンピースからいつもの青い作業着に着替えると、ようやく気持ちが落ち着いてきた。もう職場に戻っても、なんとか仕事ができそうだった。自分の感情を誤魔化せる歳になったという事だろう。良くも悪くも社会に揉まれ、少しは大人になっているのだなと、何だか奇妙に冷めた自分を自覚した。

プレハブに戻る為に本館一階の廊下を歩いていると、右手側のドアが開いて飯田が出てきた。ドアの向こうは営業課のフロアだ。

「おう、おチビ。当然、合格したんだろう？」

「うん、楽勝。……っていうか、飯田くんのおかげで……」

そこまで言って、愛子は口をつぐんだ。彼の背後に桜井の姿があったのだ。彼女は営業課の女性社員と話をしながら、開いたドアの隙間を通してこっちを見ている。飯田と親しく話していたら、またチクチクといじめられるかもしれない。普段であればどうってことのない悪口も、さすがに今日浴びせられたら平常心を保てる自信が無い。

飯田は愛子の様子に気付かず、ニコニコ顔で話しかけてきた。

「そうだよな、大きな貸し作ったからな。どうやって返してもらうかなあ。チュー一回とかでもいいかな」

いつもの軽口だが、さすがにこのタイミングはまずい。

飯田のアホンだら！ 叫びたいのをぐっと堪えて視線を彼の背後に向ける。飯田を挟んで桜井とバッチリ目が合ってしまった。

まずい！

思わず肩をすくめるようにして会釈すると、何と彼女が花のように微笑んだではないか。

愛子は自分の目を疑った。絶対に、凄い目で睨まれるかと思っていたのに。

桜井は歩いてくると、ドアにもたれかかって声をかけてきた。

「相変わらず仲良しね。うふふ」

その声に飯田が飛び上がった。桜井の方を振り向いた彼は、まるで幽霊でも見たような顔をしている。桜井は飯田に魅力的な笑顔を向けると、今度は愛子に対して思いも寄らない言葉をかけてきた。

「上田さん、認定試験合格おめでとう。女性初の現場作業員の誕生ね。大変だと思うけれど、頑張ってね」

桜井の豹変振りについてゆけず、愛子はただガクガクと人形のようになりこんだ。いったい彼女に何が起こったというのか？

飯田も同じように感じたらしく、無言で目を合わせてきた。

「あ、そうそう、上田さん専用のシャワールーム、二、三日中には女子更衣室に設置されるから。楽しみにしててね」

「あ、ありがとうございます」

二人が見守る中、桜井は優雅な足取りで総務課のある二階に戻って行った。

彼女の後姿が完全に視界から消えると、飯田が囁いた。

「何か、桜井……おかしくねえ？」

確かに。でも、おかしいという言い方は違う気がする。むしろ、以前の彼女に戻ったようだ。いや、以前より遙かにはじけている。「そういうのって、やっぱり『おかしい』っていうのかな？」

愛子は飯田と顔を見合わせて首をひねった。

桜井の事があり、氷室に振られたダメージはいつの間にか紛れていた。

工事課では、愛子の認定合格を祝って、若手の奥田と河合を中心に一杯飲もうという企画が持ち上がった。

「そんな事してくれなくっても、いいってば。まだ大型免許だって取れてないのに」

顔をしかめる愛子に、奥田は「それはそれ、これはこれ」と言っ
て白い歯を見せる。工事課の人間は、皆何かにつけて飲みたがるのだ。愛子のお祝いだって、飲みたいが為の口実に違いない。それでも、彼らの気遣いがちょっぴり嬉しかったりする。明日からは愛子も事務員ではなく、作業員という肩書きだ。氷室の下、外に出て共に働く仲間という意味で、何だか以前より奥田たちに親しみが湧いてきた。

こうやって楽しくやっているうちに、きっと氷室の事もただの上
司として見れる日が来るに違いない。そう、自分に言い聞かせて、
愛子は主任席で仕事をする氷室を見つめた。

出勤

終業時刻になった。本日の飲み会の会場は駅ビルの屋上にあるビアガーデンだ。現地集合ということで、奥田たちは先にプレハブを出て行った。愛子は自席に座ってパソコンをいじる氷室を見た。彼は今日の飲み会を欠席するのだそうだ。河合が誘ったところ、「急ぎの仕事があるから」と断られたと言っていた。急なことだったから、本当かもしれないし、また、嘘かもしれない。いずれにしても、もう愛子には関係の無いことだ。さっき、彼の事には好奇心を持ったりしないと、本人に約束したばかりだ。

愛子は嘆息すると、着替えるために本館の女子更衣室に向かった。本館三階への階段を上がり、女子更衣室のドアに手をかけると、中から笑い声が聞こえた。愛子は一瞬躊躇った。桜井や、以前愛子のことを陰で悪く言っていた営業課の女性たちが居たら嫌だなと思ったのだ。

ぐずぐずしているうちに、背後からヒールの音がした。もうひとり来てしまったようだ。振り向くと、桜井だった。

「あら、上田さん、お疲れさま」

相変らず気持ち悪いほどに機嫌が良さそうだ。彼女は愛子を促して、女子更衣室に入って行った。

二人そろっての登場に、中でくつろいでいた女性三人が一斉に口をつぐんだ。飯田を挟んでの愛子と桜井のトラブルは、女子社員たちの間で知らぬものは居なかったから、きっとビックリしたのだろう。まあ、トラブルと言っても、真相は桜井が一方的に誤解して突っかかっていただけなのだが。

「お疲れさま。あら圭子さん、素敵なアクセサリーね」

桜井はヒールを脱いで畳敷きの室内に入ると、三人の女性のうちの一人に声をかけた。

声をかけられた圭子は、曖昧に笑って胸元のネックレスを握り締

めた。

「それ、ダイヤでしょう？ 圭子さんののは、何カラット？」

圭子は桜井の問いには答えず曖昧に笑うと、そそくさとバッグを手にとった。他の二人も慌てて身支度すると、逃げるように更衣室を出て行った。

彼女たちの様子がおかしいのは、自分のせいかわからないが、あまり気持ちの悪いものではない。チラリと桜井を見ると、彼女は全く気にならない様子で姿見の前に立って髪を整えた。愛子は彼女の耳元の輝きに目を奪われた。

「あ……。ピアス、開けたんですか？」

桜井は満面の笑みで振り返った。

「やだ、気付いた？」

桜井は頬を染めて自分の耳元に手をやった。愛子の記憶では、つい先日まで彼女は耳に穴を開けていなかったと思う。ピアスの宝石はダイヤのように見えるがけっこう大きい。ひよつとしたらキュービックジルコニアかもしれないが、そんな事は訊けない雰囲気だった。

「これ、彼からのプレゼントなの」

そう言って、桜井はうふふと笑う。

「か、彼氏、出来たんですか？」

愛子は目を大きく見開いていた。飯田のことで怒鳴られてからまだそれほど日数は経っていない。

桜井は顔をいつそう赤くして頷いた。

ああ、だから機嫌がいいんだ……。

愛子は納得した。なんて単純。でも、そんな桜井は女性から見てとても可愛い人だと思った。自然と愛子の口元にも笑みが形作られてゆく。桜井は耳元をいじりながら、さらに驚くことを告げた。

「私、もうプロポーズされたのよ」

「ええ？」

ちよつと、早くないか？ それに、耳に穴を開けていない女性に、

いきなりピアスをプレゼントするなんて、相手の男性はかなり強い気もするが？

思わず出そうになった言葉を、愛子は必死に飲み込んだ。

「彼とはね、パーティーで知り合ったの。外資系の商社に勤めていて、秋にニューヨーク支社に転勤するから、私と一緒に来て欲しいって！」

桜井は鏡の中の自分自身に向かって、いとも幸福そうに微笑んだ。
「パーティー……？」

ひよつとして、合コンというやつではないのかと思ったが、口をつぐんでいた。水を差すようなことを、言うもんじゃない。

運命の出会いだったのよ、と桜井は瞳を潤ませて愛子を見た。

「じゃあ桜井さん、会社辞めちゃうんですか？」

尋ねる愛子に、桜井は人差し指を立てると艶やかな唇に当てた。

「実は総務課長にはもう辞表を出してあるの。もう少ししたら皆に言おうと思ってるから、それまでは秘密にしておいてね」

愛子は頷きながら、心の中でホッとしていた。桜井が退職してしまうのは寂しいが、彼女とのわだかまりが無くなったことは、何よりも嬉しい。それに、これはとてもおめでたい話だ。

彼女はもつと彼氏の話聞いて欲しそうだったが、愛子は「飲み会があるので」と言って先に更衣室を出た。

「結婚か。羨ましいな」

階段を降りながら、愛子は自分のウェディングドレス姿を思い浮かべた。バージンロードを歩く、白いドレスの小柄な少女。胸元には胡蝶蘭のブーケ、たつぷりのレースで飾られたベールが、ステンドグラスからの陽射しで虹色に輝く。遙か前方にタキシードの男性の後姿がある。一步一步近付くと、男性が振り返って……。

ビイイイイイイイイイ！

けたたましいブザーの音で、愛子の妄想は破られた。基線事故の警報だ。管轄内のどこかで、停電していることを知らせる合図である。事故停電は電力会社にとっての非常事態だ。

階段を駆け下りると、一階の営業課フロアで一斉に電話が鳴り出していた。現在の時刻は午後6時過ぎ。世間は夕飯時だ。事故点がどこかわからないが、一般家庭はまだしも、営業中の店舗での停電は死活問題だろう。

定時を過ぎているため、半数の社員しか残っていないフロアで、全部の電話が鳴り響く。

「電話回線をしばれ！ オートアンサーに切り替える！」

営業課フロアの中央で、営業課長が怒鳴っている。

愛子は営業課に飛び込んだ。

「いったいどこが止まってるの？」

あたふたと電話応対する社員の間をぬって、手元にある受付メモを次々に覗き込む。苦情客の住所を確認してゆくと、どうやら停電は駅周辺らしいことがわかった。

駅周辺は繁華街だ。ファッションビルや大型電気店などが軒を連ねている。

愛子は大急ぎでプレハブに走って行った。

工事課の事務所内では、すでに当直の者が現場へ向かう準備に追われていた。氷室が配電系統の業務画面を見ながら指示を出している。

「主任、現場は駅周辺らしいです。何かお手伝いすること、ありませんか？」

氷室は大きく頷くと、河合たちを呼び戻すようにと言って、彼女に係の電話番号簿を手渡した。

とにかく基線事故は緊急事態だ。一分一秒でも早い原因究明と復旧を求められる。人員が足りないときは呼び出し出来るように、各個人の携帯電話番号を上司が控えてあるのだ。

「河合さん、もう飲んじゃってるかもしれないよ」

電話を掛けると、河合はいきなり停電について尋ねてきた。

「どうして知ってるの？」

問い返すと、現在店の照明が消えており、あたりは真っ暗だと彼

は言った。

「屋上ビアガーデンから見た限りでは、かなりの軒数が止まってるみたいけど？」

彼の言葉に愛子は納得した。河合たちは今停電地帯の駅ビルに居るのだ。彼の電話を通じて消防のサイレンが聞こえてきた。

無線台に緊急のランプが点いたので、愛子は電話を切って走った。いつものチャンネルではなく、外部からだ。

「帝都K、感アリどうぞ」

『えー、こちら消防です。K 駅裏手で火災発生、高圧線から火花出てます』

隣に氷室の気配がした。彼は険しい顔で無線に聞き入っている。たった今、サイレンを鳴らして当直組が出動して行った。

「主任、河合さんたち駅ビルです。直接現場に行ってもらいますか？」

氷室は頷くと、彼らの作業着一式を用意するように言って、自分も現場に出る仕度を始めた。

突然の緊急事態に、帰ったはずの工事長が配電課長と共に戻って来た。何故か相良みつ子女史率いる配電課のメンバーも一緒だった。ブレハブ内が一気に騒がしくなった。

「いやあ、驚いた。国道沿いの店で飲んでたら、いきなり停電したから戻ってきたよ」

工事長は上着を脱ぐと、どこかへ電話を掛け始めた。どうやらこの近辺の送電線を扱う工務事務所に連絡を入れているようだった。

「高圧線が断線ですって？ 大変だわ」

相良みつ子女史が、無線台の隣の氷室の席に向かうと、パソコンに表示されている配電系統の画面を見詰めた。

これは後から聞いた話だが、高圧線にトラブルがあると、本店直轄の系統制御室で事故点付近の通電を自動的に遮断する仕組みになっているのだ。ただ、その範囲は非常に広いため、一気に数千軒が停電する。その後現場を確認しながら、関係の無い箇所から順に手

動操作で送電を再開してゆくことになるのだそうだ。

駐車場に出て河合たちの作業着や工具一式を作業車に積んでいると、氷室が走ってきた。

「あ、主任積み込み終わりです。もう車出せますよ。私は無線に居ますね」

愛子は氷室に車のキーを手渡すと、プレハブに戻ろうとした。

「待って！」

鋭い口調で呼び止められた。振り返ると、駐車場の照明の下、氷室が一步、二歩近付いてきた。

「氷室……主任？」

彼は一瞬思い詰めたような顔をしたが、愛子の肩に手を乗せると言った。

「無線は、相良さんをお願いしました」

「へ？」

首をかしげる愛子に、氷室はたった今渡したばかりの車のキーを戻すと言った。

「上田さんも出勤です。この作業車は普通免許で運転できます。すぐに着替えて現場に行ってください。河合たち、一杯飲んでしまってるから、現場で車輛を動かす人間が必要なんです」

愛子は息を飲んだ。いくら普通免許で運転できるといっても、目の前にある車輛は自宅の1500ccや軽トラックと違って車高も高いし車幅も大きい。しかも辺りは真っ暗だし、現場は人も車も多い繁華街だ。停電してるということは、ひょっとしたら信号機も機能していないかもしれない。そんな状況で、現場に着く前に事故ってしまったらどうするのだ？

「しゅ、主任は？」

「俺は大型のバケット車で先に出る。キミはもう単独運転できるんだ。自信を持ってやってください」

「で、でも……」

愛子は頭の中が真っ白になってしまった。初出勤がこんなに急に

やってくるなんて。

どうしよう、どうしよう！

うろたえる愛子の視界が、青い作業着一色になった。

え……？ 何？

両肩に置かれた温かな手のひらの感触に、心臓が大きく打った。

ゆっくり顔を上げると、驚くほど間近に氷室の日に焼けた顔がある。

「大丈夫だから」

愛子の両肩をぎゅっとつかむように引き寄せて、氷室が力強く言った。

「大丈夫だから。キミは立派な工事課の一員だ。俺が一から指導したんだ。なんだって出来るって」

氷室が愛子の目を真っ直ぐに見下ろして言う。愛子の心拍数が一気に跳ね上がった。切れ長の瞳と整った鼻筋、少しヒゲの伸び始めた頬の辺りから形の良い唇へ目線がさまよう。

彼の口元から目が離せなくなって、愛子はさらに混乱した。

あたしのバカ！ 何考えているの？

彼の声を間近で聞いて、脳みそが勝手にロマンチックな錯覚を起こしそうになる。何とか自分を落ち着けようと、懸命に深呼吸を試みたが、実際には池の鯉みたいに口をパクパクさせただけだった。

氷室は何を勘違いしたのか、いつそう強く愛子の肩をゆすぶって、「大丈夫だから自信を持って」と繰り返し、さらに顔を近づけると愛子の瞳を覗き込んできた。愛子はギュッと目を閉じた。こんな状態で、大丈夫なはずがない。

運転のことだけでも精一杯なのに。どうしてこんな時に、こんなことするの？ さんざん泣いて、懸命に自分の気持ちに折り合いをつけようと努力したのに。

こんな風に真っ直ぐに見つめないで欲しい。ひょっとして彼は、自信のなさそうな部下を励ましているつもりで居るのだろうか？

「出来るね？」

促されるままにガクガク頷くと、彼は満足した様子で大型車の方

へ走って行った。

車に乗り込む氷室を見送って、愛子は大きく息を吐いた。頬が熱くて、鼓動が有り得ないほどに大きく鳴っている。

彼女はプレハブの建物に背を向けると、作業着に着替えるために本館にダッシュした。

ヘルメットを被って出勤しようとする愛子を、工事長が呼び止めた。

「上田さん、氷室くんは任せて大丈夫だって言ってたけど、本当に平気かい？」

「そっか……。本当に信頼されてるんだ、あたし。」

愛子は頷くとプレハブを出て駐車場に向かった。

「作業員としての初仕事、頑張らなくっちゃ」

帝都電力前の道路を、パトカーが行き過ぎた。基線事故の原因は三台玉突きの交通事故で、その最後尾の大型クレーン車が、横転した際に電柱をなぎ倒したらしい。事故車から火が出たとも聞いているが、死者が出たかどうかは不明だ。現場はよっぽど線路際なのだろうが、現在電車も止まっているとの情報が入っていた。

「おチビ！」

車に乗り込む寸前で、今度は飯田に呼ばれた。彼は駐車場に面した本館の非常階段から叫んでいた。

「一人で出るのか？ 氷室、居ないのかよ」

「そうよ」

早く出なければならぬのにと、少々焦りながらぶっきらぼうに答えた。

飯田は階段を駆け下りながら言った。

「一緒に行ってやるよ。オレがついてってやるから」

「ええ？」

愛子は瞳を見開いて彼を見た。運転は自分でやるとしても、助手席に飯田が居てくれたらどんなに心強いかな。いつものことだが、ど

うして飯田はこんなにタイミングよく声をかけてくれるのだろう。
「一人でなんて、ムチャするな。オレが……」

駆けてくる飯田を見てハツとした。

また、彼に頼るのか？ さっき氷室に見つめられたことを思い返す。

大丈夫だから。

氷室は任せてくれたのに、また自分は飯田に頼ろうとしている。
氷室の信頼を得たというのに、一人でやれなくてどうするのだ？

本館の階段にもう一つの人影が現れた。

「飯田さん、課長が営業課の電話応援に行けって言ってますよ」

若い男性の声は、料金課の新社員らしい。飯田は足を止めて振り返りざまに怒鳴った。

「うるせエ！ おまえこそさっさと行け！」

飯田が新社員を叱り飛ばしている間に、愛子は運転席に乗り込んでエンジンをかけていた。ここで飯田に頼ったら、氷室の信頼を裏切るような気がした。

エンジン音に飯田が振り向いた。

愛子はウィンドウを下げると、飯田に向かって手を振った。

「飯田くん、ありがとう。でも、一人で行くよ。氷室さんに言われたとおり、きつちりと自分の仕事、自分でやるから」

愛子はゆっくりと作業車を発進させた。

「愛子！」

飯田が走ってきて運転席のドアを叩く。

「飯田くん、行ってくるね」

彼に笑顔を向けて、ドアをロックし、窓を閉めた。

『おチビ』ではなく、『愛子』と呼んだ飯田の声に、何だか励まされた気がした。

駅周辺はひどい渋滞だった。愛子は緊急時に鳴らすサイレンのスイッチを入れた。一般車が開けてくれた隙間をぬって進むのは、物

凄く神経を使った。現場周辺はやはり信号も点灯しておらず、警察官が出て人や車を誘導している。

事故現場を封鎖するために、通行車両を迂回させている警官に、愛子は大声で言った。

「帝都電力です、事故現場に入れてください」

警官は、女性の声に驚いたようだったが、親切に誘導してくれた。「ああ、電力さんね。この先五十メートルが現場ですよ。気をつけて」

サイレンを鳴らして駆けつけると、待つてましたと言うように河合たちが手を振って走ってきた。彼らは運転席の愛子と、誰も乗っていない助手席を交互に見て目を丸くした。

「あ、愛子さん、単独で？」

「この混雑の中、よく事故らなかつたな」

ああ、やっぱり一人で頑張つてよかった。心からそう思った。

事故現場はひどい有様だった。踏切のすぐ横で事故があつたらしい。ケガ人はすでに救急車で運ばれたようだが、つぶれた二台の乗用車と横転したクレーン車が見事に電柱を折っていた。クレーン車が横転した際に、線路の上を通っている電線を引っ掛けたようで、二本あるうちの一本が断線して線路内にぶら下がっていた。事故車の火災はとりあえず鎮火している様子だったが、辺りはまだ騒然としており、くすぶつた煙とゴムの焼けたような臭いとが立ちこめている。消防と警察が交通事故のほうの処理をする傍らで、帝都電力の青い作業を着た男たちが線路内で作業を始めていた。

愛子は河合たちに付いて、折れた電柱のそばへ行こうとした。
「上田さん」

消防の人と話をしていた氷室が駆け寄ってきた。

「主任、私、ちゃんと一人で来れました」

愛子は嬉しくてちよつと大きな声で言った。褒めてもらえることを期待していると、氷室は険しい顔をした。

「配電系統が混乱しているから、二次災害の恐れがあります。危険だから、上田さんは車のところで待機してください」

「え？ 私も何かお手伝いさせてください」

せつかく来たのに、これじゃあ何の役にも立たないじゃないか。

「電気工事士の資格、持ってないでしょう？ それに、女の子があぶな……」

言いかける氷室を遮って、愛子は訴えた。

「私だって工事課の一員です。さっき主任がそう言ったじゃないですか！」

「そ、それは……」

「資格が無かったって……、女の子だって、雑用ぐらいは出来ます」

氷室は黙ってしまった。彼は鷹の眼差しでじつと愛子を見下ろしていたが、奥田に呼ばれて彼女から顔を背けた。愛子は逃れるように踵を返すと、作業を始めた河合の元へ走って行った。

氷室さんのバカ！ 言ってること、おかしいよ。こんなときばかり、女の子だからとかって、こういうことなの？

宙ぶらりんの自分が嫌だったし、それをどうしていいかわからない様子の氷室にも腹が立った。

最優先作業で線路内の電線を回収、張替えすると、間もなく止まっていた電車が運転を再開した。撤去したケーブルを巻き取っていると、河合が声をかけてきた。

「愛子さんご苦労さま。主任が呼びだよ」

顔を上げると閉まりかけた踏切の反対側から氷室がじつとこちらを見ていた。通過する列車の隙間から見えた顔は、怒っているように感じた。彼の指示を無視してずっと河合たち一班と行動を共にしていたのがいけなかったのだろう。愛子は巻き取った長いケーブルを肩に担いだ。思っていた以上に重くて足がよろけた。踏切が開くと、愛子は歯を食いしばって氷室の方に歩いて行った。廃材用のトラックは彼の背後の路肩に止めてある。

トラックを目差してすれ違いざまに会釈だけすると、担いだケールをむんずとつかまれて転びそうになった。

「上田さん、復旧の目処がたちましたから、もう帰社してください。そして、そのまま家に帰ること。わかった？」

愛子は氷室を睨み上げた。確かに電車は動き始めたけれども、折れた電柱はそのままだし、電柱に張られていた電線の架け替えもまだ終わっていない。商店街の一部も停電したままで、なにより、作業員は誰一人帰されてはいない。

「どうして？ あたしだけ帰れなんて。まだみんな働いているのに、一人だけ帰るなんて。あたしは……」

すると氷室は廃材用のトラックをチラリと見やった。つられて見ると、トラックの後ろに帝都電力のロゴ入りの軽自動車がとまっており、運転席に飯田の横顔が見えた。

「飯田くん、なんで？」

どうして料金課の飯田がここに居るのだろうか？ 目を瞬かせて氷室を見上げると、彼は無表情に言った。

「工事長の命令です。管理職でない婦女子の深夜労働は、服務規程に定められていません」

そんなのって、あんまりだと思った。「作業員として頑張って」と言っておきながら、結局女だからという理由で帰されるなんて。

「でも、なんで飯田くんが？」

シヨックを受けながらも懸命に声を出す。氷室は相変らずの無表情で言った。

「彼には、俺が頼んだ。キミを迎えに来て欲しいと、俺が頼んだんだ」

俺が頼んだんだ。

「でも、どうして？ 相良さんは居なかったんですか？ 工事長は？」

誰でもいいのに、どうしてよりによって飯田になんかに頼むんだろっ？

氷室は彼女の肩からケーブルを取り上げるとそれを無造作に自分の足元に放った。幾重にも重なる輪のような黒い線をじっと見ている愛子に、氷室は大きめの声で「ご苦労さまでした」と言った。彼の声に反応して、近くで作業していた数人が同じように「ご苦労さまでした」と声をかけてきた。周囲から挨拶されてしまい、帰るしなくなってしまうた。皆に頭を下げると、愛子は氷室の脇を小走りで駆け抜けた。悔し涙が込み上げる。

やっぱり自分は認められてはいなかった。その事実にはショックと共に不安がつくる。業務上の車輛認定に受かって、氷室に言われた仕事をしたけれど、それだけのことだ。結局、皆と同じようには見てもらえないのだ。この先大型免許を取って、電気工事士の資格まで取れたとしても、また同じような扱いを受けるのではないだろうか。

結局、工事課に女性はいらないのかもしれない……。

誰にも見られないように作業服の袖口で目元を拭いながら、軽自動車の助手席に乗り込むと、飯田は無言で車を発進させた。今しがたのやりとりを思い返してぼんやりしていた愛子は、赤信号で止まったときようやく思考が動き出した。

「あの、飯田くん。……わざわざありがとう」

「ああ」

愛子の言葉に、飯田は不機嫌そうに返事をする。いつもと違う様子に改めて運転席を見ると、彼は眉間にシワを寄せていた。関係のない業務を言いつけられて、きつと迷惑しているのだろう。

「ごめんね。こんな時間に……」

車内のデジタル時計は午後十時二十五分と表示されていた。青信号になり車を走らせながら、飯田はため息と共に言った。

「お前はカンケーねえよ。気に入らないのは氷室だ」

愛子はヘルメットを取ると、額に貼り付いた前髪をひっぱった。自分の自己満足の為に居残ったばかりに、また氷室に気を使われ、飯田にまで迷惑をかけてしまった事に気付く。

「あたしが……あたしが氷室さんの言うこと聞かなかったから。彼の命令を無視したの。だってあたしは……」

俯く愛子の頭を、飯田はいつものように軽くポンポンと叩いた。

「違うつて。俺はもつと別のことで言ってるの」

「別のこと？」

飯田は、愛子が軽トラックで高速に乗った件を持ち出した。

「氷室が夕方俺のところに来てさ……。俺絶対叱られるって思って身構えたら、頭下げられたんだ」

は？ 愛子は意味がわからず首をかしげた。

「お前のこと、かばってくれてありがとうつて。なんかムカついちゃった」

あいつから礼を言われる筋合いは無い、と飯田は吐き捨てるように言つてそっぽを向いた。愛子は混乱する頭で彼の言葉を聞いている。飯田はさらに慥然とした顔で続ける。

「今回のお迎えだつて……氷室、妙な言い方しやがつて」

「妙な言い方？」

「ああ、『上田さんのことは、キミのほうがいいんだ』とか言つてさ。あいつ完全に勘違いしてるし。『バカじゃねえの？』つて怒鳴つてやるうかと思つたぜ。めっちゃめっちゃプライド傷ついた」

なんで飯田のプライドが出てくるのかわからないが、彼はそれきり口をつぐんでしまった。

愛子は黙つて自分の膝に目を落とした。これが、「好きだ」と告白したことに對しての答えだと思つた。やっぱり迷惑だったのだ。だって、彼は愛子を飯田に押し付けたのだから。

沈黙のまま、車は深夜の国道を走り、間もなく帝都電力の駐車場に着いた。

「飯田くん、どうもありがとう」

ぺこりと頭を下げる愛子に、飯田はいつものへらへらした顔に戻つて言つた。

「あいつの、敵に塩を贈るような態度は不服だけど、気持ちにはわか

らないこともない」

どういうことだろう？

キョトンとしていると、早く工事長に挨拶して着がえて来るように急かされた。

「氷室の命令だ。業務車でお前を自宅まで送ってから直帰するように頼まれてる。ここで待つてるから」

いつもの笑顔で言われて、愛子は急に力が抜けるような感覚に襲われた。今日はとても長い一日だった。あと数時間したら、また会社に来なければならぬのだと思うと、もう何かを考えるのは面倒臭い。愛子は飯田の言葉に素直に従うことにした。

「おい、着いたぞ」

体を揺すられてハッと目が醒めた。車に乗った途端に寝てしまっただけらしい。

「あれ？ 飯田くん、何であたしんち知ってるの？」

助手席側には見慣れた我が家がある。

「一応、この辺りまで管轄内だし。それに前にタクシーで送ってたじゃない」

欠伸を噛み殺している愛子に、飯田はふて腐れたような声で言った。

そうだった。どうも飯田には今後も頭が上がりそうにないほどの借りがあるなと気付く。

「そ、そうだね。いつも……ごめん。この埋め合わせは必ずするかさ」

本当はもっと感謝しなきゃいけないのかもしれないが、体力も気力も限界である。助手席のシートベルトを外してドアに手をかける愛子に、飯田が少し大きめの声で言った。

「お前さあ、もう頑張るのやめろよ。氷室とか工事長とか、それから相良のおばさんにも、いいように利用されてるじゃん」

「え？」

飯田の言葉がきちんと頭に入ってこなくて、愛子はドアから手を放すとゆっくり振り返った。

「利用されてる？ あたしが？」

飯田は頷いた。彼の言うには、会社は男女雇用の均一化で女性作業員の実績を作りたいらしい。現時点で愛子を含めて会社全体で十三名の平の女子作業員が居るのだそうだ。

「へえ、そうなんだ。飯田くん、良く知ってるね」

単純に飯田の知識に感心していると、彼は愛子の肩をつかんで言った。

「でも、お前以外は全員工業科や専門の学校を卒業して入社した人だって話だ」

わからない。飯田が何を言いたいのか、例え頭がぼうつとしていなくても、わからない。

愛子はつかまれた肩先を気にしながら尋ねた。

「あたしだけ、普通の女子社員だってこと？」

それがいけないことなのだろうか？

「お前が……お前が氷室のために頑張ってるのはわかる。けど、専門知識が無い奴が手出しできる職場じゃないだろう？ 今日だって、そうだったんじゃないの？」

肩をつかむ飯田の手に力が込められ、愛子は一気に眠気が醒めた。ひよっとして、飯田はどこからか見ていたのだろうか？

「な、なんでそんなこと、言うの？」

まるで心の奥を覗かれたようで、落ち着かない気分だ。

飯田は愛子の肩から手を離すと、エンジンを切って窓を開けた。

愛子はチャリと灯りの消えた自宅を振り返った。あと数十分で日付が変わろうという時刻に、自宅前で男性と二人で何をやっているのだろうか？ それも（一応）密室で。

彼は愛子の仕草に気付いたようだった。

「ごめん、こんな時間にお宅の前で。だけど、どうしても言わなきゃいけない気がして」

さつきから、いったい何なのだ？

「飯田くんの言いたいこと、よくわからないんだけど？」

疲れているところに訳のわからないことを言われ、少々不愉快な気持ちだった。

「あたしが作業員の仕事に携わるのが、いけないことなの？」

「お前、早く言えば実験台なんだよ」

「は？」

「一般の女子職員にどこまでやらせるか、そういった意味で、会社はお前を基準にしようとしてる」

そんな話は、氷室から聞いた気がする。皆が注目しているのかなとか。専用シャワーの話をしたときだったように思う。

「女性の職域拡大のためだからって話なら、聞いているよ。後に続いてくれる女性の後輩が出来たらいいなって思うよ。それがなに？」

飯田は一瞬黙って愛子の顔を見ると、言いにくそうに口を開いた。「俺の前で建前みたいなこと言うなよ。おチビはさあ、工事課の仕事がしたいんじゃないだろ？ 氷室に認められたい、そばに居たいって、それだけのために頑張ってるんでしょ？」

凶星を指され、愛子は大きく息を飲んだ。

「工事課の仕事は本当に危険と隣り合わせだ。いつ感電死亡事故にあうか、墜落事故にあうか。そんな中で、仕事に対する熱意があればまだしも、お前、動機が不純なんだよ」

まったく返す言葉が無かった。俯く愛子に、飯田は少し柔らかい声で言った。

「氷室に対する気持ちがいけないわけじゃない。だけど、他の十二人の女性たちとじゃ、あきらかに違うんだよ。仕事に取り組む姿勢とか、そういうの。いろんな事わかってて取り組むのと、そうでない奴との差っていうのかな」

「あたしが、いいかげんだと？」

「そうじゃないよ。だけど、やっぱり俺はお前が心配だ」

何だか彼の声が震えているような気がして、愛子はゆっくりと顔

を向けた。飯田はフロントガラスを見詰めたまま胸ポケットからタバコを取り出した。彼の横顔には何の表情も浮かんでいない。そのことに、何故だかホッとしてしまう。

「友達として、忠告してくれてるんだよね？」

「……まあな」

飯田の優しさに感謝しつつ、再び車を降りようとドアに手をかけたとき、飯田が口を開いた。

「氷室は、前に部下を一人再起不能にしてる。あいつは加減を知らないから、ムチャな指示出すらしいという噂を聞いた。だから余計、お前のことが心配なんだ」

愛子は自宅前に佇んで、帝都電力の軽自動車を見送った。角を曲がってテールランプが見えなくなったのに、その場から動くことが出来なかった。

屋上パニック

翌朝いつもの時間に出勤すると、プレハブには工事課メンバーの殆どが居た。夜通し作業をして、結局泊まってしまったのだろう。工事長と配電課長がソファでいびきをかいており、周囲の床に奥田と河合が作業着のまま転がって寝ていた。その他のメンバーもほとんどが自席に突っ伏していた。

愛子はなるべく静かにフロアを歩きながら氷室の姿を探したが、彼だけ見当たらなかった。朝一番で、謝るつもりだったのに。昨夜、半分意地になってしまい、上司である彼の言う事を聞かなかったのは、部下として非常にまずかったと反省したのだ。

「おはよ」

北さんが小声で声をかけてくれたので、愛子は挨拶を返すと氷室の居所を尋ねた。

「ああ、さっき病院に行くとか言って、出て行った」

「病院？ 主任、どこか具合が悪いんでしょうか？」

彼女の問いかけに、北さんは「知らね」と言ったくせに、「でも具合が悪いわけじゃねえよ」と付け加えた。なんか知っているみたいだったが、それ以上は聞けなかった。

時計の針が八時を回り、寝ていた人々が起きだした。いつものように、プレハブ内がざわつき始めると、代わり映えのしない日常が動き出した。

昨夜の事故の影響で、作業員の大半が駅前の現場に駆り出される中、始業時刻を三十分以上過ぎてても氷室は帰ってこなかった。

「上田さん、私は配電課長と一緒にY工務事務所の送電課に行ってきます。中のこと、お願いしますね」

愛子に声をかけると、佐々木工事長は作業用ジャンパーを羽織って、プレハブを出て行った。

皆が泊り込んだため、事務所内はかなり散らかっていた。愛子は無線のヘッドセットマイクを首にかけて、ゴミくずや空き缶を片付け始めた。

「上田さん、申し訳ないね。お先に失礼するよ」

そう声をかけて、昨夜の当直組である二班のメンバーがぞろぞろと帰って行った。他のメンバーは徹夜明けでもそのまま通常勤務だが、当直組はシフト通りに明け休みだ。こういう事態のときは、当直組のほうが得なのだ、と愛子は思った。

彼らが出て行き、愛子はポツンとひとり、プレハブに取り残されていた。作業員の肩書きが付いたからって、急に仕事内容を変更してくれるわけじゃないとわかっていたが、やっぱり何か矛盾を感じた。

ひとりになると、昨夜の飯田の言葉が頭の中に甦って来た。

氷室は、前に部下を一人再起不能にしている。

そんなはずはない、と思う。彼は今まで一度だってムチャな指示は……。そう考えて、愛子はハツとした。両肩に乗せられた、大きな手のひらの感触。認定をもらったばかりの愛子に、一度も運転したことのないトラックを預けた氷室のことが脳裏をよぎった。

どうしてだか行く先々で事故があるんだよ。呪われてるのかな。

金龍禅院の本堂で、そう言って俯いた氷室の言葉が頭の中でぐるぐるする。まるつきり偶然ということもあるが、事故には必ず原因があるのだ。自分の考えに、愛子はふるふると頭を振った。

「私は彼の部下なんだから。信頼しなくては」

愛子は給湯室で店屋物のどんぶりを洗うと、所定の場所に置きに行った。プレハブを出てすぐの物入れの上に積み重なっていると、視界の隅にチラリと何かがよぎった。

本館の屋上に誰かが居た。

よく飯田がサボりながらタバコを吸っている場所だが、飯田ではない。

八月の青空をバックに、髪の高い人物が屋上の手すりから身を乗り出している。

「え？ 桜井……さん？」

愛子はぼんやりと屋上の桜井園子を見ていた。彼女は懸垂の要領で、自分のアゴの高さの柵から肩の辺りまでを覗かせていた。

いったい何をやっているのだろう？

黙って見ていると、黒いものが落ちてきた。

「なに？」

コツンと音をたてて、アスファルトに転がったものは、桜井のヒールだった。愛子は突然寒気に襲われた。再び屋上を見上げたとき、愛子は走り出していた。

「桜井さん！ やめて！」

喚きながら、愛子は本館脇にある非常階段を一段抜かしで駆け上がった。

なんで？ なんで桜井はあんな危ないことをしているのだ？

足がつりそうになったが、愛子は鉄の階段を必死に上り続けて、屋上への扉を押し開けた。

「桜井さん！」

屋上の柵によじのぼろうとしていた桜井が振り返った。その拍子に柵から手が離れ、彼女は屋上のコンクリートに尻餅をついた。

「桜井さん、ヒールが落ちてきたよ。何してる……」

「来ないでよ！」

言いかけた愛子は、彼女の声にビクンと体を震わせた。

桜井は素早い動作で起き上がると、キョロキョロとせわしく辺りを見回した。明らかに挙動不審だ。

「あっちへ行つてよ！」

悲鳴に近い声で叫ぶ彼女の顔は、涙で濡れていて、真っ赤だった。

「まさか、飛び降りようとしてたんですか？」

うつつ……と呻って、彼女は後ずさりを始めた。愛子は頭の中が真っ白になってしまった。

「……なんで？」

うまく言葉が出てこなくて、ようやく発した一言に、桜井が反応した。

「と、飛び降りようと……し、したんだけど、柵が……柵が高くて登れないの」

へ？ 愛子はポカンと開いた自分の口に慌てて手をやった。桜井はぼろぼろと涙をこぼしながら嗚咽を漏らす。

「何度もやったのに。何度も……。だけど、う、腕の力がないからの、登れない。登れないのよお！」

愛子はハアと大きく息を吐いた。何だかよくわからないが、彼女の腕が貧弱でよかった。

「桜井さん、とにかく下に降りようよ。ね？」

愛子が数歩踏み出したとき、事態が急転した。

「いやあああああ！」

桜井は瞳を大きく見開いて、今度は屋上の中央にある鉄塔に向かって走り出した。

「桜井さん！」

あっという間だった。

桜井はもう片方のヒールを脱ぎ捨てると、鉄塔に取り付いてすると上り始めた。

「うそ」

愛子は彼女のヒールを拾って、鉄塔を見上げた。無線のための電波塔は、天辺まで十メートルくらいはあるだろう。さっきの口ぶりでは、彼女は屋上から飛び降りるつもりだったらしい。

「まさか、あの天辺からここに飛ぶつもりじゃ？」

桜井は半分ほど上ったところで止まっていた。愛子は混乱する頭で懸命に考えた。

とにかく誰かを呼ばないと！

屋上から下を覗くが、誰も見当たらない。ウロウロしていると、桜井のヒステリックな声が降ってきた。

「動かないで！ 動いたらここから飛び降りるわよ！」

ええ！ ちよっと！

愛子は叫びだしそうな口を自身の両手で覆った。ビル風に煽られて、桜井のタイトスカートの裾と長い髪が大きく揺れた。

「やめてください、桜井さん！ なんてそんなことするの？」

気が付けば、愛子もべそをかいていた。

「きゃあ！」

桜井は鉄塔の中ほどにしがみついたまま、後ろを振り向こうとして悲鳴を上げた。ぐらりとかしいだ体を必死にたて直し、彼女は再び登り始めた。

このままじゃ、まずい！

愛子は手の中のヒールを放り出すと、桜井の逆側から鉄塔に登り始めた。最近工事課で工具を運んだり、男性に混じって筋トレをしたりしていたので、鉄塔に登ることなど全く苦ではなかった。幅十センチほどの鉄骨に足をかけながらすると登り、愛子は鉄塔の骨組みの間から、真正面にしがみついて震えている桜井に声をかけた。

「桜井さん」

正面から声をかけられて、桜井はギョツとしたように目を剥いた。「下からしゃべっていると、桜井さん落ちそうだったから、あたしが来たよ」

「な、なんなのよ、あんた。大きなお世話なのよ！」

桜井は真つ赤な顔で怒鳴ると、再びゆっくりと登り始めた。愛子も逆側から登る。真夏の空の下、手のひらが汗ばんできた。

全体の三分の二くらい上ったところで、桜井が動きを止めた。彼女の顔に汗が吹き出ている。鉄塔は上に行くにしたがって細くなつてゆくので、対面する二人の距離がぐつと近くなっていた。

「ちよっと。な、なんであんたまで、登ってるの、よ」

桜井が鉄骨の間から息をきらして怒鳴った。

「だって、桜井さんが降りてこないから。それに、あたしは作業員

ですよ。いずれこういう仕事をするんですから、こんなのは、訓練ですよ」

愛子はそう言って笑顔を向けたが、睨まれてしまった。

「ほんと、あなたってどうしてそうやっていつもいい子ぶってるのよ。ムカツク」

桜井は慎重にもう一段上った。愛子も上る。上りながら尋ねた。

「ねえ、桜井さん。とりあえずこの辺で休憩しましょうよ。手が震えてますよ」

「う、うるさい！」

鉄骨をつかむ桜井の指先は、力が入りすぎて白くなっている。

「こうやって、お腹で支えて、手のひらの汗、拭くといいですよ」

愛子は鉄塔の内側に頭を突っ込んで、横に渡した幅十センチの鉄骨に腹で寄りかかった。汗ばんだ手を片方ずつ離して尻の辺りにこすりつけた。

桜井も真正面から同じように身を乗り出してきた。二人の頭がもう少して触れそうな距離だった。桜井は肩で息をしながら言った。

「あたし、もう生きていられないのよ」

愛子は下を見ないようにして、尋ねた。

「どういことですか？」

「あはあと荒い息を吐きながら、桜井園子は言った。

「あたし、騙されたのよ」

「え？」

首をかしげる愛子に、桜井は大粒の涙を流して、悲鳴のような声を出した。

「彼、商社マンなんかじゃなかったの！」

吹き過ぎる風が桜井の髪を弄ると、耳元で大粒の宝石が煌めいた。こうして青空の下で見ると、それはダイヤではないとすぐにわかった。つい先日、結婚するってあんなに喜んでいたのに、どういことだろう？

黙っている愛子に、桜井は震える声で言った。

「ニューヨークで一緒に住むために、向こうで色々準備しなくちゃならないって。あたしのために、家のキッチンやバスルームなんかをリフォームしたいんだけど、お金が足りないって言われて」

彼女の言葉に愛子は眉根を寄せた。

「まだ親にも正式に紹介していなかったから、あたし、自分の貯金から三百万を彼の口座に振り込んだの」

「さ、三百……」

絶句する愛子に、桜井は涙目で言った。

「だって、結婚するつもりだったから、だから……」

桜井園子は鉄骨にしがみついたまま、ぽつりぽつりと話し出した。振り込んだ途端に、彼氏と連絡が取れなくなったのだと言う。さすがに心配になり、彼の会社に電話をしたら、そんな人物は居ないと言われたのだった。

「どうしようもなくなつて、親に話したらひどく叱られて……。パパが詐欺だって言うの。でも、あたしは彼を信じたかった。そうしたら、さっき会社に警察から電話が……」

愛子は桜井に見えない位置でため息をついた。桜井の彼氏は結婚詐欺師だったのだ。

「あたし、総務課長に先週辞表を出しちゃったの。なのに……こんなので、あんまりよ」

「桜井さん……」

愛子はどうしたものかと懸命に考えていた。自殺したい心境はよくわかる。でも、そんなに簡単に死んではいけない。

「桜井さん、よく考えて。あたしたち、まだ二十代だよ。これから恋だって、いっぱいするかもしれないじゃない」

「気休めは、やめてよ！ あたしなんて、飯田くんに振られて、今度こそって……。なのに、結婚詐欺！ 次の恋なんか、もう考えられない！」

桜井は鉄筋にしがみついたままわんわん泣いている。お手上げ状態だった。愛子の口から諦め気分でついホンネが出てしまった。

「でも、桜井さん。飛び降りって、悲惨らしいですよ。ぐちゃぐちゃで。ここで飛んだら、間違いなく飯田くんに死体見られますよ」
ちらりと目を上げると、桜井はハツとした様子だった。愛子の頭の中に考えが閃いた。

もしかしたら、飯田の名前で釣れるかも！

「そうだよ。それよりも、今、この状態を下から飯田くんに見られたら、けっこう恥ずかしいですよ」

「な、何言ってるのよ！ か、関係ないわ！ どうせあたしは死ぬんだから！」

彼女の目線が泳ぎ始めた。どうにかなるかもしれない、という思いが確信に変わる。

「桜井さん、スカートだから、丸見えだし」

桜井の顔が真っ赤になった。

真夏の温い風が、彼女のスカートを揺らし、愛子の額の汗を掠めて吹きすぎた。桜井は思案するようにしばらく沈黙していたが、やがて、ちらと愛子の顔を見て、口を尖らせた。

「わ、わかったわよ。……下りるわよ」

愛子は無表情を装って頷いたが、内心は安堵で涙が出そうだった。桜井は悔しそうな顔で言った。

「飛び降り自殺はやめるわ。だから、このことは……」

愛子は大きく頷くと言った。

「わかってますよ。このことは誰にも言いません。約束します」

誰かに言ったら許さないわよ、と念を押す桜井に、愛子は神妙な面持ちで何度も頷いた。

「じゃあ桜井さん、ゆっくり下りましょうか」

「わ、わかってるわよ！」

そう言って一歩下りた途端に、桜井の体がぐらりと揺れた。

「あー！」

スローモーションのように、ストックキングの足が鉄骨を踏み外すのがくつきりと目に焼きつく。

「桜井さん！」

愛子は鉄塔の隙間に上体を突っ込んで、桜井の右腕をつかんだ。

「い、痛い！」

桜井が鉄筋に片腕だけでひっかかって悲鳴を上げた。

「お、重いよ」

愛子は前のめりになって必死に彼女の腕をつかんでいた。腹部に鉄筋の角が食い込む。あばらの辺りに激痛が走ったが、今手を離せば桜井は落下する。

「痛い、痛い、あ、足が掛からない！」

桜井は頼れるよすがを求めて手足をばたつかせた。

「桜井さん、落ち着いて。もう一方の腕、どこかに……早く、つかまって」

声を出すたびにあばらが軋む。

「いやあああ！ 出来ない。出来ないよお！」

桜井は完全に真横を向いてぶら下がっている。

「手がダメなら、右足。どこかに足をかけて」

愛子の胸のあたりでパキンと音がした。と、そのとき

『帝都K、こちら帝都一、感アリどうぞ』

首に掛けたヘッドセットマイクから河合の声が流れ出た。胸ポケットの無線のスイッチが入ったのだ。

「あ、誰か、助けて！ たすけてー！」

『帝都K？ 上田さん？ どうしま……』

胸の辺りで再びパキンと音がして、プツンと無線が切れた。

愛子は蒼白になった。助かると思ったのに。

落胆と共に、桜井の体がぐっと重くなった気がして、愛子は歯を食いしばって声をかけた。

「桜井さん、桜井さん！」反応が無い。

うそ！

桜井が失神している。彼女の全体重が愛子の上半身にかかった。あばらに当たった鉄骨がさらに食い込む。口の中に血の味が広がっ

た。

……もう、ダメ！

「上田さん！」

ばたばたと足音がして、氷室が屋上に姿を見せた。

「しゅ、主任！」

彼の後から数人の工事課メンバーが駆けつけて来るのが見えた。

「いったい何がどうなってんだよお！」

奥田が喚きながらあつという間に鉄塔を上つてくると、ぐったりした桜井の体を抱えた。急に腕が軽くなって、愛子はくらくと眩暈がした。

頭を下に、そのままずると自分の体が鉄塔の内側にずりおちてゆくのがわかったが、どうすることも出来ない。首に掛けたヘッドセットマイクがひと足お先に落下していった。それは内側の骨組みに当たって、カンと乾いた音を立てた。

どこかで氷室が呼んでいる声が聞こえた。

懸命に目を開けて彼の姿を探すが、見当たらない。代わりに、眼下には桜井を抱えて下りてゆく奥田がぼやけて見えた。

「……桜井さん、よかった」

呟いた刹那　体がふわりと浮いた。

骨折り損の・・・

死んでなかった。

物凄く胸が痛む。胸が痛むと言っても、心が傷ついたとか、そういうのじゃなくて、とにかくその部分が痛い。

夢うつつで目を開けると、真っ白い天井をバックに、母親の顔があった。心配そうな母に向かって微笑んだつもりだったが、愛子はそのまま深い水の底に落ちていった。

夢を見ては目を開け、また目を閉じて夢を見た。たいてい誰もおらず、白い天井を見てまた眠りにつく。ときどき母親が居て、愛子に気付いて声をかけてくることもあったが、母は椅子に座ったまま居眠りしていることもあった。

どのくらい繰り返したのかわからないが、女性の声で愛子はハッキリと覚醒した。

「上田さん、診察しますよ」

口の中がかさかさ渴いていた。白衣の女性を目にして、ようやく状況が飲み込めた。どうやら自分は入院しているらしい。腕に点滴がつながっている。

「……今日は、何日ですか？」

「八月十二日です」

看護師はベッドの角度を起こしながら言った。

愛子の脳が活動し始めた。桜井と共に鉄塔に上った。それから何だかものすごく長い時間が経過したように思っていたが、あれは昨日の午前中のことだったのか。

ベッドの周りに引かれたカーテンが揺れて医者が入ってきた。

「上田さん、前、失礼しますね」

そう言っ、看護師が愛子のパジャマの前を全開にした。ハッとして首を動かした途端に激痛が走った。

「うっ！」

そろりと下を向くと、上半身が包帯でぐるぐる巻きだった。これではぺちゃんこの胸がますます平らになってしまっじゃないか。

医者は腹の辺りのガーゼをめくって言った。

「肋骨、左右一本ずつ骨折してるから。安静だよ。それから、内臓が傷ついたので切開して止血しましたからね。傷痕は五センチくらいかな」

「ええ？」

愛子は思わず大きな声を出して、再び激痛に見舞われた。

傷口を消毒し、点滴を付け替えて、医者と看護師は居なくなった。

愛子は天井を睨んだまま呟いた。

「あばら骨、折れたの？ お腹も切ったの？ なにそれ……」

一時間ほどして母親と祖母が見舞いに来た。

「あんた、大変な目にあつたのねえ」母親は涙ぐんだ。

昨日はどうやら間一髪で落下せずに済んだが、そのまま病院に運ばれて今に至つたらしい。

「会社から電話が来て、愛子が大怪我したって聞いたときには、お母さん目の前が真っ暗になったわ。それにしても、あんたいつからそんな仕事するようになったの？」

何故鉄塔に登っていたのかと訊かれ、愛子は言葉を濁した。桜井との約束で、自殺の件は誰にも言わないことになっている。

「ねえ、愛子は事務員じゃなかったの？」

家族は仕事中的事故だと思っっているみたいだった。それならそれで、別にかまわない。作業員という肩書きをもらっている以上、あながち嘘でもない。

心配かけたことを謝ると、二人の表情が曇った。

「実は昨夜、お父さんがあんたの上司をえらい剣幕で怒鳴りつけて、おまけに殴っちゃったから……」

ええ！

話を聞いて愛子は真っ青になった。

なんだかんだと世話を焼き、母たちは夕方まで居てようやく帰った。家族が来てくれるのはありがたいが、出来ればもっと静かに寝かせておいて欲しいものだった。

ようやく静かになったので、少し眠ろうと思い、愛子は痛む胸を庇いながらベッドの中で横向きになろうとした。

「いつ……たあい……」

どこに力を入れても痛い。布団の中で呻いていると、開け放したままのドアからやかましい声が聞こえてきた。

「おい、ここだぞ」

「奥田、うるせえよ。静かにしろっ！」

騒音ともとれる足音を響かせて、工事課の同僚がどやどやと入ってきた。

腹と胸が痛いというのに、五人の同僚たちは散々愛子を笑わせた。まるで拷問だ。特に奥田は、同室の入院患者も巻き込んで、お笑いのネタを披露しては、相変わらず非常識なお子様ぶりを発揮していた。「しかし、びっくりしたよ。無線とつたら、いきなり『助けて』だもんな」

笑いがおさまると、河合が愛子を真似して甲高い声を出した。勝手にスイッチが入ってしまったのだと弁解したが、あれがなければ今頃は死んでいたかもしれない。河合と愛子の無線を、氷室が事務所内の無線台で聞いたのだ。彼は不審に思い、プレハブを出たところで屋上の愛子たちを発見したのだという。

「本館の鉄塔に桜井さんがぶら下がっててさ、その陰から愛子さんの足が飛び出でて、俺は一瞬どうなってるのかわかんなかったよ」

あのと時助けに来てくれた奥田が、身振り手振りを交えて面白おかしくしゃべった。

彼らの情報によると、桜井は右腕数ヶ所に複雑骨折を負っていて、明日手術を受けるのだそうだ。あの細腕一本で鉄筋にひっかかっていたのだから、仕方がなからう。彼女を支えたせいで、愛子だって

ひどい有様だ。

桜井の自殺未遂については、誰にも言わないと約束してしまったので、会社の人間には本当のことを言うわけにいかない。愛子は仕方なく嘘をついた。屋上で勝手に昇降訓練をしていて、たまたま桜井も挑戦することになった。そして二人で登ったのだ、という苦しい言い訳を考えた。

皆が信じたかどうかはわからないが、本当のことを言えないのだから仕方がない。

愛子は何気ないふりをして、一番気になることを尋ねた。

「あの、氷室主任は？」

「え、ああ、たぶん後から顔、出すんじゃないかな」

答えた野口の背後で、奥田と河合がなにやら目配せしたのがとても気になった。

腹部を手術したので、明日いっぱい絶飲食だ。それなのに、同僚たちは愛子の枕元に美味そうなお菓子や果物を大量に置いていつてくれた。愛子は涙目で高級スイーツの箱に目をやった。笑わせたり、泣かせたり、本当に親切な人たちだと思った。

彼らが帰ってしまうと、愛子はトイレにいきたくなった。ナースコールをすると、現れた看護師は空になった点滴を外して冷たく言った。

「もう歩いて平気だから、ひとりで行ってください」

「は、はあ……」

先生は安静って言ったじゃないか！ 心の中で文句を言いながら、懸命に身を起こす。

「痛った〜い」

力を入れた途端に、胸が痛んだ。あまりの激痛に耐えかねて、ベッドの上でのた打ち回っていると、誰かが手を貸してくれた。

「すみません」と愛想笑いで見上げると、よく知っている顔だった。

「よお、おチビ。具合はどうよ？」

いつもどおりの飯田の笑顔にホッとする。

彼は愛子を支えながらトイレまで連れて行ってくれた。さらに飯田は女子トイレの前で、終わるのも待っててくれた。

「ありがとう、助かった」

なんとも情けないが、来てくれたのが飯田でよかったと思った。

飯田はオレンジのリボンが付いた可愛いフラワーアレンジメントを愛子の枕元に置いた。

「わあ、かわいい」

黄色とオレンジのミニひまわりと、真っ白のカスミ草がふんだんに使われている。彼はやはり工事課のメンバーと違ってセンスがいいな、と愛子にはっこりした。

さっきまで河合たちが来ていたのだと言うと、飯田は「知ってる」と言った。

「さっき来たんだけど、ずいぶん賑やかだったから後にした」

二回も足を運ばせてしまったことが、何だか申し訳ない気がした。

「氷室も……やつらと一緒に来た？」

愛子がかぶりを振った。

「今日は来てないよ。昨日来てくれたらしいんだけど、うちのお父さんが主任のこと殴ってしまったらしくて……」

愛子は泣きたくなくてきた。動けるものなら、今すぐにでも謝りに行きたいのに。

「主任は悪くないのよ」

愛子の言葉に、飯田はふんと鼻を鳴らした。

「でもさ、アイツ、時間中に居なかったそうじゃないか。監督不行届きってやつだろ」

それはそうだが。でも、愛子が会社に居ながら自殺現場に巻き込まれるなんて、誰に予想できたというのか。

飯田がどこか面白そうな顔で言った。

「なんか、今日の役職者会議はすごいことになってたみてえだよ。うちの課長が面白がってしゃべってた」

「なんて？」にわかに不安になる。

「総務課長と工事長が吊るし上げられてたつてさ。特に工事長が悲惨だったらしいよ。奥田のことや、お前の座禅のことも蒸し返されて……。なんたつて、氷室がどっか行つちまったらしいから、工事長ひとりで……」

「ええ？」

愛子の声に、飯田は「しまった」という顔をしたが、結局彼らしくない捨てゼリフで締めくくつた。

「へっ、無責任な男だよ、あいつは」

愛子は飯田の整つた顔をまじまじと見た。

「ねえ、飯田くん。主任、何かあつたの？ どこかへ行つたつて、どうということ？」

飯田はパイプ椅子に深く掛けなおすと、言いたくなかつたんだけど、と前置きした。

「氷室、今日、会社に来てねえんだ。無断欠勤だつてさ」

え……。？ 無断つて、どうということ？

飯田は自分の前髪をうつとうしそくに掻き乱した。

「飯田くん？」

彼は愛子の目を見ないようにして言つた。

「昨日の夜、俺、この近くで氷室を見たんだ」

昨夜……？

昨夜氷室が来てくれたことは母親から聞いている。そして父が殴つたのだ。でも、飯田が氷室を見たならば、昨夜も飯田は病院に来てくれたということだ。愛子はそのことによりかなり動揺したが、とりあえず顔に出さないようにして先を促した。

「氷室、ひとりじゃなかつたんだ。あの女性と一緒に病院に来てた」
愛子は目を見開いた。あの女性とは、つまり居酒屋で見た彼女だ。会社に来て、氷室に泣きながら抱きついた女性。

「部下の見舞いなのに……。しかも女連れで見舞いに来て、次の日無断欠勤つて、なんだよ！ なんか俺、そついうの……。許せない」

飯田は吐き捨てるように言つと、カバンをつかんで静かに病室を

出
て
行
っ
た。

氷室の過去

翌日は配電課の相良みつ子が見舞いに来てくれた。電気工事士の資格試験問題集が彼女の手土産だった。まったく相良らしいと思った。彼女が来てすぐに事業所の長である所長と、愛子の部署の責任者の工事長がそろって現れた。愛子は緊張のあまり、頭痛がしてきた。たまたま相良が居たので、その場が白けずに済んだが、偉い人たちの見舞いはもう遠慮したいと思った。

それよりも、一番来て欲しい人物が現れないことが、愛子をひどく落ち込ませた。

何故氷室は来てくれないのだろうか？

初日に父に怒られたからといって、それで顔を出すのをやめてしまっなんて、あんまりだと思った。しかも無断欠勤など、氷室らしくないし、社会人としても有り得ないことだと思う。相良の話では、今日も姿を見ていないとのことだった。

いったい彼はどうしてしまったのだろうか？ 何か事情があるにせよ、父親のことや自分が迷惑を掛けたことを謝りたいと、ずっと思っているのに。

悶々と考え込んでいたとき、軽いノックがしてベッドのカーテンがふわりと揺れた。

そちらに注目していると、カーテンからほっそりした女性が顔を覗かせた。

「あの、こんにちは」

愛子は女性の顔を凝視したまま固まった。

「こ、こんにちは」

慌てて挨拶を返す。

女性は笑みを浮かべて一歩、二歩と近付いてきた。ふわりと香水が薫った。二十代後半くらいの美人。居酒屋。夕方の駐車場。タクシーに乗り込む二人。イメージがピタリと目の前の女性に重なった。

氷室さんの彼女だ。

「ここは、どこの病院でしたっけ……？」

愛子はドキドキする胸を押さえて妙な質問をしてしまった。

女性は、肩までの髪を揺らして小首を傾げたが、すぐに答えてくれた。

「S大学附属病院ですよ」

軽トラックで追いかけたときのことが、ありありと甦って来た。

S大病院といえば、この女性と氷室が向かった行き先だ。その病院に、今自分が入院しているとは。

何か用事があるのだろうか。女性は愛子を見下ろしてそのまま佇んでいる。

「あの……あたしに、何か？」

愛子はおずおずと声をかけた。女性は口を閉じたり開いたりしていたが、ようやく声を出した。

「あの、氷室くんから聞いたものだから、気になって様子を……」

「え……？」

いったいどういうことだろう？ 見舞いにも来てくれないのに、どうして氷室はそんな話をしたのか。しかも、自分の彼女に職場の女の子の話をするなんて。

ドジな女の子が居てさ、困っちゃうよ。

まさかと思うが、そんな風に話のネタにしていたのか？

何だか気分が滅入ってきた。それと同時に、不愉快な気持ちが湧いてくる。彼からどんな話を聞いているのか知らないが、とりあえず初対面なのだ。礼儀というものがあるだろう。

「あの、いったい、どちらさまですか？」

愛子は自分の口調に驚いてしまった。今のは、物凄く棘のある言い方だった。

女性はハッとしたように名乗った。

「あ、申し遅れました。私は皆川葉月といいます」

数分後、愛子は何故か車椅子にさせられて、病院内を移動していた。皆川葉月は愛子の車椅子を押しながら、「内科病棟に行きます」と言った。

愛子は背後の彼女を意識した。

彼女は「会っていただきたい人がいるんです」と言い、借りてきた車椅子に半ば強引に愛子に乗せて、連れ出したのだ。身動きがとれないだけに愛子は何だか不安になってきた。

二人は渡り廊下を渡り、奥のエレベータに乗った。三階で降りると内科病棟と表示が出ていた。消毒薬の臭いの廊下を進みながら、皆川葉月がようやく言葉を発した。

「ここには主人が入院しているの」

「え？」

愛子は肩越しに振り向こうとして、胸を押さえた。痛みで思うように体が動かせない。首だけで振り向いたが、白っぽいサマーニットが見えただけだった。皆川葉月はそれきり何も言わずに車椅子を押して廊下を進んだ。

いくつも病室を通り過ぎて、一番つきあたりの個室の前で止まった。

愛子は個室の名札を見た。そこには薄くなった文字で、愛子の知らない男性の名前が書かれている。

『皆川勝弘』

いったい彼女はとうとうつもりで連れてきたのだろうか？

皆川葉月が白いドアを開けた。

「あ……」

中を覗いた愛子は、小さく声を上げた。

病室の中に氷室が居た。紺のスーツを着てベッドの近くのパイプ椅子に座っている。無断欠勤していると聞いていたが、まるで会社に行くような恰好だった。

振り向いた彼も、愛子を見て固まっていた。

氷室の目が動き、愛子を通り越して背後に注がれた。絞り出すよ

うな声。

「葉月……どうして？」

「上田さんの病室に行けないみたいだから、連れてきて差し上げたのよ」

皆川葉月のやわらかな声が、愛子の頭の上から降ってきた。

「しゅ、主任。あの……」

氷室が椅子から立ち上がった。愛子の背後から、彼女がふっと離れてゆく気配がした。

「葉月、いったいどういふつもりだ？」

氷室の問いかけには答えず、カチャとドアが開く音がして、皆川葉月の声がした。

「氷室くん、いつまでもここに逃げ込んでいないで、きちんと目の前の彼女を見なさい」

そして、愛子に向かって、言葉を添えた。

「主人のことは気にしないで。彼、しゃべりませんから」

愛子の背後でパタンとドアが閉まった。

立ち尽くす氷室の背後から、ブラインド越しに午後の陽射しが差し込んでいる。柔らかな光は、病室内を何もかも白く照らした。その中で、窓辺に飾られた真つ赤なバラだけが、強烈な色彩を放つ。

「あの……」

愛子は声をかけた。彼女の頭上をスルーしていた氷室の視線が愛子をとらえた。

氷室のそばに移動しようと思ひ、車椅子の車輪を握った途端にまた激痛が走った。

「うつく……」

痛む胸を押さえて車椅子の中で前かがみになると、氷室が飛んできて、愛子のそばに跪いた。

「上田さん、大丈夫？」

心配そうに覗き込む彼に、愛子は懸命に頷いて見せた。

「やっぱり、お父さんが殴ったせいですか？」

「え？」氷室が首をかしげた。

「私の病室に来なかったのは、そういうこと……ですよね？」

愛子は氷室を見ながら問いかけた。愛子の父に殴られた彼の目許は、腫れは引いていたが、黒ずんでいる。

「ごめんなさい。私のせいなのに、お父さん、ひどい事しちゃって……。本当に、ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げて、愛子は心の中でため息をついた。

いったい自分は何回この人に謝るのだろうか。

顔を上げると、氷室の切なげな眼差しと出あった。彼は愛子を見下ろすと、つらそうな表情になった。

「悪いのは、俺のほうだ。キミのお父さんに殴られて、怒鳴られた。『何でうちの娘が鉄塔に登らなくちゃいけなかったのか』と。俺、何も言えなかった。会社の方針だと言つて、事務員であるキミを作業員にしたのは俺だ。作業員になったら、当然リスクが増す。そのことを、キミとキミのご両親にきちんと説明しなければいけないのに」

「でも、今回ののはあたしが勝手に！」

大きな声を出すと、胸に響く。愛子は顔をしかめて言葉を切った。氷室はいたわるように愛子の背中をさすった。少し痛みがやわらぐ。「作業中であろつとなかうと、そのうちキミも感電事故にあうかもしれないのに。なのに俺は。感電して、鉄塔の上で。だから……」

愛子はハッとして彼のほうを見た。氷室の声が震えている。見るとその顔は血の気が無い。何だか様子がおかしかった。

「主任、あたしは感電してませんよ。主任？」

氷室は愛子の顔をじつと見て、口を開いた。声がかすれている。

「違うんだ。……ごめん、いや、そうだよ。すぐに会いに行けばよかったんだよ。こんなところでぐずぐずしてて。ごめん……ほんとうに、ごめん……」

彼は声を震わせて、下を向いた。愛子はドキリとした。

氷室さん、泣いてる？

「主任、なんか……ちょっと、あたしが言うのもヘンですけど、大丈夫ですか？」

氷室は深呼吸のように大きく息を吸うと、頷いた。

「……でも、よかった。こうしてしゃべれるんだから。本当に、よかった」

氷室は下を向いたまま両手で愛子の手を握った。大きくて温かな手のひらを通して、なんとなく彼の思いが伝わってくる気がした。疎まれていたわけじゃなかった。それがわかっただけで、ホッとする。

愛子は氷室から病室内へと視線を移した。

頭を窓の方にしてベッドに横たわった男性は、鼻に酸素のチューブが装着されている。男性は眠っているようで、微動だにしない。静かな病室内に枕元の機械から、ピッピッと電子音だけが規則正しく聞こえてくる。

この男性が皆川葉月の夫だということは、彼女と氷室は本当にただの友達なのだろう。だが、何故氷室はここに？

愛子はベッドに横たわる男性を良く見ようと首を伸ばした。ずきんと胸が痛む。

「皆川さんの、ご主人……眠っていらつしやるんですか？」

胸の痛みに顔をしかめながらも問いかけると、氷室が身を硬くした。彼は愛子の手を離すと大きく息を吐いた。

「皆川は俺の後輩だ。もう四年になる。ずっと眠っている」

それって……？ 愛子はごくりと唾を呑んだ。

「先日から容態が悪化して、出来る限りこちらに来るようにしてたんだ」

皆川勝弘氏は植物状態だった。彼の生きている証は、生命維持装置の電子音と、ブーンというモーターの音だけだ。

何故、皆川の妻は、愛子をここへ連れてきたのだろうか。氷室に会わせるためだけじゃない、そんな気がする。彼女が会わせなかった

たのは、氷室ではなく、たぶん、目の前の男性患者なのだと思った。昼下がりの病室に、沈黙が降りてきた。

愛子は恐る恐るその沈黙を破った。

「皆川さんは、どうしてこんなふうに？」

氷室はじつと後輩の顔を見ていたが、やがて無表情になって言った。

「きちんと話すよ。今、ここで。……皆川も聞いているから」

彼は愛子に顔を向けた。瞳が潤んでいるのは気のせいだろうか。植物状態の後輩と、氷室の間に、いったい何があったのだろう。

氷室はパイプ椅子を引き寄せて愛子のそばに座った。やわらかな陽射しの差し込む病室は、再び時が止まったように静けさに包まれた。

「皆川がこうなったのは、俺のせいなんだ」

氷室は遠い目をして語り始めた。

その事故は、電流を流しながらの活線作業中に起こった。

発雷警報が出ており、大粒の雨が叩きつけるように降っていた。

氷室は班の責任者である班長の立場から、作業の中止を判断し、今まさに高圧線上で作業中の作業員たちに指示を出したところだった。「そのままの状態で、防護管を被せて一時車輛内に避難しろ。雨が小降りになったら工事を再開する」

すると鉄塔に登っている後輩から無線が入った。

「氷室さん、やっちゃいましたよ。俺、早く終わらせたいんですよ」

「また皆川か。無理するな。雷も鳴ってるし、雨で滑り易いから、危険だぞ」

「平気ですって。嫁さんと待ち合わせだから、遅れるとどやされるんだよな」

「おいおい、そんなことくらい何だよ。班長の俺よりかみさんのほうが怖いのか？」

冗談交じりで作業の中止を催促したが、彼はなかなか降りてこなかった。業を煮やした氷室は自ら高所作業車のバケットに乗り込んで、皆川の元へ近付くために鉄塔に乗り移った。

と、その時だった。

落雷と共に、閃光が目を焼いた。体に衝撃が走り、右腕を痛みが襲った。

浮遊感と同時に、腰の辺りに負荷がかかる。

「な、なんだ？」

ほんの一瞬の出来事で、気がつけば腰の安全帯ロープでもって、鉄塔にぶら下がっていた。遥かな下界から、作業員たちの悲鳴が上がる。

不安定な状態で、腰に固定した命綱の安全帯ロープを頼りに、宙吊りから体勢を立て直そうともがいた。何故だろう？ 右腕が動かない。それでも左手一本でようやく安定した体勢になった。

「氷室さん！ 氷室さん！ 早く！」

激しい雨音に混ざって、下から作業員たちが怒鳴っている。彼らは自分よりも上を指差していた。

嫌な予感に振り仰ぐと、頭のすぐ横に青い作業着がぶら下がっていた。

「皆川？」

初めて目にした感電事故だった。焦げたような異臭が漂う。腰のロープと、ナス管と呼ばれるザイルに似たフックにつながるワイヤーだけで、皆川は鉄塔にぶら下がっていた。

どうやって助け出したのか、まったく覚えていない。ぐったりとした皆川を抱いて地上に降り立ったとき、自分も感電していたことに初めて気付いた。電流が皆川の足を介して、右肩から入って右の小指に抜けたらしく、右腕全体が真っ黒になり、小指の先が吹っ飛んで無くなっていた。

皆川はすぐに救急車で運ばれたが、重体だった。医者は、命があったのが奇跡だと言った。感電による熱傷は、見た目より体内のほ

うが損傷しているのだという。不幸が重なった事故だった。落雷に気を取られた彼は、うっかり手にしていた工具でむき出しの線に触れてしまったのだ。もう作業を中断する予定だったし、雨で手元が滑ると言って、絶縁仕様の手袋を外してしまっていたのも感電の原因だった。一命を取り留めたものの、それ以来、彼はずっと昏睡状態が続いているのだという。

「皆川は、当時結婚したばかりだった。幸せそうな二人を見るのが俺は好きだった。二人とも俺の大切な友達だったんだ」

そう言って、氷室はベッドに眠る後輩を見てから目を伏せた。

愛子は氷室の右手を見やった。この小指には、そんな悲しい過去が隠されていたのか。

でも……。

今の話は、どう考えても事故だ。目の前で後輩が悲惨なことになって、ショックを受けたのはわかる。でも、それが直接氷室の責任だとは思えない。

愛子が思ったことを口にすると、氷室は弱々しくかぶりを振った。「責任者らしく、もっと強引に作業中止を命令すればよかったのに。だから、俺の責任だ」

苦しげに言う氷室を見て、愛子は初めて彼と会ったときのことを思い出した。発雷中の表示や、活線作業のことをひどく気にしていたつけ。

「あの事故の後、初めて皆川の病室に入ったとき、俺は震えが止まらなかった。ほんの数時間前まで軽口を叩いて笑ってたやつが、真っ黒こげで……」

氷室はベッドの皆川氏を見やった。男性は頬がこけていて、顔色が黒ずんでいる。

氷室は愛子に切なげな目を向けた。

「あの日、鉄塔の上でぐったりしたキミを見て、急に皆川のと看することが頭から離れなくなった。もしも病室に入ったときに、キミが彼のように目覚めなかったらと……」

氷室は言葉を切って俯いた。彼は思い詰めた様子で自身の膝の辺りを見ながら、ぼそぼそと囁くように言った。

「……キミの病室へ入る勇気がなかったんだ。ごめん」

愛子はどうしたらよいのかわからずにぼんやりと氷室を見ていた。自分の無茶な行動が、彼を傷つけてしまった。彼のトラウマを呼び起こしたのだ。だから氷室は取り乱して会社へ行けなかったのかも。しれない。

いつだったか、飯田が言った。

氷室は、前に部下を一人再起不能にしてる、と。

でも、そうじゃなかった。皆川だけでなく、その事故で氷室の心も再起不能になっていたのだろう。今でも彼は心を痛めている。それでも、また作業員を束ねる仕事につかなければならなくなってしまった彼を、愛子は気の毒に思った。

なんとか彼を元気づけることができればいいのに……。そう思ったら、体が勝手に動いていた。

「主任、見て。あたしは、大丈夫ですよ」

そう言って、愛子は車椅子から立ち上がった。彼と皆川氏の間割り込んで、ぴよんぴよんと飛んで見せる。折れたあばらに響こうが、腹部が引きつれようが、気にしちやいられない。

氷室さんのためだもの。

氷室がポカンと口を開けている。

「ね、主任。あたしは、鉄塔からぶらさがっても、こうやってピンピンしてるから」

「う、上田さん……？」

呆気にとられたままの氷室に、愛子は出来る限りの笑顔を見せた。「あたしは、皆川さんとは違うから。ね？　だから、今までどおりの主任に戻ってください」

氷室の目が大きく見開かれた。

「あたしが職場復帰したら、また部下としてびしびしお願いします」こめかみに汗が流れた気がした。でも、大丈夫。……たぶん、大

丈夫。

「上田さん、静かにしないと」

氷室の表情が、悲しげじゃなくなった。もうひと頑張り。

「うん、ご心配なく。すぐに退院しますよ。そしたら大型免許とつて、電気工事士とつて、忙しいですよ」

「上田さん」

あ、氷室さんってば、眉間にシワが……。あれは悲しい顔じゃないよね。

「鉄塔だつて、また登ります。大丈夫。一回痛い目に遭つてますから。慣れつてやつですよ。高い所、案外気持ちよかつたし」

「上田さん」

そうそう、この顔。いつも奥田くんたちを叱り飛ばすこわい主任。

「だからまた、部下としてよろしくお願いします。あたしには、主任が必要なんです。お願い、どうか元気だして」

「愛子！」

ふわりと抱き上げられて、愛子は息を詰めた。間近に氷室の怒つたような顔がある。人生で二度目のお姫さま抱っこというやつだった。前は、二日酔いの頭を抱えて座禅をやり、ゲロゲロになったときだ。みんなの注目の中、お寺の境内を氷室に抱きかかえられて車まで運ばれた。あのときは予想に反して怒られることは無かつたが……。

やばい。今度こそ、叱られる？

上目遣いで見つめていると、押し殺したような低い声で言った。

「頼むから、もうムチャはやめてくれ」

怒った氷室の顔が歪んで、泣きそうになっている。目を合わせて愛子はうろたえた。

うそ！ 見つめ合う顔が近い。体温が上昇して、心拍数が跳ね上がった。自分自身の鼓動がやけに大きく聞こえてきて、愛子は思わず嘘をついた。

「しゅ、主任、傷が痛いよ」

ふっと彼の表情がゆるんだ。

「……ごめん」

氷室は愛子をそつと車椅子に乗せると、皆川氏の眠るベッドに近付いた。枕元まで行くと、彼は後輩の顔を見ながら言った。

「じゃあな、皆川。……また来るから」

氷室に車椅子を押してもらい、病室を出ると、すぐの廊下に皆川葉月が居た。

「今度こそ、吹っ切れた？」皆川葉月は優しい声で言った。

「ああ、たぶん……」氷室が低い声で返す。

彼女は目頭を押さえながら、静かに言った。

「この間は、つい取り乱しちゃって、会社まで押しかけてしまったけれど、何とか持ち直したの。だから、こちらはもう大丈夫よ」

愛子は黙って二人のやりとりを聞いていた。

先日この病院に皆川葉月と共に氷室が来た理由は、皆川氏の容態が急変したために違いない。きつと飯田が見た日も、愛子の見舞いの後に寄つたのだらう。不幸な事故で眠つたままの後輩。目を閉じて横たわるその姿を見て、四年もの間自分を責めてきた氷室。

「私も、氷室さんの優しさに甘えているところがあった。でももう寄りかかったりしない」

そう言つて、皆川の妻は微笑んだ。

「とても頑張り屋の女の子が居るって、あなた話してくれたでしょう？ そのとき私、ホツとしたのよ。楽しく仕事をしているんだって思つたから」

彼女の言葉に、氷室は慌てたように咳払いをした。皆川葉月はクスツと笑つと、愛子に向き直つた。

「氷室くんを、よろしくお願いしますね。もうそろそろ、この人、幸せになつてもいい頃だから」

愛子は意味がわからずに首をかしげた。

「余計なこと、言うな」

無然とする氷室の声を無視して、皆川葉月が朗らかに言った。

「言っときますけど、私と皆川が不幸せだなんて、勝手に決めないでよ。皆川の顔を見て、気持ちを引き締めるならばそれでいい。だけど、私の大事な夫の顔を見て、また自分を責めるようなら、もうここには来ないでちょうだい」

さあ、行った行った！ と、皆川葉月は廊下の向こうを指差して、さっさと病室に引っ込んでしまった。

愛子と氷室は、個室の前の廊下で顔を見合わせた。

「私、あのひとに連れてこられたんですよ？　なのに……どうして？」

思わず呟くと、氷室がプツと吹き出した。

「主任……？」

怪訝そうな顔で見上げた愛子の頭を、温かな手のひらがくしゃつと撫でた。

氷室は愛子を病室まで送ってくると、軽々と抱き上げてそつとベッドに寝かせてくれた。

彼女の体に毛布を掛けて、氷室は静かな声で尋ねた。

「ひとつ、聞いてもいいかな。桜井さんとあそこに登ってたのは、本当にキミが話したとおりの理由なの？」

愛子はドキリとした。本当のことを話せば、桜井との約束を破ることになる。どうしたらいいものかと口をつぐんでいると、氷室が言った。

「考えたんだけど、この間の事故のとき、上田さんだけ先に帰らせたでしょう？　だからかなって」

「え？」意味がわからず、愛子は氷室の顔を見上げた。彼はじつと愛子の目を見ながら言った。

「あのとき、女性だからという理由で帰らせたから。女性でも柱に登れるぞっていう、その、会社の方針に対する……いや、俺へのメ

ツセージかな、とか思ってたさ」

「違います！」愛子がかぶりを振った。

とんでもない！女性の職域拡大云々などという、そんなたいそうな志など、かけらもないのだから。愛子は即座に否定したが、氷室は釈然とせぬ顔つきだった。

それ以上は追及されなかったが、去り際に彼は愛子の鼻先に指を突きつけて言った。

「とにかく、もうムチャはしないで、早く元気になること。いいね？」

いつもの氷室らしい顔つきに戻っていたので、ホッとした。愛子は大きく頷くと、病室を出てゆく彼の背中を見送った。

最終話

翌日の午後、愛子は退院した。

母親と共に正面玄関に出ると、帝都電力のロゴ入りのバンが横付けされた。

「うそ！」愛子は驚いてしまった。

運転席に氷室がおり、助手席から工事長が手を振っていた。

「愛ちゃん、会社の人がお出迎えしてくれるなんて、あんだ、可愛がられてるのねえ」

母親は単純に感激しているが、そんなはずがない。愛子は眉根を寄せた。

お出迎えの理由は、後部座席に乗り込んだ途端にわかった。

「ええ？ 自殺未遂？」愛子の母親が絶句した。

佐々木工事長が助手席から身を乗り出すようにしてしゃべり出した。どうやら、桜井園子が会社の上司に本当のことを話したらしい。「このことは、ごく一部の関係者だけの秘密になっています。まあ、桜井さんも事件を起こしたとはいえ被害者ですからね。騙される方が悪いとはいえ、本人も深く傷つき、また、反省もしていますから、どうか穏便に」

顔をくしゃくしゃにして涙を流していた桜井を思い出して、愛子は気の毒に思った。心の痛みなんて、結局当人にしかわからないのだ。桜井のことも、そして氷室のことも。

「上田さん、本当によくやったね。桜井さんのご両親が、そのうちお礼に伺うと言っていました。所長も明日ご挨拶に伺いますから」

工事長の褒め言葉は、なんだか愛子を居心地悪くさせた。ふと前を見ると、バックミラー越しに運転する氷室と目が合った。桜井に口止めされていたとはいえ、本当のことを言わなかったから、なんとなく気まずい。工事長と母親がやかましくしゃべるそばで、愛子は俯いて小さくなっていた。

久しぶりに自分のベッドで睡眠をとり、すっかり寝坊してしまった。慌てて枕元の目覚ましを見てから思い出した。あと数日は自宅療養だから、会社に行かなくてもいいのだった。すっかり会社人間の体質になっっているな、と愛子は苦笑した。

Tシャツとジャージに着替えて階下に降りてゆくと、祖母がキッチンで洗い物をしていた。

「愛ちゃん、おはよう。ごはんできてるわよ」

「おばあちゃん、お母さんは？」

「今日はお父さんと優子と三人で出かけたわよ。優子の受験する大学を見に行くんですって」

「大学って？ あたしと同じ、短大じゃないの？」

祖母は「知らない」というように首をかしげた。

妹は高校三年生だ。成績も悪くないから、愛子と同じ女子短大ならば、何の問題もなく入れるだろうに。姉と同じ道を辿るのが嫌なのだろうか？ まあ、姉のこんな姿を見れば、彼女の気持ちもわからないでもないが。

「そっか、誰もいないのか……」

入院のせいで、生活のリズムが乱れている。今日は何曜日かな？ などと考えながらテレビのスイッチを入れようとすると、来客を告げるチャイムが鳴った。

「こんにちは！」

インターフォンから明るい女性の声がして、愛子はビクンとした。「さ、桜井さん？」

玄関に桜井園子が立っていた。左手に大きな包みを抱えている。彼女は半袖ブラウスの下から覗いている、包帯ぐるぐる巻きの右手を見せて言った。

「すみません、これ、受け取ってもらえる？」

ぼうつとしていた愛子は、言われてようやく動き出した。彼女の

左腕から大きな菓子折りを引き抜くようにして受け取った。

「あの、先日は大変ご迷惑をお掛けしました」

そう言ってぺこりと頭を下げた桜井の背後で、背の高い男性が嫌そうな顔をしている。

「な、なんで？ 飯田くん……？」

飯田は顔をしかめて長い前髪をかきあげた。

リビングに通された二人は、ちよつと隙間を開けてソファに座っていた。

「よかったわ、上田さん。思ったよりずっと元気そう」

桜井は品の良い笑みを浮かべて言った。

「桜井さんこそ。大丈夫なんですか？ 包帯ぐるぐるで、右手動かないでしょう？」

「ああ、うん。肩からいつちゃってるから。伸ばしたままで二箇所、ボルトで固定してるの。でもね、おかげさまで一週間後から会社に行けるわ。同時にリハビリも始めるの」

「リハビリで元通りになるのよ」と彼女はなんでもなかったように笑った。

複雑骨折でも、そんなに早く社会復帰出来るのかと驚いてしまう。でも良く考えたら、愛子だって手術の翌日には、自分で歩いてトイレに行くように言われてしまったのだから、人間の体ってすごいと思う。

「おチビはいつから復帰？」

それまで黙っていた飯田が口を開いた。

「あ、ああ、あたしも一週間後から」

ソファに並ぶ二人を交互に見ていたせいだろう。桜井が頬を赤らめながら言った。

「あ、今日は無理矢理飯田くんに連れてきてもらったの。私、上田さんの家知らなかったから、彼に尋ねたのよ。そしたら親切に連れてきてくれて……」

「オレのアパートの前で、タクシー運転手とケンカしてやがったじやねえか」

飯田が嫌そうに言う。

「あ、あれは、あの運転手が悪いのよ。おつりをちゃんと渡してくれないから。だって、あたしはこのとおり右腕が使えないのよ。それをあのオヤジったら……」

「何もみぞに落ちた十円玉まで拾わせなくても……」

「だって、もったいないじゃない。あたしはお金が無いのよ。三百万も騙し取られて」

「あ、あの〜」

ともすると、夫婦漫才のような飯田と桜井に毒気を抜かれ、愛子はおずおずと声をかける。とにかく桜井が元気なことだけは、よくわかった。

「桜井さん、そういえば辞表は？」

職場復帰と聞いて、気になっていたことを尋ねると、彼女は大きく頷いて言った。

「あれ、まだ処理されていなかったから、課長に捨ててもらったの。うちの課長、いつも仕事が遅くてイライラしたけど、今回だけは助かった」

桜井はケロリとしている。そんな彼女を見て、飯田がたしなめた。「おいおい、自分の上司に対してそれはないだろう。職場復帰したら、きちんと謝れよな。メーワクかけてんだから」

「わかってるわよお。飯田くんに言われなくても、そのくらい」

飯田に向かってぶうと膨れる桜井を見て、愛子はホッとした。どうやら結婚詐欺事件のショックが薄れるのも時間の問題のようだ。

「休みの間退屈だから、また来るね」

そう言つて、桜井は飯田に引きずられながら帰って行った。

愛子は少々疲れた笑顔で見送った。勝手に来て、勝手にしゃべっている桜井に、完全に圧倒された。さっきだって、飯田が「帰らないと置いていくぞ」と脅さなければ、あと三時間ぐらい、詐欺師の

彼氏のグチをしゃべり続けていたに違いない。

それでも、桜井と飯田の顔を見たせいか、早く会社に行きたくなってきた。

「会社なんて大嫌いだったのに、不思議だね」

テレビの前でお茶を飲んでいる祖母に言つと、笑って返された。

「学校だって会社だって、人間関係が円満ならば、これ以上の幸せはないのよ。愛ちゃん」

*

退院後、一週間の自宅療養ののち、愛子は職場復帰した。

せっかく単独運転の認定をとったのに、大型免許取得も先延ばしだ。しばらくは今までどおりの扱いになつてしまふ。少々不満ではあるが、仕方がない。

始業のチャイムが鳴ると、愛子はヘッドセットマイクを装着した。

「上田さん、役職者会議、行ってきますね」

愛子に声をかけて、工事長がプレハブの事務所を出て行つた。

シンとなつた事務室内には愛子と氷室が取り残された。退院後、氷室は何度か見舞いに来てくれたが、必ず職場のメンバーと一緒にだったので、あれ以来個人的に話をするチャンスは無かつた。

つらい過去を打ち明けてくれて、愛子を本気で心配してくれた氷室。自分の勘違いかもしれないけれど、もしかしたら彼に対する思いを諦めるのはまだ早いのもかもしれない、とそんなふうに思えてきた。

ぼんやりしていると無線が入つた。スイッチを押して応答する。

「帝都一、感あり、どうぞ」

感度良好だ。久しぶりの無線は緊張する。

『出向準備完了です、どうぞ』

「了解です。気をつけて作業願います。帝都K以上」

スイッチを切ろうとすると、北さんのだみ声が聞こえてきた。

『こちら帝都一、ねえちゃん、今度柱登るときは、安全带ロープとヘルメットを装着しろよな！ 帝都一、以上』

「ちよっと、これ、無線だよ！」

愛子の抗議を無視して、豪快な笑い声と共に無線が切れた。

ククツと笑い声が聞こえて、振り向くと氷室が顔を真っ赤にしていた。

「主任、ひどいよ。笑いすぎです！」

怒る愛子のそばに歩いてくると、氷室はこの上もなく優しい目で彼女を見下ろして言った。

「職場復帰、おめでとう」

「あ、ありがとうございます」

急にそんなことを言われるとは思わなかったので、愛子はうろたえた。

氷室は愛子の手をとって席から立ち上がるように促した。

「来て」と言われ、プレハブの外へと導かれた。ドアを開けると、眩しい陽射しが差し込んだ。途端に駐車場から歓声が上がる。

「な、なに？」 愛子は目を瞬かせた。

駐車場の真ん中に、高所作業車が一台出ている。アームを伸ばしたバケットの上から奥田と河合が手を振っていた。

「おーい！」

愛子の背後で氷室が手を振ると、バケットからはらりと白い布が落下した。

「あ！」

それは大きな垂れ幕だった。

【上田愛子さん、職場復帰おめでとう！ 工事課一同】

朱色の文字で、書かれたそれを見て、愛子はぽかんと口を開けた。バケットの上から河合の声がする。

「ほら、やっぱり引いちゃったじゃないか。奥田、お前のせいだぞ。だからこんな学芸会みてえなこと、やめようって言ったじゃないか！」

「だって。河合さんだって、ノリノリだったじゃないっすか？」
言い返した奥田のヘルメットを、河合がげんこつで殴りつけた。
パカン！ と、気持ちのよい音が響いた。

あっけに取られている愛子に、となりで氷室が囁いた。

「まあ、あんな幼稚なことしてるけど、あれがやつらの……いや、俺も含めた工事課一同の気持ちだから。何か、ひとこと言ってやって」

氷室の言葉を聞きながら、揺れる朱色の文字を目で追っているうちに、思わず目頭が熱くなった。

「みんな……、どうもありがとう」

深く一礼した途端に、涙がはたりとこぼれて足元のアスファルトを濡らした。顔を上げ、涙を拭いて、愛子と思う。

あたしの居場所は、ここだ。

感激して涙ぐんでいると、悪ノリした奥田が、奇声を発しながら紙吹雪をばら撒きはじめた。

「あの、馬鹿。やりすぎだ！」

氷室が舌打ちして怒鳴りながら走って行った。その様子がおかしくて、愛子は自然に泣き顔から笑顔になっていた。

「おいおい、すぎえな。まるで親分がシャバに帰って来たみたいなのりだな」

いつもの書類を持って、飯田がやってきた。彼は書類の他に、総務課と書かれたダンボールを持っている。

愛子は彼に尋ねた。

「何？ その荷物」

「ああ、これ？ おチビにつて、桜井から頼まれた。ジャストサイズの作業服だつてさ」

「え、あたしの？ 桜井さん、サイズ変更のこと、忘れてなかったんだ」

ダンボールを受け取ろうとして、愛子は胸を押さえた。飯田が舌打ちする。

「ちつ、どいつもこいつも故障中で困るな。桜井なんか、人の顔見るたびに用事押し付けて。文句言えば包帯の右腕ちらつかせてさ。あんなにイイ性格だとは知らなかった。アイツは水戸黄門か。こっちはスケさんじゃねえっつーの」

クス……と愛子は笑ってしまった。なんだかんだ言いながらも、飯田の表情は楽しそうだ。元々おせっかいな男だから、使われるくらいでちょうどいいのかもしれない。

「園子お嬢さまに、『下僕』って呼ばれないだけ、まだマシじゃない？」

いつもの調子で軽口を叩くと、彼は愛子の頭にポンと手をのせて言った。

「おチビのくせに、言うねえ。それにしても、すっかりお前も工事課に溶け込んだな」

「え？」

見上げると、頭にのった彼の手が愛子の髪をくしゃっとひと撫でして離れていった。

「もうオレがかまってやらなくても、ひとりでいじけたりしないよな？」

「なにそれ、どういう意味？」

よくわからなくてつつかかるように言うと、「ははは」と笑って誤魔化されてしまった。

賑わう駐車場に爽やかな風が吹き抜けた。気がつけば入道雲は見当たらず、空はどこまでも高く秋の色に変わろうとしている。

愛子は青空の下に佇み、現場作業へ出向してゆく作業車を見送った。

「さ、上田さん、飯田くん。仕事しましょう！」

戻ってきた氷室が、日に焼けた顔で二人にはっぱをかける。

「ハイ、主任！」

「へーい、わかりました」

作業着姿の三人は、そろってプレハブに消えた。（了）

最終話（後書き）

長い物語におつきあいくださいました方、どうもありがとうございます。

これで完結です。いかがでしたでしょうか？

素人ゆえに、文章も多々読みにくいところがあつたかと思います。大変失礼いたしました。

よかった、だめだった、など、何でもよいので感想をいただけるとありがたいです。もしも好評であれば、飯田のいる料金課を舞台にした話を公開したいと思っています。

*なお、この話はフィクションです。登場する人物、企業・システムなどは架空のものです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0181m/>

作業服ガール

2010年10月8日11時59分発行